

街路樹の人

雪かきも落ち葉掃除もおたがいさま

木蔭で涼めればおかげさま

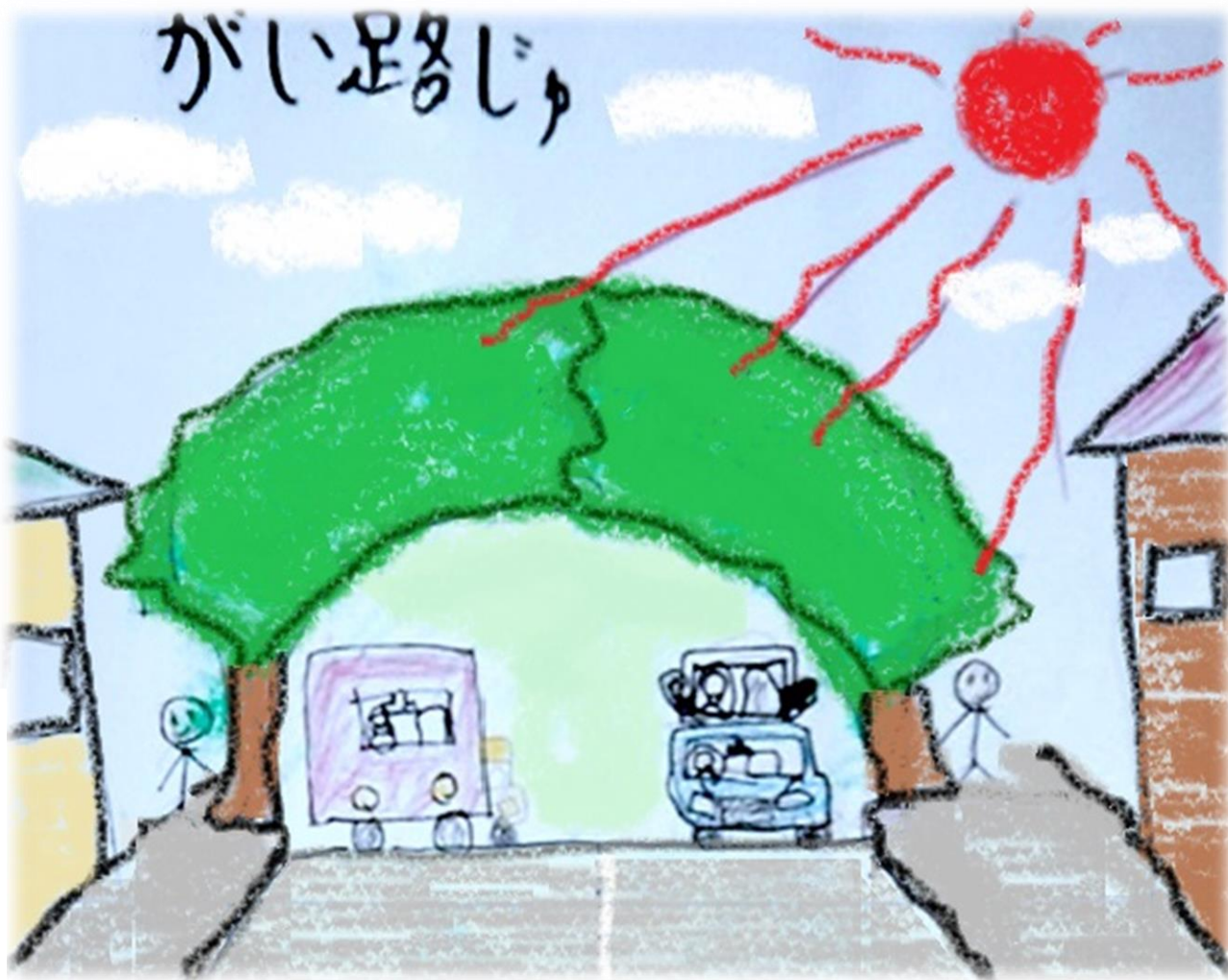


イラスト 福岡このは

まえがき

私は秋田県で植木屋をしています。

作庭を本業としていますが、地元の街路樹改善に携わってきた経緯から、世間からは「庭をつくる人」というよりも「街路樹の（活動をしている）人」と思われがちです。街路樹の仕事をしていないのに「街路樹の人」と見られたり、中には仕事はほしくてやっているんだろうと思われる方もいたり、そんなふうに見られることがとても嫌でした。

きつと、庭師として見られたい、作庭者としての評価を受けたいという欲があつたのでしょう。今思えば、本当に器が小さいと笑つてしまいます。

周囲からは、「なぜそんなに街路樹に一生懸命になっているのかわからない」と言われますが、実は言われた本人が一番わからないのです（笑）。

街路樹っていったい何？なぜこんなにも自分を引き付けてやまないのか。街路樹を見つめ続けた道のりは、そんな自分探しの旅だったのかもしれない。

この手記には、ふるさとの緑を良くしたいと活動してきたことを書いていますが、情けないほどの、失敗の連続。出れば叩かれる杭のごとく、自分が打ちのめされてきた歴史です。

そんな中で、たくさんの人と出会い、多くの方から救われてきました。「街路樹の人」と呼ばれたくなかった自分が、街路樹を救おうとして、いろんな人から救われてきた。もしかしたら、自分の未熟を見かねた街路樹のほうが、私を救おうと導いてくれたのでしょうか。

「天は自ら助くる者を助く」という言葉がありますが、「人に頼らず自分自身で努力する者には、天が助け、幸福をもたらす」のだそうです。でも、自分の街路樹人生？を振り返ると、人に頼り、助けてもらい、教えていただいていたことばかり……。

そんな私にできることは、教えてもらったことをふるさとや同じ思いを持つ方々にお返しすること。それが、助けていただいた方々へのご恩返しになるのではないか。拙文が、そんなことの一つになればと思っています。

2016年2月

植木屋 福岡 徹

街路樹の人 ― 目次 ―

第一部 植木屋の良心と誇り

街路樹前夜

街の木の異変

権威が証明してくれなければ

全国に問う

植木屋の良心と誇り

暗中の明

自由という不自由

馬鹿者になる

木は切られたいと思っていない

チャンス到来

街路樹の見学者

剪定報告書

全国の反響

奇跡のイチョウ

街路樹は枝打ち

悲しいプラタナス

市長さんに直訴

植木屋の提案

やって見せるから職人

鋏が持てない

失敗したら直せばいい

プラタナスの木の下で

街路樹の人

腕を無くした木

流れが変わる時

伝えることと伝わる時間

街路樹モデル断念

江戸川区に電話

ケヤキのトンネルがある町

街路樹剪定勉強会

街路樹モデルを試行する

◇ちよつと一服① け・ぬ・き

第二部 街路樹サミットを夢見て

さくらサミット

桜日本一の弘前へ

落ち葉はゴミか

街なかの葉っぱに逢いに行こう

小さな街路樹サミット in 能代

ブツ切り再発

「街路樹葉っぱの詩」と出会う

市長対談再び

緑の先進地視察

全国初街路樹条例の街

憧れの江戸川区

近代街路樹発祥の地

驚きの銀杏並木

緑は繋がっている

視察のおすそ分け

街路樹をやめる

◇ちよつと一服② 八郎太郎伝説

第三部 正しいことはいつか叶う

桜の質問

久喜市議団来訪

緑の基本計画策定

大ケヤキが切られる

けやき公園の兄弟

巨木の街路樹写真展

街路樹札賛始まる

美郷町の松・杉並木と学問の森

公私混合の緑

ブログからのお便り

緑の循環

雪の弘前へ

連理の桜道

白天の霹靂

わが子への手紙

あとがき

◇付録 街路樹サミット in 立川開催レポート

第一部 植木屋の良心と誇り

街路樹前夜

特に街路樹が好きだというわけではなかった。生まれ育ったのは山里の小さな集落。田舎道の両側には田んぼがあり、川が流れ、山の木々が迫っている。街なかのようにきれいな公園は無いが、田舎の子どもには山や川が遊び場。魚がいれば沢に飛び込み、アケビを見つけては森に入る。森を歩けば草原に抜け、広い草原には大きな木立がある。そして、その向こうにはまた森がある。そんな景色が、どこまでも続いていた。

今思えば、里山自体が公園であり、街路樹であり、庭だった。都会は庭と街路樹と公園を分けるけれど、山の中には緑の区別など無い。山にも野原にも木々があり、緑は途切れることなく繋がっている。どこを見ても緑色の世界。こんな環境で過ごせたことが、緑を考える時の自分の原点だ。

学生時代と修業時代は東京で過ごした。東京は、田舎とは比べ物にならないほど道に木が多い。通学や通勤、仕事の移動など、どこを通っても街路樹があった。造園を学び、造園の仕事に就いていたから、木には自然と目が向く。目は向くけれど、そんなに街路樹を意識して見たことは無かった。街路樹の植栽や管理は公共の仕事。修業先は個人庭の作庭管理が主だったから、仕事で接する機会はほとんど無い。それでも、現場に向かう途中で目にするブツ切りの街路樹は、ありえないものとして映った。こんな手入れをしたら親方やお客さんに怒られるな。同僚と、そんな話をした記憶はある。

街路樹の無い田舎で育ち、街路樹がたくさんある東京で過ごしても、街路樹にはそれほど興味を持たなかった。そんな自分が将来、地元の街路樹改善に立ち上がり、視察や取材で東京に来ることになるなど、夢にも思わなかった。どこでどう間違ったのか、それともこうなることになっていたのか、人生とは面白いものだ。

街の木の異変

帰郷して15年が過ぎた頃、自分の町（二ツ井町）と隣の市（能代市）に合併話が持ち上がった。隣市は、母親が生まれ育ったまちでもある。冬のある日に実家まで出かけた時のこと。家まで続く街路樹が、棒のようになってい

た。この街には時々仕事で来る。この間まで枝の付いていた木が、この間とは違う姿になっていた。いったい、なにが起ったのか。

隣市のやることに文句を言う筋合いはないが、このまちと合併したら、このやり方がわが町にも侵入してくる。数は少ないが、うちの町の木は木らしい姿をしていた。それが滅茶苦茶にされるのではないか。そんな思いが、頭をよぎった。それほど、この街の木々は、木とは呼べない姿になっていた。

寒空の下で歩道に立ち、目の前の街路樹を見上げる。枝が一つも付いていない木々は、隣に立っている電柱とさして変わらない。この街では、異常事態が起こっている。この異様な木を前にして、何とかしなければとの思いに駆られた。その数日後、入ったことも無い市役所で街路樹の話をしていた。これが、自分の街路樹活動の始まり、不惑の年の出来事だった。

この街にはイチヨウの木が多い。イチヨウは水分を含みやすい特性から、防火樹として用いられる。能代は戦後、2度の大火に見舞われた。うちの母親も家を焼け出され、近くの神社まで逃げたという。その神社もまた大半が焼け、街は焼け野原となった。境内には、その時被災した大ケヤキが点在する。割れた幹と、空洞化した内部に残る真黒な焼け焦げ。ずん胴な太い幹から出る、細く長い枝。おそらく、幹の上部を焼失し、焼け残った部分から出たものだろう。雷でも落ちたかのような、こんな形状の木は、この神社ばかりではなく街のあちこちにある。大火の範囲が広くに広くてすさまじかったのか、60年前の木の傷跡が物語っている。能代は、そんな大火から街を守るため、道にイチヨウの木を植えていったのだ。

この頃の市報を見ると、「植えた木が今年で何才になった」など、街路樹の成長を喜び、市民に見守ってほしいと伝える行政の姿がある。当時の街の人たちにとって、街路樹は大火復興の証、木々の芽吹きは希望の印だったのではないか。

それから60年、街を守るために植えた木々は、なぜそこに植えられたのかも忘れられ、無残な姿で立ち尽くしている。緑の課から道路の課に管理が変わり、緑の啓蒙も行われなくなった。木を植えた思いが繋がらなければ、木々の存在は忘れられる。防災のために植えた木が、防災の役を果たせなくなっていた。60年前の大火を実体験で覚えているのは70〜80代。そんな人たちは、すでに役所を退職していた。木がこんな姿になってしまうのも、わかる気がした。



強剪定となった、旧能代市内のイチヨウ 2005年2月

権威が証明してくれなければ

母親の生まれたまちではあるが、自分にとっては隣の市。隣の人間が、この街路樹の異変をどうやって伝えたらいいのだろう。とりあえず、始めたばかりのパソコンで市のHPを開くと、そこに、「市長への手紙」という質問箱を見つけた。このまちの市長さんのことは、新聞記事でしか知らない。会ったこともない人だけど、手紙にすれば読んでもらえるのか。ここの市民ではないけれど、ダメもとで書いてみよう。そんな思いで書いた手紙が元で、担当課との会談が実現した。

合併したら、市の仕事がほしくてこんなことをしているのではないか。会談では、こんな言葉も出た。どうやら自分のしていることは、業者の営業活

動だと思われたらしい。隣町の、どここの馬の骨ともわからぬ若造が市政に意見してくるのだから、そう思われても仕方がない。しかし、こちらはブツ切りをしたらダメだと言っているのに、ブツ切りを発注する役所の仕事などやるわけがない。間髪入れず、自分の信用を落とす仕事はやりたくないし要らないと答えた。

意見や提案を営業活動と捉えてしまう感覚は、「業者とはそういうものだ（金にならないことはやらない）」ということなのだろう。そう思われることに腹が立つし、そんなふうにししか受け取らないことを情けなくも感じた。

この時は逆に、「このまちには、真剣に街の緑のことを考えて提案する人（業者）はいないのですか？」と訊いた。答えはNOだった。業者の意識が低いのか、役人が業者をそうさせているのか、それとも、意識ある業者の声を拾い上げるシステムが無いのか。このまちの人間ではない自分にはわからない。

会談は、はじめからかみ合わなかったような気がするが、そんな中でも、景觀と樹木の生理に配慮した剪定を行うことはできないかということの話した。返ってきた答えは、「美醜は個人の感覚的なもの。もしあなたの意見が正しくても、権威が証明してくれなければ動けない。」というものだった。

樹木を扱う者、造園に携わる者は、常日頃から美的センスを磨き、木の生理に合わせて手を入れる。そんな植木屋に剪定を発注して検査を行う役所は、当然の如く業者より意識が高くなければならない。そうした意識を、このまちには感じなかった。でも、権威に証明してもらえば、木が木らしい姿に戻る。どうしたら権威に証明してもらえるのかを考えることにした。

全国に問う

さて、では街路樹の権威とはいったい誰で、どこに行けば会えるのか。まったくもって見当が付かなかった。情報の少ない田舎にいと、何をどう調べたらいいのかさえわからない。当時は、インターネットで検索しても、街路樹の記事を目にすることは少なかった。たまに出てきても、その記事の信用性などもわからない。「権威」って誰だろう？ いやその前に、「権威」って何だ？

試しに辞典を開くと、「その分野で、知識や技術が抜きんで優れていると一般に認められていること」とあった。知識といえば、専門大学の先生か？ 技術だったら、やはり植木屋だろう。街路樹は公共の仕事だから、街路樹の実務経験が豊富で技術が高い人。

ただ、植木屋は造園業者であり、役所から仕事を受ける立場にある。そうし

た実務経験が豊富ということは、役所との付き合いも長いということで、行政に意見を言いにくい立場ということでもある。

公共工事は、大きな仕事になると、建設会社などが元請けになり、その下に造園会社が下請けとして入って、剪定などの実務を行うことが多い。自社に造園の技術を持たない会社は、専門業者に依頼する。例えばそこにブツ切りの仕事が出来たとして、役所や元請けを説得してまで適正剪定の提案をする業者は少ない。それをやると、これからの仕事に差し障る。依頼主を怒らせて仕事をもらえなくなるより、言われたとおりにブツ切りをしたほうがいい。

日本全国の街なかにブツ切りがあふれていることには、そうした業界の体質もあるだろう。公共造園を行う業者に、そんな、しがらみのない技術者などいるだろうか。純粹に、街の木を考えている人はいるか。そんなふうに思うと、業界に権威を求めるのは無理があると感じた。

では、大学の先生はどうだろう。そういえば、自分も造園の専門大学に行った。しかし、授業で街路樹の勉強をしたかどうか、その時の担当教授が誰であったかなど、落ちこぼれ学生の自分には思い出せない。大学に通っていたのは20年も前のこと。ただ卒業しただけなので、コネもなければその後の付き合いも無い。知識の権威も技術の権威も、どちらも心当たりがなかった。

万事休す。と思いきや、捨てる神あれば拾う紙(本)あり。そんな時に目にしたのが、造園の専門誌だった。20代の頃から購読していた専門誌で、「街路樹は泣いている」という特集を掲載していた。

この企画を立ち上げたのは、編集者の豊蔵均さんという人だった。長く、全国各地の作庭者や庭を取材する中で、街路樹の惨状を嫌というほど目にしてきたことだろう。

特集では、ブツ切りにされた首都圏の街路樹を紹介したり、著名な作家の記事を取り上げたりしていた。ここで、良識者の目にも、街路樹が異常だと映っていたことを知った。悲惨なものを「美」とは言わない。このことを知れたことは大きかった。これが、役所の言う「美醜は個人の感覚」を覆すカギになると感じた。

この時、この専門誌では、全国の悲惨な街路樹の写真を募集していた。この本は、日本で唯一の庭園専門誌。そこには日本の庭や公共緑地の粋が載る。そして、そんな粋の空間をつくる作庭家や造園家は雲の上の存在だった。まさに、日本の緑の権威ではないか。

専門誌だから、関連学会などにも繋がりがあろう。もし、街路樹の研究者がいれば、そんな人の目にも留まるかもしれない。ここで、ふるさとの街路樹の信を問おう。どうしたらよくなるのかの意見を頂戴し、それを行政に届けよう。そう思った。

植木屋の良心と誇り

「ふるさとの街路樹の信を問いたい」と言っただが、この時はまだ、わが町と隣市は合併していなかった。正確には、自分の「ふるさと」になるかどうかの瀬戸際。この後まもなく、能代と合併するかどうかの住民投票があった。

自分がどちらを選ぶかの判断は、隣市がこれから街路樹をどうしていくのかの返答次第。しかし、「権威が証明してくれば」とか、「樹木の樹勢に十分配慮した剪定を行っている」と言っていた隣市の姿勢には、当然、賛同できなかった。でも、合併には賛成した。このまちは、祖母と母親のふるさとであり、自身にも能代の血が流れているからだ。

そして、ほどなく合併が決まり、自分が投稿した能代の街路樹の現状も、写真とともに専門誌に掲載された。この記事は、「植木屋の良心と誇り」というタイトルで書いた。それが、自分の行動のすべてだし、それ以外の何物でもない。

そしてこの問い掛けは、良心と誇りのある人に読んでもらいたかった。現状を変えたいとの切なる思いだったが、自分のふるさとなるかもしれない街の木の惨状を、秋田を飛び越えて全国に知らせることは勇気が要った。ふるさとの恥を晒すようでとても心苦しく、忍びないことだった。

だから、自分が書いた記事が日本を代表する専門誌に載っても、嬉しいという感慨は全く湧かなかった。逆に、得も知れぬプレッシャーに襲われた。共感者がひとりもないという現実、やはり恐ろしい。信念を持つて正しいことをしているという気持ちはあっても、孤独に押しつぶされそうになる。そんな、闇の中にいるような状態がしばらく続いた。

暗中の明

朝の来ない夜は無い。真つ暗で孤独な暗闇にも、いつかは光が差すものだ。孤独の中にいても、どこかに共感者はいるのでないか、街路樹に思いを寄せる人が必ずいるはずだと、情報収集は続けていた。

そんな時、ネットとある記事にたどり着く。「悲しいケヤキ」というエッセイだった。自分が剪定したケヤキの街路樹がブツ切りにされたことを嘆く一人の親方の話から、日本の街路樹が抱える問題点を指摘していた。その記事は、長野県在住の、柳さおりさんという庭園設計士さんが書いたものだった。柳さんは、造園人でありながら、主婦目線、母親目線で命ある木を見ている人だった。この人は、同じ思いを持つ人かもしれない。やっと見つけた。や

つと出会えた。そんな思いだった。

柳さんのこの記事には、共に街路樹の問題を考える人として、富山県の作庭家の方が紹介されていた。河合耕一さん。驚くことに河合さんは、自分が投稿した専門誌の表紙を飾ったこともある方だった。ネットで街路樹の啓蒙を行い、業界団体の役員としても、街路樹の問題提起や活動を行っていた。実際に街路樹剪定を行いながら行政にもモノ申していく人。そんな人は極めて少ない。それを、専門誌に載る作庭者がやっていた。

実のところ、権威のアドバイスを求めて投稿した自分の記事には、あまり反響が無かった。そんな所への、この出会い。お二人には早速連絡を取り、ご挨拶した。そしてこの出会いのことを、専門誌にも伝えた。

柳さんと河合さんはこの後、『街路樹は泣いている』の特集に寄稿、『拡大する共感の輪』（隔月刊誌『庭』171号）の見出しで同時掲載される。「悲しいケヤキ・その後」業種を超えた「人」と「人」との繋がりを（柳さん）、「街路樹残酷物語（河合さん）」というタイトルだった。『拡大する共感の輪』のごとく、まさに、街路樹を思う人の輪が全国に広がった瞬間。暗中に、一気に光が差ししてきた。

自由という不自由

この年の冬は大雪だった。そんな中、街路樹のことを書いた専門誌に、自分の寄稿が掲載された。今度は街路樹ではなく、庭のこと。

街路樹の投稿を機に、専門誌の編集部とは連絡を取り合う機会も増え、庭の話もするようになっていた。その頃の自分は、地産の素材で日本庭園のような庭を作っていた。既製品や高価な材料を取り寄せた庭ではなく、自分の足で探し求めた土地の自然素材で作っていたから、こだわりもあった。

しかし、全国の庭を見てきた編集者の目には、自分の作る庭は普通の庭として映っていた。それなりの工夫を凝らしてはいたが、自分の庭は、「作る庭」で、「創る庭」ではなかった。日本庭園の既成概念や固定概念で作っていたということだ。「もっと、地域性や、土地の味を活かして、そこにしかない庭を創れるはずだ。もっと自由にやれるはずだ。」、そんな言葉をいただいたが、まだ理解できなかった。

「自由」を意識したら、飛石が打てなくなった。飛石は茶の庭から発生発展した、茶事を行うための道。作法に則った約束事もあり、それは外せない。しかし、茶をやらない一般家庭の庭の道では、茶の作法は関係ない。作法があ

るとすれば、そこで暮らす家族、庭を使う家族のライフスタイルが作法ということになる。家族の暮らしぶりに合わせて、自由に、楽しく創ればいい。茶の作法で作るやり方は美しいし、素材を厳選するから完成度も高い。でも、茶庭ではない庭に、それをやる必要は無い。そこにつくる必然性が無い。

自由にやってみよう。でも、自由に、自由にとさえ思うほど、覚えてきたことが邪魔をする。「自由に楽しい」はずの庭づくりが、「不自由で苦しい」状態になった。自由とは、なんと不自由なことだと思った。

「飛石」の概念を捨てて、原点に返ろう。「飛石」は、歩くための道。着物を着て草履で歩く道。発案者の茶人、千利休は「渡（わたり）六分に景四分」、その弟子の古田織部は「渡四分に景六分」と言った。「渡」とは「実用」で、歩きやすさ。「景」は「景色」で「見た目」、「デザイン」。

であれば現代の飛石は、洋服を着て、サンダルやスニーカーで歩きやすい道が「渡」ということになる。茶庭の飛石がさらに歩きやすい「石畳」へと進化するように、現代の庭の道も進化すればいい。そんなふうに思うと、気が楽になってきた。

田舎植木屋ではあるが、これまで、自分なりのこだわりを持って仕事をしてきた。しかしそれは、先人がやってきたことをそのままやってきただけなのかもしれない。日本の庭はこうだという形があることに安心し、それを疑問と思わず、そこに安住していたのかもしれない。

形から入って形から抜けられなくなるということがあるが、自由を苦しいと感じたのはそんなことだったのだろう。ある意味、形を覚えることを目指してきたから、形という拠り所が無くなると不安になる。

日本庭園は京都で発生した。気候も文化も素材もまるで違う京都のやり方を、遠く離れた田舎の秋田でやっても合わない。京都の庭がいいのは、京都の文化や風土に合っているから。それを形だけ真似したら、京都の庭ではなく、京風の庭になってしまう。「秋田の京風の庭」はできるが、「秋田独自の秋田の庭」にはならない。

覚えたものを捨て去ることは難しいし、覚えたことの積み重ねの上に今があるからそれはできない。でも、発想を変え、発展させることはできる。これまでは、技術の積み重ねだけだった。これからは、考え方や発想の転換も、自分の中の積み重ねの一つにすればいい。庭は、作り手のためにあるものではなく、作り手がその庭で暮らすわけではない。そこに住む家族の暮らしに合う庭を創ろう。そう考えた時、ようやく、「自由の不自由」から解放された。

この年の庭づくりは、職人としての技術の追求から離れ、家族が庭で楽しむことを最優先に考えた。専門誌に書いたのは、そんな庭づくりへの思いや日々の葛藤だった。特集の見出しは、『作庭者の十字路』。まさに、自分にとつ

ての転換期であり、十字路。専門誌の叱咤激励が無ければ、ずっと同じような庭を作り続けていただろう。「作る」から「創る」ことへの意識変換。街路樹を変えたいと起こした行動は、自分の庭の意識も変えてくれた。

馬鹿者になる

この本が出て間もなくのこと、同じ月に、二人の専門家の講演を聴く機会があった。

ひとつは、造園学の教授による景觀の話、もうひとつは、植物生態学の教授による森づくりの話。どちらも植物を研究することでは同じだが、造園学は植物の効果や役割を利用して「景觀創造」を考える。植物生態学は、植物の生態や植物が関わる環境について研究する学問。

どちらも木を植えるが、違いは、植物が創り出す景觀や環境に「美」を求めるかどうか、生育する植物に自然遷移も含めた本来の姿を望むかどうかではないかと思う。

植物学の教授は、木は命がけで生きていることを力説し、樹木がつくる環境の大切さを話していた。植栽地の気候や樹木の生理が考慮されず、次々と木が枯れていく造園工事のあり方にも警鐘を鳴らしていた。造園業界にとってはとても耳の痛い話。でもそれは事実だから、事実は直視しなければならぬ。

講演を聴いていて、植物学には樹木を剪定するという概念が無いと感じた。その剪定が元で街路樹などが傷み、景觀が損なわれていることを思うと、「景觀や風景を創造」する「造園」とはいったい何なのか~と思ってしまう。

枯れたらまた植え替えるのが造園で、木の枝が伸びたら切るのが造園。木を切らずに成長させ、自然に任せて森をつくっていくのが植物学。木は、造園と植物学の、どちらの人から植えられると思うだろうか。

二人の教授とは直接話をした。造園の教授に地元の街路樹の問題をぶつけると、「君は街路樹剪定士の資格を持っているか。その資格があれば大丈夫。」と答えてくれた。返す刀で、「ではなぜ、全国に街路樹剪定士がたくさんいて、日本の街路樹は悲惨な姿になっているのでしょうか？」と訊いた。忙しい教授を引き留めての話だったから、返事は聞けずじまいだった。

街路樹の異常については、居合わせた同業者にも訊いてみた。ベテランは、「役所には逆らわない方がいい。」と言い、同世代は、「何を馬鹿なことを

言ってるんだ？」という顔をしていた。同じ植木屋なのに、話が全くかみ合わない。植木屋が街の木を大切にしようと言うことが馬鹿なこと、それを言うことは役所に逆らうことになるのか。

幸か不幸か、自分はそんな教育を受けたことが無かった。現代は、当たり前のことを言うとおかしいと思われる世の中。そして、これが業界の意識なのか。市との会談の際、「意見や提案をしてくる業者はいない」と言われたことを思い出した。自分も植木屋で造園業者の一人だが、植木屋の良心や正義を通せないなら、馬鹿でいる方を望む。

「世の中を変えるのは、若者、よそ者、馬鹿者」という言葉がある。どうせなら、思いっきり馬鹿になってやろうではないか。自分をもっと馬鹿になれば、街の木も変わるかもしれない。今はまだ、その馬鹿さ加減が足りないだけ、大馬鹿になる途中だということだ。

大学の先生は馬鹿ではないし、現場で木と向き合わなければ馬鹿にはならない。権威を探すことや権威に頼ることをやめることにした。街路樹は机上ではなく路上にいる。そこで、命がけで生きているのだ。

木は切られたいと思っていない

専門誌の特集、『作庭者の十字架』（2006年3月 隔月刊誌『庭』168号）は、千葉県造園家、高田宏臣さんと同時掲載だった。高田さんとはその後、同誌の特集『列島縦断 新進作庭者5人の仕事』（2008年9月『庭』183号）でも一緒に緒することになる。経歴を見てびっくり。若い頃から憧れていた、金綱重治氏のお弟子さんだった。

茶庭専門で庭をつくる人を茶庭師と呼ぶが、金綱さんは、お茶が好きで、お茶の世界から庭の世界に入って来られた人。多くの庭師は、茶庭をつくるために茶を学ぶ。仕事のために茶道を習う庭師が多い中で、金綱さんの生き方には他の庭師には無い純粹さを感じていた。庭に使う素材は自分の足で探すという姿勢や、造園以外の技法を庭に取り入れる柔軟さにも惹かれた。つくる庭の素晴らしさはもちろん、生き方や考え方に感銘を受けた。

掲載の翌月、若い庭仲間を連れ立って、研修に出かけた。行き先は千葉。高田さんの作る庭やお勧めの庭など、都内近辺の庭を案内していただいた。そして、この研修では、思いもよらない形で、金綱さんとお会いすることになる。そのコースにはなんと、金綱氏の事務所や氏が手掛けた庭も含まれていたのだ。専門誌を見て憧れた雲上人が今、目の前にいる。とても緊張した。ど

んな話をしたのかも覚えていないぐらい。そんな中で、忘れられない言葉が一つある。

「木は、切りたいとは思っていません」。

街路樹剪定について話をした時に、氏から返ってきた言葉。ハッとさせられた。剪定は、木の命の一部を切り取ることで、木を傷付ける行為でもある。枝葉で養分生成を行う木にとつて、枝が無くなることは死活問題。剪定は木が生きるための力をそぐものであり、植木屋が引くたつた一度ののこぎりが、木の一生を大きく左右する。

茶庭の手入れは、人が樹木に手を入れたことがわからないように手を入れる。どこで切ったのかわからない、切ったことを気付かせないような手入れを極意とする。これは、作為を出さず、山里の風情を尊ぶ茶道の自然観でもある。切ったことを気付かせないということは、木も、切られたことを感じないということ。樹木は、度を越えた剪定を行うと異変を起こすが、切られたことを感じさせないように手を入れれば、これまで通りの生命活動を行える。

茶道の庭の手入れは、そんな意味ではとても樹木にやさしい。自然な雰囲気を楽しむための美観もそうだが、樹木の美観は木の生理に配慮してこそ成り立つ。それが、街路樹の剪定には大きく欠けている。全国で目にする多くの街路樹は、切ったことが一目でわかる。それは木にとっても迷惑なことで、樹木本来の自然な姿ではない。

「木は、切りたいとは思っていません」。とても穏やかで静かな口調から繰り出されたこの一言には、植木屋は樹木に対して真摯に、敬意を持って接しなければならぬとの教えを感じた。いい指導をいただいたと、それ以来、ずっと肝に命じている言葉。2006年3月のこと。市役所を訪問してから、ちょうど1年が過ぎていた。

チャンス到来

この年の春、隣市（旧能代市）とわが町（旧二ツ井町）は対等合併し、新能代市が誕生した。旧能代市の市役所が本庁、町役場だった所は支所となり、旧町地区のことに關しては支所の担当で治める形となった。それでも、旧市職員が支所に配属となり、またその逆に、町役場の職員も本庁勤務となった。合併しても、支所でほとんどの用事が済むから、遠い本庁には行くことがない。見慣れた役場の顔ぶれが大きく変わったことが、合併の実感だった。

自治体の体制が大きく変わったこの年、新市の街路樹が変わる兆しも訪れ

る。支所管内の街路樹を剪定する機会が廻ってきたのだ。自身が手を入れたこともある、わが町の銀杏並木だった。その時は枝先を残す自然樹形剪定をしていたが、その後に強く切られたのだろう。再会した並木は、大量に吹き出た芽が枝となって成長し、内部に光や風が入り込めない状況になっていた。枝が極度に絡み合い、腕の入る隙間もない。まるで、平面のクモの巣が360度の立体になったような、そんな状態だった。

ここ1、2年でブツ切りされた旧能代市内の街路樹も、やがて同じような状態になる。そしてまた落葉の苦情が出て、ブツ切りされることになるだろう。同じことの繰り返しで木は傷み、木の生理が狂う。樹木の生理に反した切り方をする、そんな悪循環に陥るのだ。

しかし、ここで見本を示し、市の先例を作れば、この状況を打破できる。この機会を活かせれば、今後の改善に向けた道筋ができていくかもしれない。ここは、利益を度外視してでも、前例を作らなければならない。今のこの時が、千載一遇のチャンスだと思った。

示された注意点は通行や越境支障等。ただ、この枝が混み合った状態をそのままにはしておけない。全体の外観を変えずに、「透かし(枝抜き)」剪定による自然樹形維持の仕様を提案、有り難いことにそれが採用された。幸い、電線も無いので、樹高もそのまま維持できるだろう。新市始まって以来の透かしが街路樹のイチョウに行われる。それを自らの手でできることに、大きな期待と喜びでいっぱいになった。

街路樹の見学者

落葉樹の剪定は、樹木が休んでいる冬場に行う。このイチョウ並木の剪定は雪の降る一月に始まった。

剪定が始まると、いろんな人が見に来る。「寒いのにお疲れさま」と声がけしてくれる方もいれば、「もっと短く切ってくれよ!」と言いに来る人もいる。苦情を言いに来る人は歩き方でわかるから、樹上からそんな姿を目にすると、木から降りるのが嫌になる。

それでも、その度に降りて説明する。しかし、木を迷惑と思っている人には、街路樹の役割を話しても通じない。でも、真面目な話は通じないが、冗談は通じる時もある。

「この並木の向こうには町の名勝である『銀杏山神社』があります。この並木はその参道なので、同じイチョウの木が植えられています。神社の木はご神木だから、バチバチ切ったら罰が当たる。だから、申し訳ないけれど、切り



剪定を終えたイチヨウの木



クモの巣状に混み合った枝（上）



枝抜きで内部に空間を作った状態（下）

たくても切れないんですよ（笑）。」そんなことを申し訳なさそうに話すと、中には「あ、そうなんだ。罰が当たると切れないよね。あんた方も大変だね。」と言ってくれる人もいる。ウソも方便。「参道」や「ご神木」はとっさの作り話だけれど、ウソでもいいから、この並木にそんな由来があるとわかりやすいし、それで市民が関心を持ち、街路樹が良くなるのであれば、そんなウソなら神様も許してくれるだろう。ウソが定着し、後で由来や伝説になってしまうことはたくさんある。なぜここにこの木を植えたのかの理由が残されないから、街路樹は迷惑なだけの存在になってしまう。理由が無かったら後付けでも付けなければならない。それが街の物語になれば、街の大きな魅力になり特色になる。そしてそれは、樹木が大切にされることに繋がるのだ。

文句を言いに来る人は、逆の意味では街路樹に関心を持っている人で、街路樹で困っている人。その困りごとを聞き、必ず行政に伝えると話すと、安心する人もいる。剪定も見学者？の対応も大変だったけれど、一定の成果を治められたことと、街路樹を取り巻く現状にどんな問題があるのかを身をもって体験できたことは収穫だった。

新生能代市の街路樹では、これが自然樹形剪定の第一号。秋田県でも、初めてのことであったかもしれない。

剪定報告書

この剪定については、仕様書を添えた報告書をまとめ、写真解説書として担当課に提出した。これは、わがまちでもいえることだが、担当者が移動になったり剪定業者が変わったりすると、せっかく良くなってきた樹木がまた元に戻ることが多い。そして、前回どのようなやり方をしたのかの記録が少なかったり記録の確認が行われなかったりと、木がかわいそうな姿になる。

専門職員を配備しない自治体などでは、剪定の仕方がその時の業者に一任されることも多く、そうした時は、業者の意識や技術がそのまま木の姿に表れてしまう。専門外の業者や未熟な業者、経験の少ない公共作業員が剪定を行う場合など、過去の対処の確認がなされない時などに、木に不幸が起こりやすい。

個人庭の手入れを引き継ぐ場合などは、施主さんにこれまでの管理の仕方や庭をつくった時のことを必ず聞く。その家のおじいさんが大切に手を入れてきた木だったり、おじいさんとおとうさんが苦労してつくった庭だったり、庭師が樹木の将来を見据えて設計し、ビジョンを持って管理されてきた庭だったり、庭には関わった人の思いや考えが必ずある。

仮に、ご家族が庭の成り立ちや手入れの仕方を覚えていなくても、意識を持った植木屋なら、庭を見ればわかる。途中から入った植木屋が自分のやり方を押し通すのではなく、庭のこれまでを考え、尊重する姿勢を持つこと。それが、つくった人や手を入れてきた人への敬意でもあり、大切にしたい心。

これは、個人の庭でも公共造園でも同じことで、ただ木が伸びてきたから切るのではなく、これまでどんな手を入れてきたのかを、担当課や剪定作業を行う側が互いに意識し合うことが必要だ。樹木にとっての不幸が繰り返されないように、樹木がつくる景観がだんだん良くなっていくように、そんな指針となるものを残したかった。

この報告書には、どのような状態にある樹木に対してどのように手を入れたのか、なぜそんなやり方をしたのか、並木が成立した経緯や樹種選択の意味、作業中に聞いた住民の意見や要望、参考となる資料なども付した。そして、これを契機に、街路樹への認識を深めていただけるよう、課内での閲覧をお願いした。

後日、課長さんから、課職員全員の確認印が押された報告書を見せていただいた時は驚いた。業者としてはとてもおせっかいで、業者の域を超えることをしたかもしれないが、気持ちを通じたことがとても嬉しかった。ふるさとの街路樹改善に向けて、一歩進んだような気がした。

全国の反響

この報告書は、自社のホームページにも掲載させていただいた。驚いたことに、それを見たという首都圏の自治体から、イチヨウの再生方法についての相談が来た。また、数年後には、同じく首都圏の市長さんが、これを参考に街路樹改善を進めていることを知った。

日本の外れの田舎町で行った小さな試行が、中央で活かされている事実。驚きと共に、大きな喜びでもある。でもこれは、それだけ街路樹の再生事例の情報が少ないということでもあり、また、街路樹の危機は全国的なことでもある。そして、行政自体に、何とかしなければという意識が芽生えてきたということでもある。小さな街の小さな通りの取り組みが、そんなことの助けになっていったとしたら、こんなに嬉しいことはない。

この剪定ことは後に専門誌にも寄稿、今度は、全国からも反響があった。中でも特に嬉しかったのは四国のご同業から頂いた電話。「自分の町もブツ切りなので、いつかこのような剪定をしてみたい」。そんなことを、電話を受けた父親から聞いた時は、苦労が報われたようでとても嬉しかった。

父親には、自分が街路樹の改善活動をしていることを知らせていなかった。報告したのは、初めて専門誌に載った後だったと思う。この時の父親は、技術的な意見には賛同できても、世間に波風を立てることを好まなかった。自分の息子がしていることは、仕事をさせてくれる役所に公然と盾突き、公共工事を行う同業をも否定する行為だと感じたらしい。

自分の父親が、これまで接してきた業界人と同じであることに失望した。いや、これが業界というもので、世の中の付き合い方というものだと思うが、それを越えなければ世の中も業界も変わらない。仕事をもらえる体制を守るのではなく、本気で木のことを愛し、ふるさとを愛しているのなら、行動するべきだ。それをやらなければ、植木屋は金のためにしか動かない職業だと思われてしまう。否定ではなく、提案をすればいい。だから、植木屋の仕事を通し、いただいた仕事の中でそれをやってきた。

親子が話すと感情的になる。会社の代表でもある父親に対し、

「それでいいのか。木を植え、守り育てることを仕事とする植木屋が、樹木の惨状を見て何もしないのか。自分が愛情込めて手を入れた木がおかしくなっても平気なのか。これから、役所仕事とはそういうものだからと愚痴を言い続けるのか。そんな業界に未来は無いし、街路樹は植木屋の食い扶持稼ぎのためにあるのではない。おれは、そんな情けない植木屋になるためにこの仕事を選んだのではない。」

とまで言った。父親にしてみれば、自身を否定されたような気がしたかも

しれない。少し言い過ぎたと反省した。

そんな父親が、まんざらでもない様子で、四国からの電話のことを話していたから、少しは息子の言うことを認めたのかもしれない。何事も、結果が大事。結果こそ一番の信用で、最大の説得力。そして、結果は過程の後に付いてくる。その過程もまた、行動しなければ生れない。思いを持って行動し、それを実現すること。やり遂げること。そこまでやらなければ、変わらない。途中でやめたら、やらなかったことと同じになる。残るのは、自分の非力への後悔や、他への愚痴だけだ。

全国の反響や父親の心境の変化を見て、人に理解してもらうには時間が掛かり、行動と結果で示さなければ伝わらないことを実感した。

奇跡のイチヨウ

この剪定の一か月後、旧能代地区で、とても優しい姿をしたイチヨウの街路樹を見つけた。ブツ切りの多い能代の街に残っていた奇跡のイチヨウ。そこに関わる人の姿も温かく、この時の感動を地元紙に書いた。

「残したい場所」

先月、日吉町の辺りを通りかかった時のことです。歩道の雪が解け、落葉掃除に精を出すご婦人を見かけて足を止めました。この一角には、能代には珍しく、伸び伸びと枝を張らせるイチヨウの街路樹がありました。ご婦人が掃いていたのはその落葉のようです。よく見ると、こちらのお宅にもお庭があります。庭の木の葉も歩道に落ちるでしょうし、このイチヨウの葉も庭の中に落ちていくことでしょう。「落葉の掃除は大変ですね。」と声を掛けると、「一枚掃くのも百枚掃くのも同じだからね。」と明るく笑うご婦人。声を掛けたこちらの方が気持ち良くなりました。ご近所の方々と言葉を交わしては、またせつせとホウキを動かすこのご婦人の姿に、昔ながらの能代の良さを見た思いがして、ほのぼのとしたものです。

きっと、このご婦人にとっては、落葉の掃除は当たり前のことなのでしょう。樹木と共に暮らすこと、人と自然が共生するということは、芽が吹いて花が咲き、実が成って葉が落ちるといって、樹木の自然な営みをそのまま受け入れることではないかと思います。雪かきも落葉掃除もお互いさまの心が大切だと思いますが、このご婦人には、そんなことが染み付いているように思いました。自分の暮らす街を自分の庭だと思えば、どちらの落葉を掃くのも

当たり前ということになります。掃除に精を出すご婦人の姿から、そんなことを思った私です。

日々の生活の中で、そんな心の余裕を持っていれば、街も自分もとても気持ちよく、心も豊かになりますね。「病いは気から」と言うように、病気はストレスが遠因とも言われていますが、樹木の中にと人間本来の治癒能力も活性化するそうです。人間がまだヒトだった頃、ヒトは森の中で快適に暮らす森の住人でした。人が森に入ると気分が良くなったり、身近な庭に木を植えたくなったりするのは、そんな森の住人だった頃の遺伝子が残っているからだという話を聞いたことがあります。緑の豊かな所に住む人は心も豊かなようです。気持ち良さ、心の余裕、こんなところにも、緑のもたらす効果というものがあるのではないかと思います。

この一角の街路樹は、とても素晴らしい樹形をしています。イチヨウがイチヨウらしい姿で枝を伸ばしているのです。残念ながら、周りのイチヨウやプラタナスはブツブツと切られて木の姿をしていませんでしたので、よけいにこの街並の素晴らしさが引き立ちます。木が木らしく、気持ち良く枝を伸ばす街路樹は、街に素晴らしい景観を作ります。この場所は、樹木と街が一体となっているような、街と家と樹木と人の暮らしが溶け込んでいるような、そんな美しい光景でした。

街路樹が、街並の景観や夏の緑陰を作るために植えられていることを思うと、このイチヨウ達は、街路樹本来の効用効果を最大限に發揮しているのではないかと思います。(イチヨウには防火樹としての効果もあります。市内にイチヨウが多いのは、何度も大火に見舞われたことが起因しているようです)。真夏に木陰に入ると涼しいのは、樹木が葉の蒸散作用によって自然のエアコンの働きをするからです。広く枝を張らせて木陰を作るとは、アスファルトの熱も緩和させますから、歩行者やドライバーの通行の助けにもなりますし、地球温暖化の抑止にもなります。柔らかな枝先の樹木はそよ風も呼びますね。夏にこの木陰の道を歩けば、米代川から吹く涼風とともに、とても心地良い時間を過ごせるのではないのでしょうか。街路樹にはそんな実用的な効果もありますが、この街の一角は、あのケヤキ公園と並ぶ、能代が誇るべき景観ではないかと思っています。

全国各地では今、紅葉を見ることもなく、落葉対策のためだけに、葉の落ちる前にすべて枝を切り取ってしまう所もあります。庭園文化の根付く、歴史と文化の街であるあの京都でさえ、一部ではそんなことが行われていると聞きますから、世界遺産白神山地の里であるこの能代が、このような、白神にふさわしい景色を街に残していることは素晴らしいことです。そこに住まわれている方々のご理解と併せて、ふるさとの誇りではないかと思いました。

「山水に得失なし、得失は人の心にあり。」

多くの名庭を生み出した鎌倉、室町時代の僧、夢窓疎石の言葉です。「得失」を「美」と置き換えると解かりやすいと思うのですが、美は自然の中にあるのではなく、それを美と思える人の心の中にあるという意味です。溪流や滝などの豪快な自然の造形や、太古から続く原生林のブナの姿には目を奪われるほどの美しさがあります。一方、道端や田んぼの畦に咲く野の花、アスファルトに落ちるイチヨウの葉などの何気ない自然にも心を留め、美しさや愛しさを感じられる優しい方もおります。白神のブナも街路樹も同じ木、樹木の自然な姿や営みは、それ自体が森の役目をしますから、この一本のイチヨウから白神の自然の恩恵を感じることも出来ます。秋田は「木では無い」と書くブナの森が世界遺産になっているほどの所ですから、何気ない自然を美と感じる優しい心を持つ方々がたくさんいるという証拠です。このご婦人の木や街を愛でる姿に、こんな言葉を思い出した私です。

「景観十年、風景百年、風土千年」というそうです。人が作るものは、長い年月をかけて自然と同化していくということではないかと思えます。私達の住む街には、このような美しい景観がたくさんあります。いつか能代の風景、風土になるように、あの白神山地と繋がる景観であるためにも、ずっと残していきたいですね。

以上

この記事は、2007年2月14日に掲載された。この二週間後、この奇跡の街路樹は、奇跡ではなくなった。



やわらかな枝ぶりの「奇跡のイチヨウ」(上)と、奇跡でなくなったイチヨウ(下)

街路樹は枝打ち

「残したい場所」は、樹木と人の共生や街路樹の役割を伝えたい一心で書いたものだった。その二週間後、残したい場所にあった奇跡のイチヨウは、見るも無残な姿になった。市道の街路樹剪定が始まり、今年はこの区間が対象になったらしい。奇跡のイチヨウは、周辺の木とともに丸坊主になった。

この記事は、市民からの反応もあつて、とても嬉しく思っていた。でも、肝心かなめの行政には、その思いは届かなかった。我が町二ツ井も、前から新生能代市の一員となり、能代市として行った二ツ井地区の自然樹形剪定も、能代地区ではまだ理解が及んでいないということか。

こんな切り方をしたら、木が荒れるだけだ。下手に手を付けるより、自然のままにしておいた方が樹形も崩れず枝も伸びない。電線や越境等、たいして支障になっているわけでもない。自然樹形の木は剪定対象から除外するべきだ。苦情のままに、ただやみくもに枝を切る。そんな一時しのぎの枝切りを続けていたら街の木は壊滅する。自分はなんのために新聞に書いたのかと、怒りと無力感でその場に立ち尽くした。

しかし、ただ立つていても木が元通りになるわけではない。事情を訊きに、市役所に走った。ここに来たのは昨年の会談以来。そしてまた、あの時と同じ話をしに来ている。市側は、自分が書いた新聞記事を見ていた。なぜブツ切りを繰り返すのかの問いには、「能代の街路樹は枝打ちなんだ」。

だったら枝打ちらしく、中途半端に枝を残してはいけない。幹の付け根からスパッと切ってあげなさい。枝打ちは、材にする樹木に対して行うものだ。いくら能代が「東洋一の木都」でも、杉の生産加工が盛んな街でも、材にする木と生きている街路樹の違いぐらいは分かっている。

街路樹は、「材」ではない。丸裸になったイチヨウは防火の役を果たせるか。枝の無い街路樹は木蔭をつくれるのか。枝打ちをする前に、まずそれを考えなければならぬ。

この数日後、偶然出会った議員さんに街路樹の現状を話すと、市に話をしてくれていた。答えはやはり、「枝打ち」だったとのこと。昨年、役所からは、ブツ切りの善悪の証明には権威のお墨付きが要ると言われた。権威には意味が無い。権威を探すことより民意を高めることのほうが大切だと気付き、そして書いたのが、「残したい場所」だった。

残さないことを選んだ行政に、どう向かっていったらいいのだろう。直接、トップに伝えるしかないのではないか。そんな思いが湧いてきていた。

悲しいプラタナス

人生は山あり谷あり。いいことがあれば、そうでないこともある。良いことが続いたかと思えば悪いことも続く。

奇跡のイチヨウが切られた翌月、今度は我が町で悲劇が起こる。小学校に隣接するプラタナスの街路樹が、突然、墓標のような姿になった。偶然通った道で目にした、信じられない光景。雪国の冬は長い。春も間近な3月に、再び身の凍るような思いを味わった。

ここは、狭い植え枿に植えられた街なかの街路樹とは違い、緑地帯のようになっている。グラウンドに隣接しているせいかな、それまでは校庭の木だと思っていた。

並木の成り立ちも経緯もわからないが、プラタナスは「学問の木」として、学校などに植えられる木だ。古代ギリシャの哲学者プラトンが、この木の下で学生たちに講義したことから、「学問の木」と呼ばれるようになった。

樹名の語源はラテン語の「プラティス（広い）」から来ている。広い葉っぱと広い枝張りがこの木の魅力。校庭に大きな木蔭を落とす通学路の並木は、おそらく学校と関連させて、「学問の木」として植えたのだろう。

そんな、学びの精神を示す木がこんな姿になってしまうと、子どもたちの学ぶ芽を摘み取っているかのようにも見えて、とても悲しい。

幹の途中からズドンと切ることを「断幹」というが、これは、最も樹木にダメージを与えるやり方。ここまでの切り方は、街路樹や公園樹ではあまり目にしたことがない。行政は前例を大事にする。こんなやり方をしている所が、他にもあるということか。前例に習うのなら、悪例ではなく好例に習ってほしい。

同じ町内にあるイチヨウの街路樹が自然樹形で剪定された一月後、プラタナスの街路樹がこんな姿になった。いったい、どんな行き違いがあったのだろう。木を切るのはい時だが、樹木が再生するには5年10年のスパンが要る。どんな行き違いがあったとしても、ここまで切ったら木が傷むということだけは知っておいてほしい。このような姿は街の景観としてどうなのかを考えてみてほしい。

後日、この並木を見た市長さんは、「こんなに切っても死なないのか？」と思ったと言う。指示する側や作業者にもそんな意識があれば、切る前に手が止まる。切ることを躊躇するはずだ。木も、切られれば痛い。木は、切られたいとは思っていない。そんな意識を、このまちに育んでいかなければならない。



すべての枝を無くされた、学校前の「学問の木」たち

市長さんに直訴

街路樹の姿は、その街の意識や状況を映す鏡。同じ市道の街路樹でも、改善に向けた試行が行われたり逆のことが行われたりと、この頃の街路樹管理は方針が定まっていなかった。合併した直後で、これまでの二つのまちの調整をどうしていくか、新生となったまちをどうしていくのかの試行錯誤の時だったのだと思う。しかし、だからといって、木がブツ切りにされていいわけではない。

ちょうどこの頃、専門誌のバックナンバー（隔月刊誌『庭』140号）を読み返していると、ある記事が目に残る。そこでは、下関（山口県）の作庭者たちが市長と車座になり、「まちづくり」をテーマに語り合っていた。植木屋はただ庭ばかり作っていればいいというものではなく、責任ある立場になれば、一社会人としての地域貢献や、まちづくりへの参画も必要になってくる。そんな意識を持った同業が行政のトップと膝を交えて話している光景を目にし、自分のまちでもこんな場を持ちたいとの思いが強まった。

しかし、どんなアプローチをすれば、こうした機会を持てるのだろうか。わからない時は、わかる人に訊けばいい。市長は公人で役所にいるから、役所の人に訊いてみよう。

早速、そんな相談をすると、市民対話を大切にする新市長の方針で、市民とまちづくりについて語り合う「ランチ・ミーティング」という企画があることを知った。ただ、この対談制度は団体戦。五人以上のグループでなければ応募できない。街路樹活動を始めて一年。外には同志を見つけたが、地元にはまだいなかった。

さてよ。でも、街路樹の同志はいなくても、庭の同志なら、いる。数年前から、気の合う植木屋仲間と庭の勉強会をしたりしていた。自分をはじめ、みな、親方のもとで修行する20〜30代の若手。社長などになると、「業者」という色が付く。初めて役所と話した時、自分の提案が業者の営業行為と見られたように、業者は利益になることにしか動かず、自分の仕事に不利になることはしないということも事実。仕事をもらえる役所にモノ申し、役所の機嫌を損ねるようなことをする業者はまずいない。いたら、この街の街路樹はこんなふうにはなっていない。全国の悲惨な街路樹も然り。そんなことを感じていたから、ともに活動するなら、業者意識を持たない、真面目で純粋な人たちとやりたかった。

この世界では、個人の庭仕事と公共の緑化を分けて考える人が多いが、庭の木も街路樹も公園の木も、植えられた場所が違うだけで、樹木が樹木であることにはなんの違いもない。庭の木を良くしようと思うことと、公の木を良くしようと思うことは同じこと。では、庭をやる者の側から公の緑に対して提案してみよう。

そんなことで、若い造園人が4人集まった。あと1人。残る1人は自分のかみさんをお願いした。「旦那が街路樹ばかりやって家のことをしなくて困る。早く解決して家に戻してください。」、市長さんにそう言っただけで頼めばいいよと口説いた。

植木屋の提案

そして対談の日がやってきた。対談は行政の都合に合わせてから、もちろん平日。絶好の仕事日和の日に、仕事を抜けてきてくれた仲間に感謝した。天気の良い日に仕事を休む植木屋はいない。しかし、仕事を休み、稼ぎを減らしても今これをやらなければ、ふるさとの緑は変わらない。晴れの日はずっとないけれど、街路樹に晴れの日が来るように、今日は頑張ろう。

皆、現場から駆けつけたので、当然仕事着。職人が着慣れないスーツなんか着たら、途端に弱腰になる。地下足袋姿が植木屋の正装。植木屋として提案するんだから、植木屋の正装で行く。今日の現場は役所だということだ。

案内されて会議室に入ると、関係課の課長さんたちが出迎えてくれた。そして、「ご苦労さま！」という声とともに市長さんが入室、みな一斉に起立して、トップに一礼する。これが、組織を束ねる市長の権威で、この力関係が役所なのだと実感した。でもこれも、役所の人たちにすればなんでもない日常なのだろう。そんな場にいたことのない職人は、こんな普通のことにも圧倒されてしまった。

この対談は、昼食を取りながら語り合う「ランチ・ミーティング」。こんな雰囲気の中で食べる弁当は喉の通りがとても悪い。どう攻めるかで頭がいっぱいで、せつかくの食事もただ詰め込んだだけ。せつかく作ってくれたお弁当屋さんに申し訳なかった。

市長さんは政治家だから、話すことも仕事。ご飯を食べながらもみなに語り掛け、緊張をほぐしてくれるような気配りはさすがだった。そんな、百戦錬磨を相手に、今日是对談する。いつも手にしている鋏もスコップも無い。武器を持たない植木屋が丸腰で相手の土俵に飛び込み、無口な口で勝負する。制限時間は一時間。質問は10問だったから60分10本勝負。いよいよ、待ちに待った真剣勝負のゴングが鳴った。

対談ではまず、ブツ切りにされる市内の街路樹について、「街路樹は剪定でなく枝打ち」という市の方針や、業者の技術も含めて、現行の管理体制が適切かどうかについて訊いた。これについては、街路樹に対する知識が足りずにいるに至らなかったこと、落ち葉の苦情や電線支障、交通障害への対処としての対応だったこと、今後は現地の現況に相応しい剪定方法を考え、市で目指す街並みの姿を示しながら、必要な技術の習得を業者に依頼するなどのこともしていきたいとの答えを得た。市の事情や今後の方針を市のトップから直接聞き、納得した。

事情を聞いたら、今度は提案。街路樹や公園など、景観や樹木の生長を阻害する植栽支柱の改善について訊くと、これについては、「そうした状態のものを発見した時は即刻対処する」。そして、今回の対談のメインとして出した、市内に美しい街路樹モデル地区をつくらせてほしいとの要望も快諾を得た。それを、仕事ではなく、自分たちの奉仕で行う。奉仕をすることで役所と同等に話せ、有言実行することで活動に信用性が増す。そして、その街路樹モデルが市政に活かされるようになれば、街の木は樹木本来の姿を取り戻し、二度とブツ切りが起これない街になる。そんな体制を作りたい。この対談では、そこまで持つて行く覚悟があることを示したかった。

街路樹のことで市民と行政が話し合ったのは、たぶん能代では初めてのことで。業界が声を上げたことも無ければ、議会の話題になったことも無かっただろう。それを、20〜30代の若手がやったことには大きな意義があり、画期的な出来事だったと思う。でもこれも、自分一人ではできなかった。仲間が集まってくれなければできなかった。会談をセッティングしてくれた行政と仲間、そして、最後の一人になってくれたかみさんに感謝した。



市長さんに街路樹の改善を提案

やって見せるから職人

ずっと、無言実行が職人の美德だと思っていた。口を開かず、黙々と仕事をするのが職人。言葉ではなく、仕事で語るのが職人。寡黙に生きることが職人の美德で、そんな世界でずっと生きてきた。

無言は内に秘めた思いで、思いは、口ではなく手を介して形になる。口だけだと夢物語で終わるが、職人は夢づくりを実際に行い、現実のものとする。だから職人は、無言実行の人。

そんな世界で生きてきた職人が、実行する前に言葉を発した。できたもの

や行動で示す職人が、先に言葉を吐いた。口先だけの職人は信用されない。でも、自分の仕事を語らず、これからやることを丁寧に話さなければ、人には伝わらない。仕事は、わかる人には分かるが、わからない人にはまったく分からない。解ってもらうには、手と口で説明しなければならぬ。

職人の世界は、やって見せることで、技術が受け継がれてきた。そこに言葉は介在しないし、職人同士の間では必要が無い。有無を言わせぬ圧倒的な手仕事こそ、問答無用の説得力。でも役所の人や市民は職人ではない。やって、見せて、さらに、そこに解説を加える。

職人世界ではない世界では、それをしなければ伝わらず、繋がっていかない。だから街の木は、こんな可哀そうな姿になっている。やって見せるのが職人。そして、すぐやるのが職人……。

市長さんに直訴した二週間後、仲間と共に、地元の公園にいた。関係課をお願いして公園を借り、提案した支柱改善の見本を示すことにした。役所の人との計らいで、地元の人や関連する課の人たちも来てくれた。実際の木を見ながら植栽支柱の効用と害を話し、景観と樹木の生長に配慮した掛け方を説明し、それを実演した。

公園には百本以上の木があり、そのほとんどに支柱が付いていた。半年掛かりで、それを全部直した。こちらの申し出だから、もちろん奉仕。でもそれでふるさとの公園が良くなるのだからやりがいがある。

支柱は、樹木が成長すればやがて外される。だから、無償で直しても、仕事としての形は残らない。支柱は本来、樹木には必要の無い物だから、形が残らないことが木にとっては自然で、用の無くなった支柱がきちんと外されることが大事。だから、実際の木に、形（支柱）が残らないことには意義がある。残さなければならぬのは、樹木を傷めないやり方と、いずれ外さなければならぬという意識。それが、これからの公共造園で活かされるようになることが大切だ。

そしてこのやり方は、この後に行われる市の公園計画に活かされていた。提案をして、やって、見せて、説明をする。それを、仕事ではなく奉仕でやる。業者がサービスとしてやると、それは営業になる。ふるさとのため、わが町のためにやるのだから、奉仕。市民が地域のために行う町内会活動などと同じ意識でやる。

サービスでやると、仕事をくれる役所の方が立場が上になる。でも奉仕なら、同等の立場で話ができる。この後もいろんな公園で剪定講習会を行ったが、講習だけでなく、併せて園内樹木のほとんどを奉仕剪定で行った。やることはやる。言ったことはやる。これ以上、説得力のある提案はないし、ここまでやれば、「仕事ほしさでやっている」と言うような役人も何も言えなくな

る。
有無を言わせない技術と説得力が職人の真骨頂。モノづくりは無言実行でできるけれど、まちづくりは有言実行でなければできない。モノづくりの職人はまちづくりの職人でもある。これからは、そんなスタイルでいこうと思った。



樹木より大きく、幹や枝を傷めている支柱を（上）、木の状態に合わせて直す（下）

鋏が持てない

5月になると、雪国の木々にも芽吹き季節がやってくる。春は平等に、山の木にも庭の木にも、そして街路樹にもめぐり来る。

この冬に手掛けたイチヨウ並木はどうなっただろうか。駆けつけると、春の陽光を浴びたやわらかな芽に、ポツポツと、小さな命の芽が生まれてきていた。新芽を残した剪定だから、芽が出るのは当然といえば当然。でもその当然が、ものすごく嬉しい。能代の多くの街路樹は、通常季節に芽を出すことができないからだ。

この時期、残されなかった市内の街路樹たちの枝には、まだ命の鼓動が感じられない。健全な木々の新芽が開ききる5月末、ようやく、ブツ切りされた木々にも芽吹きの春が訪れる。春に芽吹くはずの新芽をすべて失った木々も、生きるために必死の思いでまた芽を出すのだ。

そんなふうに、街なかの街路樹たちが遅い春を迎えている頃、わが町のイチヨウに異変が起きた。残した枝が、葉の重みで枝垂れてきたのだ。我が目を疑うような、まさかの光景だった。

しかし、偶然は必然の産物。起こることには必ず原因があり、事態は起こる

べくして起こるもの。その原因は何かといえ、自分自身の未熟に他ならなかった。初めて見た事態に驚きながらも、原因を分析した。

幹や枝を途中で切られ、限度を越えて切られた度木は、枝や幹に隠れている芽をいっせいに吹き出させる。早く大きくなり、生きるための養分を作る葉をたくさんつけられるように、そうした枝は勢いよく伸びる。これが徒長枝。こんな徒長枝が大量発生すると、互いが育つための空間が狭くなる。狭くなると、今度は互いの空いている部分に枝を伸ばし合い、枝同士が絡み合う。急激に身長が伸びた子どもは、自分を支える体力が追い付かない。それと同じように、養分を確保するために急激に伸びた枝も、勢いが強いようにして強度が弱い。剪定前のイチヨウの木は、そんな枝同士が絡み合い、支え合っていた状態といえる。

自分が行った剪定は、そんなふうに絡み合いながら支え合っていた関係を壊してしまったことになる。一人で立てないから支え合っていた木の支えを外せば、枝は倒れる。それが物の道理であり重力というものだ。

しかし、枝を抜かなければ木はますます窮屈になるから、自分が取った方法は理論的には間違いいではない。ただ、加減が必要だった。絡みを外すことに意識を取られすぎて、一度に切る量や枝の強度にまで頭が回っていないかった。こんな状態になってもまだ、「木は切りたいとは思っていない」のだ。植木屋は剪定すれば仕事が終わるけれど、木は剪定後も成長し、そこで生きていく。そのことを、身をもって体感した。木の姿は植木屋にとっての鏡。手を入れた人の考えや技術がそのまま現れる。これほど怖いものはない。怖くて、しばらく鋏やのこぎりが持てなくなった。



力無く垂れ下がったイチヨウの枝（右）と、剪定量を加減して成功した、同じ並びの木（左）

失敗したら直せばいい

20代前半にこの世界に入り、それから20年近く経っていた。けっこうな経験も積ませてもらい、若手を預かる親方にもなっていた。技術を教える側の人間が、鋏が持てなくなるほどの経験をしたこと。打ちのめされるほど情けなく、自己嫌悪に陥った。

経験は職人にとつての自信で、経験に裏打ちされた技術こそ、職人の宝。それが根底から揺らぎ、植木屋としての未熟を思い知らされた。イチヨウ並木は何も言わないが、木々から植木屋失格と言われているような気がした。

そんな気持ちのまま、毎日のように並木に会いに行った。葉の重みで垂れ下がった枝は、雨を受けてさらに下がっていた。風の強い日には、自分の心を映すかのように、大きく枝が揺れ動いた。中には力なく折れるものもあり、歩道に落ちた枝を拾い集めるのが日課。木々に未熟を詫びながら、風が通り過ぎるのを祈るしかなかった。

そんな日々が2か月ほど続いたろうか。いつまでも落ち込んでばかりもいられない。そろそろ、下がった気持ちを切り替えなければならない。そんな時に、思い出した言葉がある。

「プロは失敗できないが、職人は失敗できるぞ。失敗したら、直せばいいんだ。俺は今でも職人だよ。」

3月に、東京でお会いした左官名人の言葉だった。職人は失敗の達人だ。失敗を繰り返しながら成長し、それをモノづくりに活かしていく。俺も、職人だ。これまでもこれからも、一職人として生きていく。長い職人人生、こんなことはこれからもたくさんあるだろう。これまでの自分は、見た目の美しさを追い求めていただけかもしれない。美的感覚や景観意識は造園の仕事に不可欠。でもそれだけではだめだ。木の生理や将来を見据えるのが植木屋の仕事であり、植木屋の本懐。それが足りないから、木が学ぶ機会を与えてくれている。次の段階に進む時だと、木が教えてくれているのだ。

失敗は成功のもと。この経験は必ず活かす。植木屋として、今できることをやろう。そう思い込んだら、気持ちが楽になった。

そんな中、沿道の方から、「通学する子ども達に障る枝を切ってしまったの。下手に切つてごめんなさいね。」と声を掛けられた。地域の人は、子供たちが安全に通学できることを願い、そのための奉仕をしている。自分はこの住民ではないが、これは本来、俺たち植木屋がやらなければならないことだ。この並木の点検観察と共に、必要な剪定を奉仕でやらせてもらおう。そんなことを、役所にお願した。

通行に障る枝があれば剪定し、標識が見えなくなればその枝を外し、葉が

落ちれば沿道の人たちと共に掃除をする。街路樹は、人々の暮らしと共にある。木々を見守りつつも、通りの安全管理にも目を配る。街路樹管理の多くは、支障や苦情が出てから対処されることが多い。そんな中、暇があれば通りに通い、支障が出れば剪定した。支障が大きくなる前に先手を打てば、苦情はあまり出ない。そんなことも、この奉仕の中で知ることができた。鋏を持ってなくなったおかげで、周りが見えた。街路樹を取り巻く現実も見えてきた。そして、樹木のことをより真剣に見るようになった。失敗から得た収穫は大きい。木には申し訳ないことをしたが、とてもありがたい失敗となった。この教訓は必ず活かすと、目の前の木々に誓った。



点検観察を行う中、標識に掛かる枝などを奉仕剪定した

プラタナスの木の下で

この年の初夏のことだったと思う。地元紙の記者を車に乗せ、街なかの木々を見てもらうことができた。

役所には改善を働きかけているが、行政の施策は民意を反映する。これは、市民の理解を得られなければ、街路樹の姿は変わらないということでもある。

その頃、専門誌では、街路樹の危機を伝える全国の新聞記事を紹介していた。新聞は、世論を反映する。街路樹がこんな姿になっているのは、能代ばかりではない。秋田のメディアは、街路樹をどう見ているだろう。ふるさとの新聞は、どれほどの危機感を持って街の木を見ているだろうか。

当時、地元の新聞で街路樹の文字を目にしたのは、冬季剪定が始まる3月ごろ。その頃になると、春の訪れを告げる風物詩として、剪定の記事が紙面に登場した。

この頃すでに、街の木の姿は激変していたが、まだ異変に気づく記者はいなかった。地元メディアにも、街の木に何が起きているのかを考えてもらいたい。専門誌に掲載された全国の街路樹記事を手に、最寄りの新聞社へと何度も駆け込んだ。いきなり飛び込んで街路樹の話をされて、記者の人も相当迷惑だっただろう。でも、話はちゃんと聞いてくれた。

ただ、一般の人がそうであるように、新聞記者だからといって、全てに明るいわけではない。全国の現状と地域の現実を同じ物として捉えるには、まだまだ時間が必要だと感じた。よほど意識が高く、自然や緑に興味が無ければ、街路樹に目を留める人などほとんどいなかったこの時代、これも、仕方ないことだった。

能代は、世界自然遺産白神山地のふもとにある。その象徴であるブナの木が傷付けられると、大見出しの記事が一面に載るほど、環境意識は高かった。ブナの木は、「木」へんに「無」と書いて「櫛」。「木では無い木」だとして切られ続けてきたブナが、今では世界遺産の象徴。そんな街の木が今、木では無い姿をしている。記者さんたちには、このことを感じてほしかった。

新聞記者は常識人で、事の本質を見抜ける人。それを問題提起できる人。自分にとっての新聞記者は、そんな存在だった。だから、必ずどこかに、街の木の異変に気付く人がいるはずだ。そんなふうに使っていた矢先、何度も足を運ぶ自分を気の毒に思っただろう。経験豊富なベテラン記者さんに繋いでくれる人がいた。

待ち合わせた場所は、公園のプラタナスの木の下。この木は、前年にブツ切りになっていた木だった。一番分かりやすいだろうと思って選んだ場所が、実は一番分かりにくかった。なぜならその木は、プラタナスの姿をしていなかったから。

開口一番、「なぜこの木はこんな姿をしているのですか？」と訊かれた。街なかには、そんな「なぜ？」がたくさんある。その「なぜ？」を感じてもらおうと、時間の許す限り、街中の木を見てもらった。

数日後、「樹木はどう見ているのだろう」というコラムが、地元紙に載った。樹木をこんな姿にしてしまう人間を、樹木の側はどう見ているのだろう？と



2005年



2010年



2015年

記者さんと会った時からの、プラタナスの木の移り変わり

いう、やんわりとした問題提起だった。新聞が、街路樹に関する問い掛けをしてくれたのは初めて。気持ちを通じたようで嬉しかった。新聞は、世論を映す鏡。この記事が、多くの市民の心に響いてくれればと思った。

街路樹の人

街路樹の活動を始めて2年半。ここまで、無我夢中で突っ走ってきた気がするが、本業の庭はどうだろう。

前年、専門誌で作庭への思いを綴る機会があったが、庭づくりは、思いを形にするための行為。どんな庭が自分の理想なのか、何を目的として庭をつくるのか、おぼろげな形は見えていたが、つくる機会が無ければ現実の形にはならない。形になった思いが作庭者にとっての実績となり、それが信用になつていく。作庭者にとっての30代〜40代は、そんな実績をつくる期間でもある。

その期間の狭間において、街路樹を守ることに一生懸命になっている自分。やることはやったのだから、後は行政に任せればいいのではないか。この活動をしても、一銭にもならない。仕事では無いから、趣味や道楽のレベルかもしれない。幼子や見習いを抱えた貧乏植木屋に、道楽をしている暇はない。金にならず、活動すればするほど、役所からは嫌われる。そんな街路樹からは手を引いて、本業の庭に専念するべきではないのか。そんなことを、もう一人の自分がつぶやく。

何かがくすぶっているような、何かから解放されたいような、自分の中の何かを変えたいような、でも何をどうしたらいいのか、はつきりとしたものが見えない。

そんな時に、一枚の葉書が届いた。四国の作庭家の方が、京都で庭の個展を開くという案内だった。ここに行けば、何かが変わるかもしれない。これを、自分が変わるためのきっかけにしたい。家族にわがままを言つて、京都に出かけることにした。

個展会場は、全国各地の作庭者で溢れていた。美しい作品にため息をついていると、後ろから声を掛けられた。庭誌の豊藏さんだった。豊藏さんからは、多くの著名な作庭家を紹介いただいた。

本の表紙を飾る方々との対面は緊張の連続。中には同年代の人もいたが、やはり次元が違った。話のレベルも違えば、技術や意識も違う。これまで専門誌には、街路樹で三度、庭で一度の掲載経験があったが、全国レベルから見たら、自分など無名の田舎植木屋に過ぎない。「あゝ、あの、街路樹をやっている人ね」。そんなふうに見られているような雰囲気も感じた。

いつか同等のレベルで話ができるようになりたいと思いつつ、自分は「庭」の範疇を越えたことでもしていきたいと思っていた。個人庭を手掛ける庭師で、街路樹や公園など、公の緑に関心を持つ人は少ない。「造園」のことを英語で「Landscape・Architecture(風景の創造)」と言うが、作庭を行う人は「作庭

家」で、造園を行う人は「造園家」。公園はイギリスにその発祥を見るが、「Landscape・Architecture」は、緑を使った大きな景観や風景を造ること。庭は「作る」で、公園は「造る」。自分の仕事は作庭だけれど、広く、公の視点や造園の視界を持つて仕事をしたい。

個人の庭の周りには街路樹があり公園があり、公と私の景観は繋がっている。「庭」には「囲まれた所」という意味もあるが、日本庭園は中から見ると、外の景色を取り入れることはしてきたが、外を遮断するものでもあった。

外から庭を見る。外の景観を通して庭や家を見る。外の緑と内の緑を繋げる。内外が美しい緑の景観で繋がれば、街そのものが美しくなる。いくら庭が美しくても、外の景色が醜ければ、それは景観とは呼ばれない。公私の緑を美しく繋げる。それが、「造園」を行う者の役割なのではないか。

作庭者を越えた造園者になりたい。庭の垣根を越えて、庭の内と外を繋ぎたい。庭も街路樹も公園も山も、自分にとっては同じ物。その中の、特に街路樹が酷かったから、街路樹を直す活動を始めた。

日本庭園の本場に作庭の個展を見に行つて、広く「造園」のことを考えた。自分は、「街路樹の人」でもいい。街路樹を通して、公私の緑を繋ぐ懸け橋になりたい。

腕を無くした木

その年の市道の街路樹剪定には少し改善が見られた。市長提案で示した内容が活かされ、太枝を途中で切るような極度の剪定は行われなくなった。また、小さな木や自然樹形のものなど、剪定する必要のない木には手を付けないという配慮が見られた。

まだまだ自然樹形ではないけれど、少しずつ、変わってきていることを実感した。枝先を残す剪定を行うと、遅くとも4月末頃までには新芽が出てくる。徐々に小枝を残す剪定になってきているせいか、能代の街路樹も通常の時期に芽を出せるようになってきていた。

そんな、市道の街路樹に改善の兆しが見えてきた中、また事件が起こる。5月も半ば、新芽が出揃った県国道のイチヨウ並木に、これまでにないブツ切りが行われた。

もうすぐ初夏という青葉の時期に、真冬に行うような強剪定をしているのを初めて見た。管理者は秋田県だが、県は気でも違ったのかと思うほど、信じられない光景だった。

ようやく市道が良くなってきた時に、今度は県。市よりも上位の県が、市の指導的立場にあるはずの県が、なぜ市よりもレベルの低いことをする。とめどもなく起こるブツ切りに怒りが再燃、その足で県の担当課に走り、なぜ今この時期にこの剪定なのか？と訊いた。

とても穏やかに対応してくれたけれど、納得できる答えは得られなかった。というより、得られるわけがない。時期も剪定方法も滅茶苦茶なただの枝切りに、納得できる理由などあるはずもない。もしかしたら、県にも専門職員がいないのかもしれない。道路や土木の専門家はいても、造園の専門家はいないのではないか。

話をしながら、県ほどの所でもそうなのかということに愕然とした。専門知識が無ければ、自分の言っていることが理解できるわけもない。「工事は始まっているから止めることはできない。」。そう言われて、なすすべがなかった。

何も考えず、勢いだけで走ってきたから、止めるための知恵も無かった。帰り道、ただバサバサと切られていく無残な木々を見つめ、何もできないことに涙した。

後日、保育園児だったわが子に乗せて街に出た。新緑のイチヨウ並木は丸坊主になり、この季節の並木とは思えない姿になっていた。子供と出掛けた時はいつも、車から見える木の名前をクイズにして遊ぶ。しかし、さすがにこの時ばかりはそれもできなかった。

葉の茂る時期に枝が無ければ、子供でもその異変に気付く。逆に、「おとうさん、なぜあの木たちには腕が無いの？」と訊かれて、答えることができなかった。

絵本に出てくる木には幹に顔があり、大きく広げた枝が腕になっている。普段見ている絵本の木とあまりに違う姿に、そんな素朴な疑問が湧いたのだろう。この、純朴な子供の質問に答えられる人はいるだろうか。市長でも県知事でも総理大臣でも、子供を納得させられる答えを言えるだろうか。

説明できないことは、してはいけないのだ。子どもに嘘を付くようなことを大人がしてはいけない。まして、樹木を剪定する植木屋が、わが子に言い訳をするようなことをしたら植木屋でも父親でも無くなる。だから、行政に改善を呼びかけてきた。でも、この目の前にある木になぜ腕が無いのか、わが子に説明することはできなかった。

腕を無くしたイチヨウの木

2008年5月 県道のイチヨウ



2008年5月 国道のイチヨウ



木蔭のできない街

8月。丸坊主になったイチヨウ並木のそばで仕事をした。木に登っていると、道行くお年寄りが街路樹の下で立ち止まり、汗を拭っていた。そこにはベンチもあつたけれど、木蔭のできない所で座っても暑いだけ。お年寄りはいざらうそこにはいたが、座ることなくまた歩いて行つた。

緑蔭の用をなさない街路樹は、何のためにあるのだろう。街路樹の下にあるベンチは何のためにある？

こんな姿を、街路樹の管理者はどう見ているのか。初夏に街路樹の枝を切ることにどんな意味や理由があつたのか。住民の剪定要望を年度内に行う予算が無く、5月になってから行つたのか。木の都合より予算の都合。予算が無ければ剪定はできないが、この時期に行うメリットも、こんな剪定を行う意味も全くない。ただ木と人を衰弱させるだけのことにしかない。

そして、そんなことに何の異論も出ないこの街。こんなまちが、合併によつて自分のふるさとなつた。ふるさとなつたのなら、なんとかしなければならぬ。たとえ相手が県でも、これは絶対に間違っている。でも、どうしたらいいのかわからない。

そんな、悶々とした日々が続く中、県道のブツ切りはさらに続いた。今度は、商店街のプラタナスが丸坊主になつた。毎年、9月の祭りを前に剪定されていたが、この年は葉を残さないほどの強い切れ方だつた。

夏場に葉の無い木の姿は異常だ。台風でも来ない限り、樹木がこんな姿になることはない。それを、人為で行うことの異常。夏場に木蔭のできない街路樹は、いったい何のために植えるのか。

日傘の役目をするはずの街路樹の下を、日傘を差して歩く市民。本末転倒なことが、この街では起こつていた。暑い夏は、人も木蔭がほしい。木蔭を作っているのは樹木。では、なぜ木々は葉を茂らせて木蔭を作るのか。人が木蔭の下に入ると涼しいように、木も自分の体を冷やすために葉を茂らせている。日射で自身の体が高温化しないように、葉を茂らせ、木蔭を作ること以身を守っているのだ。それを知っていれば、木をこんな姿にはしないだろう。

街路樹は、樹木の効用効果を活かすため、人の暮らしを快適にするために植えるものだ。そのためには、木を健康な姿で維持しなければならない。夏場に木を丸坊主にして、木は健康を維持できるか。身を守る葉をすべて取り去り、これから、来期に芽吹くための養分生成をしなければならぬ木の葉を無くすことは、木の命にかかわることでもある。そんなことを、木を植えた人の側は考えてあげなければならない。声を上げられない木の声に、耳を傾けてあげなければならないのだ。

真夏に葉を付けない木々は、墓標のように寒気とする景色。そんな景色は、街が廃れている印象を与える。活性化のための祭りは、街に市外県外から人を呼び込むためのもの。観光で訪れる人たちには、緑美しい街並みでおもてなしをしてあげたいものだ。



真夏に丸坊主となったプラタナス（左）



木蔭のできないイチョウとベンチ（右）

流れが変わる時

真夏に葉を残さないプラタナスの枝切りは、さすがに市民の心を動かした。地元紙に、なぜ木蔭のほしい夏に木を丸裸にするのかとの投稿が載った。わが街に、街の木を思う市民がいることを初めて知った。匿名なのでどなたかはわからないが、ようやく地元からそんな声が上がった。

このことに対する県の答えが数週間後に紙面に載る。返事は、「プラタナスは一般的に植えられている木で、虫害を受けやすく、住民の要望に従って剪定した。そのことを理解願いたい。」というものだった。街路樹の管理者は、樹木を植えた理由や役割を市民に啓蒙する責任がある。緑があることへの理解を求めるべき管理者が、樹木の生理を理解しないブツ切り剪定の責任を市民に求めている。この返事からは、そんな本末転倒な印象を受けた。

投稿された方の意見は正しい。街路樹の管理者よりも街路樹の存在意義を理解している。県の返事は、街に緑があることの意味を知らせる声をないがしろにしているように感じた。この、勇気ある市民の声を、無駄にしてはいけない。

この時期、「リオの伝説のスピーチ」を初めて聞いた。ブラジルで開かれた世界環境会議で、世界の首相たちを叱ったというカナダ人の女の子のスピーチ。「あなたたち大人は、地球の直し方を知らないのにどうして地球を壊すのですか？」という言葉が、5月にわが子が発した質問と重なった。セバンさんという、当時12歳のこの女の子の言葉は、「あなた方は、木の直し方を知らないのにどうしてそんな切り方をするのですか」と言っているように聞こえたのだ。

何もできずに引き下がったら、わが子に見せる顔が無い。市のトップに伝えて市が改善の方向に進んでいるのだから、県のトップにも話をしよう。県知事に手紙を書き、本庁担当課にも出かけて話をした。能代の木を大切にしてくださいとお願いし、配慮するとの返事をいただいた。

そして、この市民の方の投稿は、議会をも動かす。このプラタナスは県道の街路樹だったが、この投稿を紹介しながら、市道の街路樹管理を質す一般質問が行われたのだ。おそらく、旧能代市議会時代から見ても、街路樹の質問は初めてのこと。緑に意識のある議員さんが、このまちにもいた。議会で取り上げられれば市議全員の知る所となり、行政側も緊張する。能代の街路樹改善にとって、大きな一歩になった。

そしてこの流れは、地元紙をも動かした。一般質問の後、地元紙の記者から街路樹の取材を受けて、市内を案内した。そしてこの時の取材が一面二面で大きく取り上げられる。見出しは「黄葉忘れた街路樹が」と「問われる街路樹管理」。夏に丸坊主にされた街路樹が黄葉出来ないことに着目した、インパクトのある問題提起だった。

さすが新聞記者は目の付け所が違う。県道の街路樹を取り上げつつ、市道の街路樹管理のあり方にも踏み込んでいた。ようやく流れが向いてきた。変わるかもしれない。いや、きっと変わる。そんな期待と予感が胸に湧いた。

伝えることと、伝わる時間

市民投稿、議会質問、地元紙の記事。この4か月で街路樹の動きが次々と起こった。すべてが地元紙で報道されたから、街路樹の異常は多くの市民の知る所となった。地元紙の読者層は郡市。市内だけでも6万人に伝わったことになる。この効果はとても大きい。

これまで、行政や議員、新聞記者などに個別に話しかけ、百人ぐらいには話してきた。役所だけでも、市県の支所、市役所、県庁とある。同じ部署に話に



街路樹の異変を大きく伝えた地元紙記事

行くと、その時の担当が移動になつていて、また違う人に一から話さなければならぬ。担当者が不在の時は、その時、対応に出た人に話した。同じ話を何度もするのはとても大儀。それでも、違う人に話すということは、それだけ街路樹を知る人が増えるということ。役所に職員が百人いたら百人に話せばいい。二百人いたら二百人に話せば全員に伝わる。どうせなら、一万人に話してみようではないか。そんな思いでいたら、一気に市内全域に伝わった。

街路樹は市民の苦情の元。賛否両論ある中で、賛の割合は非常に低い。市民生活に直結する問題だから、それを良くしようと取り上げれば議員の票にも響くだろう。公共造園を行う業者が街路樹のことを話さないように、議員もまたこの話題を避ける人が多い。この問題を取り上げるには、植木屋も議員も相当な覚悟がいるし、リスクも高い。本気で何とかしたいという思いが無ければ自分が潰れる。だから、安定を求める人はなかなか腰を上げない。街路樹の問題は多岐に渡る。関心はあつても、ある程度の知識が無ければ理解が及ばない。理解できなければ議員提案も新聞記事も書けない。

活動を始めて3年。この時間は、世間が街路樹を理解することにかかった時間でもある。何事も継続で、人に理解してもらうには根気と時間が必要。機が熟すには時間が掛かり、熟せば一気に動く。この一連の動きで、そんなことを感じた。次は、植木屋の番だ。

街路樹モデル断念

市民、議員、新聞、この3つが動いたのだから、植木屋が動かなくてどうする。心意気が届いたのだから、返すのが礼儀。この流れを逃してならない。

さて、では何をやるか。やりたいこと、やり残していたことがひとつあった。市長さんに提案していた、「美しい街路樹のモデルづくり」をまだやっていなかった。やっていなかったというよりも、できなかった。街はブツ切りだらけだったから、手を付けられる状態ではない。モデルにする候補地をどこにするかを、決められずにいた。

ブツ切りされると、数年は手を入れられない。切れば切るほど枝が伸びるから、木が落ち着くまで待たなければならぬ。しかし、あまり年数が経つと、今度は増えた枝が絡み合ってしまう。その前に、手を入れてあげたい。

そんな状態の並木をさがすと、意外なことに、一番効果的な所にあった。市役所の真ん前。そこでやるのが一番分かりやすい。街路樹モデルをつくるというよりも、そのための試行であり、実験。数本の木に程度を変えた剪定を

行い、その成長過程を見る。具体的には、切る枝の量を変えて、どの程度枝を減らすと樹木に異変が起こらないかを検証する。もちろん「透かし」で、自然樹形にするのが基本。

担当課には奉仕剪定の名目で申し込み、了承をもらった。せっかくなので、植木屋がただ剪定するのではなく、担当課の皆さんとの勉強会にして、日程を合わせることにした。実施日はクリスマスの少し前あたり。でももしかしたら、当日は吹雪くかもしれない。寒い中、じっと見学してもらうのは申し訳ない。天気の良い日にこちらが先に剪定を行なうことにして、ロビーや控室で説明した後で木を見てもらうという形のほうがいいかもしれない。

そんな変更を願うと、どういうわけか役所の態度が急変、この話は突然宙に消えた。ここまで来ての交渉決裂は夢にも思わなかった。なんともやり切れぬ思いで、開催を断念した。

無念の面持ちで役所を出ると、若い職員がひとり追い掛けてきた。「どんな剪定をすればいいのか教えてください」。行政にも、やる気のある若い人がいるんだな。役所にもいろんな事情があると思うが、こんな若い人が純粹に伸びていける環境であってほしい。事情もしがらみも何もない所で、役人も植木屋の立場も関係なく、ただふるさとの緑を良くするための話ができればどんなに素晴らしいだろう。

そんなことを思いつつ、目の前のイチヨウ並木にどんな手を入れたらいいのかを話した。とてもいい時間だった。できれば、もっと多くの人と、こんな時間を持ちたかった。

今思えば、議会や新聞で問題提起され、そこに自分がやって来た。行政は、いろんな意味でデリケートになっていったのだろう。市長に提案して許可をもらったことでも、実際の交渉は市長との話にはならない。トップダウンとボトムアップ。上と下の間には中間がある。直球勝負で挑んでも、ミットに届くまでにはいろんなことがある。外野から本塁への送球も、中継を入れたほうが良い時もある。変化球が苦手な自分には、中間や中継が必要だと感じた。

そんな中で、仲裁に入ってくれる人が現れた。ありがたいことに、予定通りの開催ができる道を作ってくれた。でも断った。筋を通して申し込んだことに對して、人から言われて改めるような態度が許せなかった。間に入ってくれた方には、とても申し訳のないことをした。準備を手伝ってくれる仲間にも申し訳なかった。もっと大きな心で許せばいいのだけれど、なんとも器の小さい自分。役所は敵ではないけれど、敵に塩を送るぐらいの余裕が無ければだめだ。

そんなわけで、能代での街路樹モデルの実践は夢と消えた。自分で道を閉ざしてしまった。でも、これで終わりではない。終わりにほしくない。

江戸川区に電話

次の手立てを考えるために、情報収集をした。市長提案の際、好例として東京都江戸川区の例を紹介していたが、当時、江戸川区には、街路樹を専門とする『街路樹係』という特命の部署があった。秋田県角館町(現仙北市)にも「桜係」という桜管理の専門部署があったが、街路樹専門の係があることをその時初めて知った。

造園業者が公共の剪定仕事を受けるには、造園の国家資格を持つことを条件とする自治体が多い。しかし現実には、造園の技術を持たない専門外の業者でも資格を取ることができたり、資格を有する専門業者でもブツ切りを行っていたりする。造園技術の資格には造園技能士などがあるが、この資格試験には剪定の実技試験が無いために、資格を得ても実際の技術があるかどうかはわからない。そして多くの行政は、そうしたことを知らないようだ。

業者の実際の技術を見ることがなしに、街路樹は良くならない。極端な話、市に造園会社が10社あれば、その会社の中で一番の名手が木に登り、どの会社が一番上手いかを見る。同時に、なぜそんな剪定をしたのかの理由を問い、実技と理論を審査する。併せて、剪定に掛かる時間や出る枝の量を計れば、その木1本にどれだけの経費が掛かるかもわかる。

公共工事は額を競う入札がメインだけれど、額ではなく実際の技術力を競わせる。最も安い額を示した業者を1番にするのではなく、最も高い技術と意識を持つ会社に業務を委託する。もしくは、そうやって決めた剪定のやり方を基準として、街路樹剪定に参加したい業者にすべて業務発注し、その代わり、その業者が請け負った街路樹には、どの業者が剪定したのかをわかるようにしておく。樹木は剪定した時だけでなく、その後の成長にその剪定の良否が現れるから、業者は下手な仕事ができなくなり、その場だけの仕事をしなくなる。

個人の庭は、庭をつくった庭師が成長を考えて手を入れ、同じ植木屋さんがずっと手を入れるから良い状態が維持される。桜日本一と言われる弘前公園は行政の直営管理(業者発注をせず、行政職員が管理を行うこと)でやっているが、同じ人が指揮を執り、同じ作業者が管理に当たっているから良くなっている。植木屋はそれぞれ「手(やり方)」が違い、手の違いはそのまま木の姿に現れる。だから、その「手」を統一し、継続することが大切になる。それを、業者がころころと変わる入札で維持するのは難しい。

これは、同じ主治医に診てもらってから患者の健康管理が維持されることに似ている。入札で医師を選ぶ患者はいない。剪定は樹木の体にメスを入れることであり、木にとつての外科手術。木は医者(剪定する人)を選べないのだから、人の側が、樹木を適正管理できる業者を選んであげないといけない。弘

前公園が良好な景観を維持できているのは、行政がそうした「手の違い」を理解する庭師的な感覚を持っていることが大きい。それを街路樹で行っているのが、江戸川区だった。

江戸川区では、街路の樹木管理をプロポーザルで選び、審査の中では実際の技術も見る。そして、剪定の際には担当課立会いのもとに見本剪定を行い、どんな剪定を行うかの実際を確認してから本剪定に入る。これは、当たり前のようにできてなかなか行われていないことが多く、仕様書の内容や担当課の指示と剪定された木の樹形が大きく違っているということが多々ある。江戸川区には、歩道を挟んだ公園と街路樹に樹種の違う並木が平行している所があるが、両者が調和しながら見事なトンネルを形成している。これは、どちらの緑地にも同じ業者が手を入れているということだろう。

一般的に、街路樹と公園は別の課が管轄することが多く、街なかで、隣り合う同種の木が違う形をしているのを良く見かける。違う課が担当することとは、手を入れる業者も違うということ、この樹形の違いは「手の違い」から来る。街なかの景観は繋がっているから、公園も街路樹も手を統一し、緑の雰囲気統一感を持たせるのが理想。そんな理想的なシステムが、江戸川区にはある。ここまでやる行政があったのかと、それを実際に行っていることに驚いた。

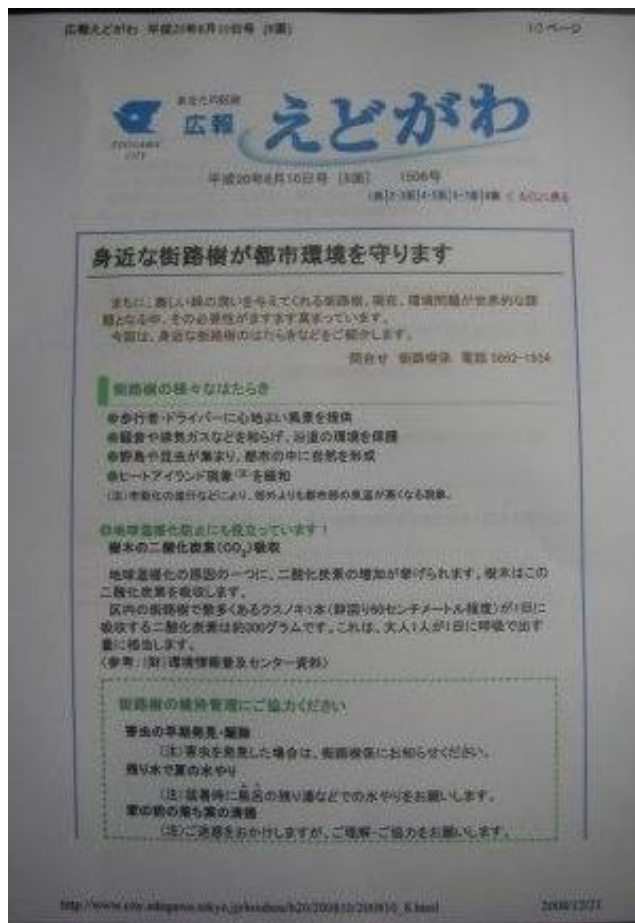
なぜそんな東京の事例を知ることができたのか。この前年、江戸川区出身の若者が、うちの門を叩いていた。江戸川区では、街路樹に対する苦情より、逆の意味でのクレームが多いと聞いて驚いた。業者が下手な剪定をしようものなら、区民の側から「しつかりやりなさい」と叱咤激励が出るそう。東京には、こんなレベルの高い街があるのか。これはぜひ話を聞きたい。そう思ったなら、いてもたってもいられず、全く知らない土地の役所に電話を掛け、初めて話す担当者の人と2時間近くも話をした。

江戸川区には「街路樹指針」があるとのこと、それを送っていただいた。上記の体制もそこに記されていたが、この指針は、行政や区民、専門家などで組織する「街路樹のあり方検討委員会」で作成されたものだった。区の街路樹をどうしていくのかを、専門の学究者を入れた中で、行政と区民が開かれた場で協議をしていた。

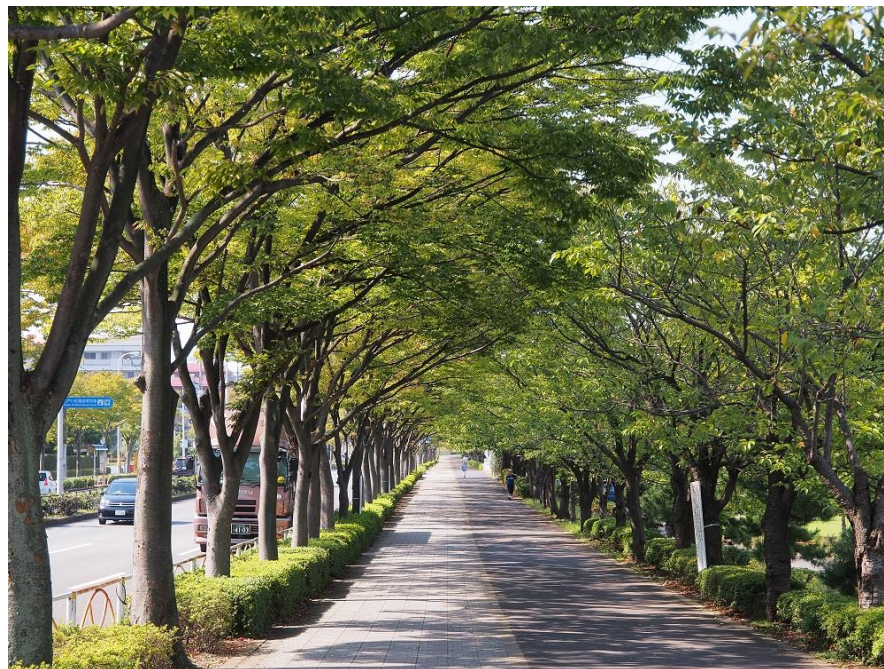
一番心に響いたのは、行政が街路樹の啓発を行っていること。街路樹の苦情は、その役割を知れば解消されることも多い。「街路樹は区民の共有財産」とする江戸川区は、区民に緑への理解を深めてもらうことが、街路樹管理で最も大切なことだと考えていた。

そして、江戸川区の街路樹も、昔はブツ切りだった。今の江戸川区の景観や体制は、ブツ切りから立ち直ったものだと言った。今はブツ切りの能代も、

緑の役割を伝える、江戸川区の広報誌



街路樹のケヤキと公園のサクラが織りなす緑のトンネル



やればできる。これから起こすことの前に、大きな勇気をいただいた。

ケヤキのトンネルがある町

心機一転。会場と内容を変えて、勉強会を主に行うことにした。能代での街路樹モデルを目指したのは、地元の二ツ井地区にはすでにモデルがあったから、ブツ切りだらけの能代地区に見本を作りたかった。

わが町二ツ井には、鋳が持てなくなるほど悩み苦しみ、樹木の生理を嫌というほど思い知らされた並木がある。成功した木、失敗した木、それぞれが教材になるだろう。自分が手を入れ、観察してきた木たちだから、どうすれば成功し、失敗するかを、自分が一番知っている。手を入れた人間だからこそ、説得力を持って話ができる。

そしてこの並木の前には、市の施設がある。今度は寒いロビーではなく、きちんと会議室を借りて勉強する。それから並木を見て説明することにした。座学で学び、議論をし、そして実物を見る。ここではそれがそろっている。このイチヨウ並木は、新生能代市で初めて自然樹形剪定が行われた先進例でもある。能代の先駆けとなった街路樹を、本庁の職員さんたちにも見てもらえる。

せっかくの機会だから、県の担当課や市議会、関連の市民団体等にも案内させていただいた。主催は緑の景観を考える会。市長提案や支柱講習会と同様、若い庭仲間で行なう。会社の代表など一人もいない、若手4人で開く街路樹の勉強会。造園関係者が、行政・議会向けに勉強会を開くのはおそらく初めて。全県でも例が無いだろう。しかし、例が無いからこそ、難しい。でも、街路樹の例なら、ある。手掛けた並木の紹介は切り札。その前に、全国の実例として、江戸川区の例を紹介する。

しかし行政は、「それは東京だから、予算があるからできるのだ。」となるだろう。秋田県にも好例がないだろうか。頭に浮かんだ街路樹があった。そして、五城目町に出かけた。

五城目町は、能代から車で30分ほどの所にある。ケヤキ並木が多く、どの通りを通ってもケヤキがケヤキらしく、緑のトンネルになっている。こんな街路樹の多い所は、秋田県では見たことが無い。どんな管理をしているのか、とても気になっていた。

町役場に飛び込み、担当課の方から話を聞く。街路樹は道路に付属するものだから、土木建設関係の課が計画や管理を担当することが多い。江戸川区の「街路樹係」もまた、土木部の中の一つ。公園や緑地の課が街路樹を管理する所もあるけれど、そうした所はとても少ない。五城目町も同じで、建設部の方が対応に出てくれた。

自分と同年齢ぐらいの方だったが、樹木知識の豊富さにまず驚いた。これ

ほどの知識量を持っている行政職員と会ったのは初めて。しかも専門の課ではない。こんなことから、街がどれだけ街路樹を大切にしているのかわかる。

そして、樹形についての考えを聞いて、二度驚いた。「民家のある歩道側の枝は短く、支障の少ない車道上空や樹間の枝は伸ばす。進行方向からは樹形がわからないから、歩道から並木を見た時にケヤキ本来の形をしていればいい」。

このやり方は、自分がわが町のケヤキ並木で行っていたことと全く同じだった。「貴方はすごいな!」と、思わず握手を求めた。驚きはさらに続く。県国道の建設時、町側から街路樹の樹種をケヤキで統一することを要望、町が県国道の管理も引き受けることを提案したそうだ。

なんとという先見の明。同じ樹種でそろえれば街なみ景觀に統一感が増し、管理方法も一つでいい。町の一元管理で行うから、他の自治体のように、市道県道の街路樹の姿が違ふといったことも無くなる。非常に頭の良い考えだと感心した。

さらに素晴らしいのは、この街は、街路樹の植栽を町民植樹祭で行っていた。自分で植えた木には愛着が湧き、大切にする。そんな取り組みをこの街は行っていた。この植樹祭のことは40年前の広報誌にも記載されているが、そこには街路樹を植える目的として、野鳥を街中に呼び込むことが書かれている。

山に囲まれた五城目町のケヤキ並木は、田んぼを抜けて街に入り、山へと続く。ケヤキは山に生える木だから、山からそのまま街路樹へと鳥が移動して来るだろう。そして、並木伝いに反対側の山にも行ける。今でいう、緑を動物の棲める生態系として見る、「エコロジカル／コリドー」「緑の回廊」の発想があつたのかもしれない。それを、この町は40年前に行っていた。こんな町があることに驚いた。

あまりの素晴らしさに地元で紹介させてほしいと伝え、街路樹の写真提供をお願いした。その写真には、ケヤキのトンネルの木蔭の下、夏祭りを行う人々の姿が写っていた。これぞ、人と緑の共生。街路樹の効用効果を町民が理解し、それを暮らしに応用している。これが、街路樹と人の最高のあり方だと感動した。この五城目町の例を、ぜひわが街能代にも伝えたい。そう思った。

支障の無い空間に枝を伸ばす「片枝樹形」のケヤキ（同）



山へと続くケヤキ並木（五城目町）





大いなる未来につなぐこの緑

— 人気のあった緑のプレゼント —

町民植樹祭で行った街路樹の植栽を伝える五城目街の広報。野鳥を呼ぶためのものであることも記されている。

街路樹剪定勉強会

そして勉強会の日が来た。当日は、20名以上の人たちが集まった。いよいよ決戦。これが、ふるさとの街路樹が変われるかどうかの瀬戸際だ。

能代地区での開催を蹴つての勉強会だから、こちらも背水の陣。否が応でも緊張が高まる。そんな張りつめた空気の中、会場には、庭誌の豊蔵さんから温かなメッセージが届いていた。涙が出るほど嬉しかった。能代の街路樹はいまや、全国的な注目を集めている。そのことを知らせるためにも、開会のあいさつの中でそれを読み上げた。会場内にいる人は、参加者よりも主催者の方が圧倒的に若い。押し潰されそうな心細さの中で、何よりの応援だった。

応援団はまだいた。配布した資料は、正しい剪定方法や全国の取り組みを紹介したもの。みな、勉強会の事情を話し、快諾を得て用意したものだ。これ以上の応援はない。そして、頼りになるのは、すぐそばで見守ってくれるイチョウたち。彼らの成長過程の紹介が、この勉強会最大の見せ場になる。

勉強会では、樹木にとっての正しい剪定法を実際の枝を持ち込んで説明し

た。一般的な庭木に対して行なう「刈り込み」は枝の萌芽力を利用して緑のポリウムをつくるために行うもので、それを街路樹などの落葉高木に行うと枝が増えすぎての大量の落ち葉が発生、それが苦情のもとになることを話した。

また、街路樹は市道だけでなく県国道にもあり、それぞれに管理者が違う。

同じ市内にある街路樹なのだから、市道の街路樹が良くても隣にある県道の木がブツ切りでは街並みの景観がアンバランスになる。市県国が連携を取っていくことが大切で、それを引き継ぐことが大事。街路樹には様々な苦情があるけれど、苦情は街路樹の役割が周知されていないことから起こる。なぜこの通りにこの並木を植えたのかの意味や、街路樹の効用効果を広く市民に伝えて行くことが必要だと、江戸川区の広報誌を紹介しながら示した。

質疑応答では、参加者から実際に街なかで起こっている問題が出され、どう対処していくべきかの議論がなされた。若い植木屋が勢いで行った感のある勉強会だが、植木屋の側から、行政、議員、市民を巻き込んだ議論の場を作れたことはとても意義がある。

この、前代未聞の勉強会は、「望ましい街路樹管理探る」の見出しで、地元紙でも大きく取り上げられた。掲載日は12月24日。最高のクリスマスプレゼントとなった。

そして翌年、これがダメ押しとなって、能代の街路樹は自然樹形管理へと変わった。これでふるさとの街の木が、木らしさを取り戻せる。長かった戦いが、ようやく終わった。



枝を持ち込んで剪定方法を説明



実際に剪定した並木で説明



街路樹勉強会を報じた記事

街路樹モデルを試行する

市の街路樹管理の方針が変わり、剪定等の管理は造園業者が行うことになった。その取り組みの中で、あの、街路樹モデルの候補だった市役所前のイチヨウ並木に、自身が手を入れる好機を得た。送電線が集中する場所でいかに樹木と電線を共存させるか、徒長枝の大量発生や黄葉の遅れなど、樹木に異変が起らないよう剪定量の加減を意識しつつ、歩道にできるだけ多くの木蔭を落とせるように工夫した。

秋田県大潟村には「銀杏ロード」という通りがあり、その名のごとく、道の両側に実採り目的のイチヨウの木を植えている。低く枝を張らせたイチヨウはリングゴの樹形を思わせ、これは電線対応の街路樹に活かせると直感、それをヒントに、樹形再生を試みた。のちに、京都西本願寺の「逆さ銀杏」と出会うが、その樹形に似ていた。

この時手掛けた木はその後も樹形が乱れず、数年間は剪定の必要が無かった。あの時、鋏が持てなくなった経験が、ここで生きた。

街路樹のイチヨウの樹形については、神宮外苑のイチヨウを手本とする所が多いが、外苑のイチヨウは整形的な刈込樹形で、イチヨウ本来の樹形を活

かした「自然樹形」ではない。また、イチヨウの理想的な樹形を「円錐形」とする所もあるが、自然状態のイチヨウは円錐形にはならない。

枝や幹を切ること自体が樹木の自然性に逆らうことではあるが、制限の多い街なかでは、剪定で樹形を調節しなければ様々な支障が出てしまう。「自然樹形」を広義に捉えて人工的な刈込を「自然樹形」とする所もあるが、刈り込んだ木を自然樹形とすることにはかなり無理がある。同じ広義でも、枝先を切らないことで樹形に柔らかさを出すことを「街なかの自然樹形」として考えたのが、この、果樹型の電線対応樹形だった。

上空に電線のある所ではそうしたスタイルにし、途中に電線のある所では、電線に障る枝だけを幹から切り、電線周囲に大きな空間を作った。全体を切り詰めて樹形を縮小するのではなく、イチヨウ本来の樹形をそのまま維持しつつ、電線のある個所の枝だけを切るやり方。この二つのスタイルで、街路の環境に適応させていった。

「自然樹形」を辞書引きすると、「樹木が環境に適応した姿」と出て来る。街なかの街路樹は、車両通行、電線、建物等という、制約のある環境の中で生きている。山の中で、崖の前にある木が崖側に枝を出さないように、岩があれば、岩の上に枝を出していくように、自然界の樹木は置かれた環境の中で適応していく。それが、「自然樹形」ということ。崖は建物、岩は車。そう捉えれば、自然界でそうした状態にある木の姿を見れば、街なかでどのような樹形にすることが「自然樹形」なのかが見えてくる。樹木を人の手で見栄えよく整えようとするのではなく、樹木の自然性を尊重し、環境に合わせてあげるというのが、自分の考え方。

自然の中では、樹木は時間をかけて環境に適応していくが、街なかではそんな時間がないことが多い。その時間を短縮する技術が剪定で、時間を短縮しても木々に異変を起こさせないことが技術だと思っている。そんな意味では、街路樹の剪定技術は、樹木を環境適応させるための「ワープ」だといえるだろうか。そんな試行を、この街路樹剪定で行えたのは、とてもありがたいことだった。

ついでに、時間を2012年までワープすると、ここで行った方法は、埼玉県でも応用された。同県の同業から相談を受け、電線直下にある、校庭外周の道路際の高木に対して、電線を避けながら自然樹形を維持する剪定が行われた。その報告を受けた時は、とても嬉しかった。そして、ブツ切りだった木の修復を熱心に担当者に話し、説得した上での仕事であったことに感動した。自分の試行を参考にしてくれる人がいたこと、自発的に、行政に提案する庭師がいることをとても心強く思った。

そして、この年を最後に、実質的な街路樹剪定の場からは身を引いた。この



果樹のイチョウ(左)をヒントに電線を分けて伸びるように考えたイチョウの樹形(右)

街で、自身の考えを形で示せたことで、一つの目的は達成できたから。街路樹の流れが大きく変わったことを、この木の姿が現している。それだけで、満足。緑の道開きに携わり、大きな充実感を得られたことに感謝した。

今振り返ると、「透かし」の勉強会を持ちかけた時の役所との攻防？では、『透かし』という特定の剪定方法を強要するのは良くない』と言われたものだった。それが今は、その「透かし」が能代の主流となり、地元紙などでは「自然樹形管理」という言葉が当たり前のように使われる。

メディアが街路樹に寄せる関心も高まり、他紙とは比較にならないようなハイレベルな記事を書く。市議会ではその後も街路樹が取り上げられるなど、議会の意識も変わってきた。街の意識が、高まってきたのだ。

ブツ切りが普通だった街が、普通ではないことに気付き、樹木を普通の姿で街に存在させるにはどうしたらいいのかを考えるようになってきた。あの、暗黒の時代が嘘のようだ。

街の意識がここまでになったことが、とても嬉しい。活動をしてきて、本当によかったと思う。これからは、この街が二度と後戻りしないように、緑の啓発をする側に回りたい。それが自分の、次のステージ。



電線の多い箇所の枝を抜いたイチョウ



剪定直後(右)と、その年の深緑時(左)

◆ちよっと一服①

今は小中学生になっている二人の子供たち。このエッセイは、10年近く前に、ケヤキ並木の前を通った時のことを書き留めていたものです。この時は田んぼや畑だった並木の周りに家や店が建ち、やがて小学校もやってきました。新しい小学校の校歌には「森の学び舎」という歌詞が出てきますが、今、子供たちは、学び舎の森となったケヤキのトンネルをくぐって通学しています。そんなケヤキ通りに、学校が建つ前のお話です。

『け・ぬ・き』

このところ、毎朝夕、二人の子供の保育園の送迎を担当。

往復の車中は、いつも5歳の娘とナゾナゾ合戦をする。

娘「さてそれでは今日の問題です。いつも留守にしている鳥さんは何でしょうか？」（以下「」は娘）

えー、難しいなあ、先生！ヒント下さい。（「難しい」と言うとき得意がる。）

「しかたないですねえ。今日は特別ですよ。ヒントはー、答えには『ス』が付きます。」

えー、「ス」かあー。あ、わかった！先生、スズメです！

得意げに「ブー、正解はカラスでした。」（1回でブーかよ）

先生、どうしてカラスなんですか？

「え？・・・だって、そんな答えだから。」（意味解ってなかったんだ・笑。ちなみに正解は空巢（カラス）です・笑）。今度は自分の番。

さてそれでは問題です。（街路樹を指差して）あれはいったい何の木でしょうか？

「え、先生、ヒント！」

第1ヒントです。上に「ケ」が付きます。

「ヒントもう一回！」

それでは第2ヒントです。下に「キ」が付きます。

「あ、わかった！『ケーキ』。」

ブー。では特別にもう一つヒントです。

「し」か「ぬ」か「や」が入ります。

「あ、わかった。『け・し・き』！」（確かに景色は良いなあ・笑）。

ブー！正解は、

「あ、わかった。『け・ぬ・き』！」（順番に言ってます・笑）。
ブブー！正解は、



木蔭のトンネルが美しい、二ツ井小学校前のケヤキ並木（秋田県能代市二ツ井町）

「あ、今度はわかった。『け・や・き』！」
正解！！難しい問題なのに、よくわかったねえ。
ほら、ホウキを反対にした形をしているのがケヤキの木なんだよ。
翌日もまた同じ問題を出す。
さてこのホウキを反対にしたような木はいつたい・・・
「知ってるよ。昨日やったもん。」
『け・ぬ・き』でしょ！」

第2部 全国街路樹サミット開催を夢見て

さくらサミット

雪国の春は遅い。雪下ろしで積み重なった白い山を見ると、春は本当に来るのだろうかと思いが遠くなる。それでも、屋根より高かった雪山が小さくなり、窓から日の光が差し込む頃には、日当たりの雪間からフキノトウが顔を出してくる。春の知らせを見つけてホッとするこの瞬間、長かった冬の疲れも一気に吹き飛ぶ。

春の象徴といえば桜だが、この年の桜は不作だった。ウソの食害により、蕾が少なくなってしまったようだ。こんな年は、桜が咲かないことがニュースになる。きみまち阪や桜づつみ公園など、二ツ井は「町の花」を桜にしていただけあって、桜の名所がたくさんある。そんな桜の景勝地に花が少なくて、地元紙から原因を問い合わせる取材が来たりした。

でも実を言うと、昔から花見をする習慣が無い。きみまち阪は好きだが、花の時期には出かけたことがなかった。というよりも、桜のことがあまり好きではなかった。満開の花を咲かせる桜は誰からも愛される。一方で、イチヨウやプラタナスにも可憐な花が咲くことを知る人は少なくて、毎年短く切られてしまう街路樹には花も実も付けなかった。

そんな街路樹と比較して、花が咲くだけで愛される桜に対して、嫉妬していたのだろう。でもそういえば、自分は桜のことをあまり知らない。取材を受けてみて、そんなことに気付いた。

こんな時は勉強の機会が巡ってくるもので、ほどなくして、「さくらサミット」の案内記事を目にする。なんでも、桜でまちづくりを行う全国の自治体が集まり、情報交換を行うらしい。秋田県で桜といえば、角館(現仙北市)が有名。今年はその角館が主管となり、「桜係」をされていた樹木医さんの講演もあるという。地元で開催されるなら、行ってみようかな。そんな軽い気持ちで、家族を誘って出かけてみた。

「サミット」と名の付くものに参加したのは、多分これが初めて。そこには、全国の桜の先進地が集合していた。自分の街の取り組みを紹介しつつ、現在抱えている課題などを話し合っていた。先進地が集まる場だから、さすがにレベルが高いと感じた。

各地の事例で目に留まったのが、桜の落ち葉でプールを作り、子どもたちを遊ばせていた写真。これはいいな。これは楽しい。企画する側も、参加する子どもたちも、子どもたちに付き添う家族も、みんな楽しいだろう。これま



花が終われば緑のトンネルとなる、角館の桜並木

での街路樹活動は、管理者である行政に対して、義務や責任感ばかりを求めてきた。こうした楽しむ気持ちが無ければ、モチベーションを維持することは難しい。そんな楽しいことを、行政が考え、市民に提供している。そして、花の咲いていない時期に桜の木と触れ合う機会を設けていること。花は一時だが、桜の木は一年中そこにいる。桜の木は花の咲かない時期にも生きていて、咲かない季節にも魅力はある。これは、花の目立たない街路樹でも同じこと。楽しむこと。触れ合うこと。魅力を探すことの大切さを、このサミットから学んだ。

そして、ある思いがふつふつと湧いてきた。全国の先進地が集まり、情報交換をするサミット。自分のような田舎植木屋の所にも、街路樹をどうしたらよいかの相談が全国の自治体から寄せられる。街路樹にもこんな場があり、そこに発展途上の自治体が来れば、ほしい情報を直接先進地の担当者から得ることができる。「さくらサミット」があるのなら、『街路樹サミット』があってもいいだろう。そうすれば、街路樹で悩む全国の自治体を助けてあげられる。街路樹サミットをやりたい。そんな思いが、とめどもなく沸き上がった。

桜日本一の弘前へ

さくらサミットの閉会后、講演された樹木医さんに話を聞きに行った。角館は、花の咲いていない時期にどんなことしているのだろう。その質問を直接ぶつけてみた。

返ってきたのは、「花の咲いていない時にこそ、咲いてもらうためのことをしています。」。なんとも明快で、心に響く言葉だった。

そして、なぜ樹木医になったのか、角館はなぜここまでになったのかも訊いてみた。「私はもともと、設備系の職員。それがある時、何の知識も無い自分に『桜係』をやれと。それが樹木医を志した始まり。桜といえば、やはり弘前。角館は、弘前から学びました。」。

弘前はお隣青森県。能代からの距離は、同じ秋田県の角館まで行くのと変わらない。角館が教えてもらったという弘前はどれほどすごい所なのか。思い立ったが吉日。その週の雨の日、さつそく弘前公園に出かけた。

園内には緑の相談室があり、さくらサミットの話をすると、公園課の方が出て来られた。その方の風貌には見覚えがあった。さくらサミットの来賓席におられた方。弘前はサミットの加盟団体ではなく、来賓として招かれていた。弘前は、全国の中でも別格なのだということを感じた。

弘前には、「弘前方式」と呼ばれる独自の桜管理法がある。弘前市は津軽地方にあるが、津軽は全国屈指のリンゴの産地。弘前公園の樹形や剪定方法には、リンゴ栽培の技術が応用されていた。リンゴは果樹。果樹は実を採るのが目的だから樹高が低い。そして、実の生育に必要な日光をまんべんなく受けられるよう、大きく枝を広げた姿をしている。弘前公園の桜の木は、まさにそんな姿をしていた。

樹高を低く維持するこの樹形は、ソメイヨシノ特有の病気である「テングス病」の除去も容易にする。高い所についたテングス病枝を除去するのはなかなか至難で、放置されて荒れた木を各地で見かける。木が、脚立やはしごで届く高さになっていると、そうした管理もしやすい。弘前は、本当に頭の良い所だなと感嘆した。

園内には、樹齢100年以上のソメイヨシノが300本以上ある。ソメイヨシノの寿命は樹齢60年程度と言われるが、ここではそんな常識は関係なかった。木は長生きできる環境を整えてあげれば、木が生きたい限り生きられる。古木の桜が多い園内を歩いていると、弘前は木が長生きしやすい環境をつくることに長けているのだと感じる。

常識といえ、弘前方式は「桜切るバカ」の常識を覆したことで有名。

低い位置の片側の枝だけで生きているソメイヨシノ（上）と、樹高を低く抑えたお堀の桜（下）



※「弘前方式」は剪定ばかりでなく、剪定によって減ずる樹木の力を補う「施肥」と、根の健全伸長を促す「土壌改良」の3つを組み合わせたやり方です。

「桜切るバカ」は、桜は剪定すると切り口から腐りが入りやすいことからむやみに切つてはいけないとの戒めだが、「弘前方式」は積極的な剪定によって桜を維持管理している。なぜ切つてはいけないとされる桜を切り、日本一になったのか。それは、「むやみ」に枝を切っていないからで、木を腐らせないやり方を知っているから。

この、樹木が腐朽しにくい剪定方法は『CODIT理論』と呼ばれるもので、街路樹勉強会の時にも紹介した。これは、樹木医が採用する理論だが、弘前公園の桜管理を指揮する人も樹木医。弘前は、津軽伝統のリング栽培の技術と、最新の樹木医理論を融合していた。新旧にこだわらず、良いことは採り入れていく。そんな頭のやわらかさが、弘前が日本一と呼ばれる所以なのだろう。

『CODIT理論』の剪定方法は桜に限らず、どんな樹木にも当てはまる。切ったらバカと言われる桜を腐らせずに維持できる技術があれば、どんな樹木でも剪定できる。それを覚えれば、街路樹が哀れな姿になることも無い。この方法を能代市共通のやり方にできないかと思った。

落ち葉はゴミか

これまでやってきたことは街路樹の剪定技術の改善が主だったが、次なるステージは緑の啓発と決めた。

いくら植木屋の技術が向上しても、市民理解が深まらなければ街路樹は良くならない。啓発の相手は市民になるが、市民のことを知るには、植木屋であることを捨て、街なかに入らなければならない。技術者の意識でいると、木を技術の対象として見てしまうところがある。それはそれとして、そこから離れなければ市民感覚はわからない。市民として街なかに入らなければ、本当の意味での街路樹問題は見えてこないのではないか。そんなふうに思っていた。

その一環として、「官庁街落ち葉掃除」に参加した。能代地区で20年以上続く恒例事業で、400人規模で行われる大々的な掃除。この掃除は隣の市（旧能代市）の事業だから、合併後に新聞で見えるまで知らなかった。

新聞には、主催側の趣旨として、「街の中にゴミのない街を目指す運動の一環。この運動が全市に広がり、全国一きれいな街、美しい街になることを願っている。」との言葉があった。この掃除の正式名称は「秋の落ち葉一掃運動 能代クリーンアップごみゼロ運動」だから、この趣旨は正しい。

ただ、「ごみゼロ運動」の中の「落ち葉一掃」と位置付けると、「落葉が無くなれば街が美しくなる」というふうにも取れる。「落ち葉Ⅱごみ」としてしまいう意識が、ごみ（落ち葉）の元である街路樹に向けられ、それがブツ切りを招いてしまったようにも思う。

落ち葉の大半は街路樹の葉っぱだが、葉っぱは酸素を作り、木陰を作り、街のホコリを吸着し、気温や舗装面の温度を下げるなど、市民生活に大きな貢献を果たしている。そんな働きが知られずに、一気に葉が落ちてしまうことにばかり目が行き、迷惑な物とのイメージがついてしまう。ゴミという言葉を書き直すと、「利用価値のない汚いもの」と出てくる。落葉は汚いか？

この街路樹の落葉は、街の花植え事業の腐葉土などにも使われる。雨で地面に張り付いた葉を汚らしく感じる人もいるかもしれないが、この葉が数年後、街にきれいな花を咲かせてくれると思えばどうだ。落葉を袋に詰めて出せば市が回収してくれるから、ごみとして捨てれば落葉もただのゴミ。しかし、落ち葉が循環して次の命を育むためのものとして活かされれば、ごみではなく資源となる。

木は土から生まれたもの、土から生まれたものは土に還るのが自然。能代は世界遺産白神山地のおひざ元。そのブナ林に落ちる葉は宝物と尊ばれるが、街の樹木が落とす葉はごみと呼ばれる。山に落ちる葉は地球にとってかけが

えのない財産と言われるが、同じ木の葉でも、落ちる場所が違うとごみになる。

ある時、自宅前に落ちた木の葉を子供が拾って持ってきてくれた時のことを思いだした。真っ赤に色づいた葉、黄緑から赤へ色変わりする途中で落ちた葉、虫食いの葉、ケヤキの葉、モミジの葉、いろいろある。一枚一枚が違う葉を、面白がって拾う子供たち。

時々「お父さん、見て見て！きれいだよ！」と叫ぶ。きれいなものをきれいと思う心は美しい。美しいと思う気持ちたちが心の豊かさを育てる。落葉はこんなにも人の心を豊かにしてくれるのだと、子供にそんな思いを抱かせてくれた葉っぱに感謝した。

この掃除には、地元の中学生在が300人以上参加する。そんな子どもたちに落ち葉はゴミという意識を植え付けてしまうと、やがて大人になった時、落ち葉はごみだから、ごみの元の本を切れとなるかもしれない。

どうしたら、落ち葉のイメージを変えられるか、この落ち葉掃除を街路樹の啓発事業にできないか、子供に自然の営みや循環を教える教育の場にできないだろうか。ホウキを動かしながらそんなことを考えていた。

街なかの葉っぱに逢いに行こう！

毎年落ち葉掃除の頃になると、地元紙に街路樹の役目や葉っぱの効用効果について書いたりしていた。それを見た主催側が挨拶に取り入れてくれるようになったりまた元に戻ったりと、落ち葉の意識や取り組みは、なかなか日進月歩とはならない。街路樹が自然樹形に変わるまでも3年かかったのだから、それと同じぐらいはかかるのだろう。そして、そんな中での一喜一憂を積み重ねなければ、実際の形にはならないようだ。

ある時、自分の書いた落ち葉の記事を見たとき、街なかに住む自治会長さんから電話をいただいた。「言っていることはわかるが、そこに住んでる人は大変なんだよ。」。自分の話は、そこで暮らす人たちにとっては理想論なのかもしれない。ただ、実際に街路樹のそばにいる人の声を聴けたのは、とてもありがたいことだった。この会長さんには、二ツ井から毎年落ち葉掃除に参加していることや、行政に、本当に困っている地域を助けるための落ち葉ボランティアを申し出ていることなどを話した。

話せば伝わる。否定や理想だけを言うのではなく、実際に動いていることを話したら、理解してもらえた。でも、沿道の方々の生活にとって、何も力に

なれていないことは確か。たった一日の一時間の掃除は何の助けにも気休めにもならない。落ち葉をゴミとしない意識を育みつつ、落ち葉で難儀する人の力になることはできるか。

この、相反するようなことを実現するためにはどうしたらいいのか。そんなことを考える日々が続いた。そして思いついたのが、落ち葉掃除のポスターを作ることに決めた。落ち葉掃除の募集でありながら、落ち葉を無くすイメージは持たせない。そんな呼びかけとして、ポスターのタイトルを『街なかの葉っぱに逢いに行こう！』にした。

掃除に行くのではなく、葉っぱに逢いに行くのだ。ポスターの写真には、前年の掃除の際、ホウキを片手にイチヨウの黄葉を見上げている人や、地面に落ちた葉っぱや実を見ている人の姿を映したものを使った。そして、次のメッセージを添えた。

いつもは高い所にいる街なかの葉っぱたち。

落ち葉の舞い降りる秋は、彼らと触れ合える一期一会の季節です。

まだ上にいる葉っぱには「頑張れ！」のエールを。

足元の葉には「お疲れさま」のねぎらいを。

今年も、色とりどりの葉っぱたちに逢いに、街なかに出かけてみませんか。

このポスターは官庁街落ち葉掃除への協力として行い、市の施設や商店街などに掲示させていただいた。地元紙にも紹介されたから、多くの市民が知るところとなった。

そして、この年からこの官庁街の落ち葉掃除には『木々の恩恵に感謝して』というサブテーマが付けられて、掃除の開会式で高らかに宣言された。市の行事だから、広報や地元紙の行事欄にもこのタイトルは載る。テーマを付けてくれた担当課の方、それを載せてくれた広報係の人に感謝した。

一つ進んだ。この年は、そんな充実感を胸にホウキを動かした。



落ち葉に会いに行くためのポスター

小さな街路樹サミットin能代

街なかに入ってみて、街路樹は市民生活に直結しているとわかった。街の木がブツ切りになることの背景には、様々な問題がある。全国的に、ブツ切りの問題は剪定業者の技術力や行政の管理能力不足に責任が求められがちだが、街路樹を取り巻く問題は複雑で多岐に渡る。一つ一つを掘り下げ、かつ、総合的に議論していかなければ、なかなか解決への道は開けないと感じている。

技術の高い専門業者が街路樹剪定を行っても、剪定を行うのは業者ばかりではなく、行政の作業員や電力会社なども行う。そこに管理方針が浸透していないと、またブツ切りが起こる。

街なかを見回せば、街路樹の幹には駐車禁止や犬の糞禁止、交通安全、住所表示などの看板が付けられ、景観を壊している。中には釘打ちされているものもあり、生きている木と材の区別がついていない現実。

針金巻きされたものは、幹が太って食い込み、養分が遮断されて枯れる木も出てくる。木が倒れないようにと付けた支柱は役を終えても外されず、腐って傾いて、それを踏んだ市民が怪我をすることもある。

境界を越えて枝が伸び、住居に侵入するようになれば、やはり迷惑。そうしたことが住民要望としてあげられても、対処されるのはかなり後になる。落ち葉の処理と併せて、そうしたことが沿道住民のストレスとなり、「こんな木、ぶった切ってくれ！」となる。

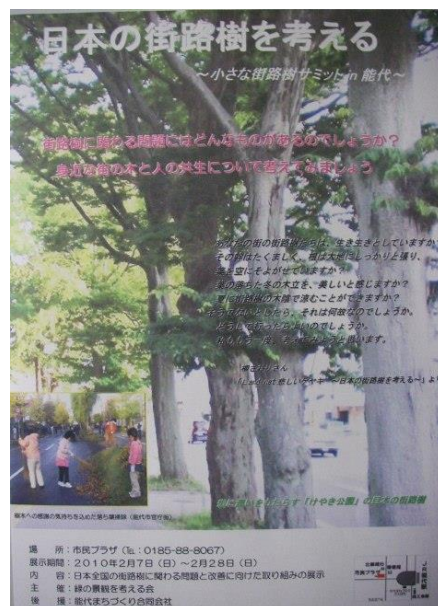
戦後に植えられた木は大きくなり、狭い植樹枘しか与えられていない街路樹は、根が酸素も水も得られずに、苦しくて道路を持ち上げる。凸凹になった歩道でつまづく人もいるだろう。そして、歩道を直すために盛り上がった根を切られ、木が傷んでいく。

樹木の生理を考えないブツ切りにより枝や幹に腐朽が進行、やがて空洞化して木は自身を支える力を無くし、強風や雪で折れてしまう。そんな悪循環が、地元ばかりではなく日本各地で起こっている。

そしてそんな中で、何から手を付け、どこを変えていけばいいのか、街路樹を管理する行政は何をしたらいいのかわからず、とりあえず支障の出たものに対し、その場しのぎの対処を行う。

そんなことが、地元でも全国でも、延々と続いているような気がする。地元の問題は全国の問題で、日本の問題はふるさとの問題。目を外に向け、全国の問題や改善例を知ること、で地元の問題解決に活かせないか。

さくらサミットで思った「街路樹サミット」をやりたい。街路樹の勉強会や新聞に書く記事は一過性で、そこに参加できなかった人や読まなかった人に



小さな街路樹サミット（上）とポスター（右下）、それを伝える新聞記事（左下）

はわからない。これまで集めた情報を一覧展示して、市民に継続的に見てもらえる場を提供しよう。大きなことはできないが、まずはできることから始める。そんな思いで、『日本の街路樹を考える』小さな街路樹サミット in 能代』を企画、市内施設で一か月ほど展示させてもらった。北は北海道から南は九州まで、行政、市民団体、議員、造園家、作家、学究者など、自分が知る限りの好例や改善に取り組む個人団体を取り上げて紹介し、能代で起こっている同じ問題に対しての改善策をコメントで提案した。地元紙でも紹介いただいたので、多くの方々に見てもらえたように思う。

そして翌年の初春、地元紙に「私の初夢は街路樹『日本一』の街を創る」を寄稿、本物の街路樹サミットを能代で開催する夢を語った。その2か月後には、専門誌にも同様のことを書いた。この新聞投稿を知った、豊藏さんの声がけだった。

この一文は、豊藏さんの手によって『全国街路樹サミット』開催を夢見て街路樹は微笑む 一市民としての草の根運動（隔月刊誌『庭』198号）と名付けられた。こうして、実現のあてのない他力本願の夢は、全国に向けて飛び立った。賛同者に見つけてもらうための、小さな夢語りだった。

ブツ切り再発

小さな街路樹サミットの開催は2月だったが、同じ年の秋、恐れていたことが起こった。再生過程にある市道の街路樹のほとんどに、再度ブツ切りが行われたのだ。電線管理者による、電線支障対策の枝切りだった。

電線下で枝を刈り込むと、その後に大量発生する徒長枝を間引くのにとてつもなく手間がかかる。自身が街路樹剪定をした時にもそうした経験をしているが、そんな無駄なことに時間を取られなければ、1本でも多くの木に手を入れられる。行政には電線管理者との連携を持つように強く提言していたが、それほど重要なこととは捉えていなかったのかもしれない。

街路樹は公共物だから、そこに手を加えるには管理者の許可が要る。市道の管理者は、電線の管理者に対して、自然樹形管理の方針や剪定の仕方を明確に伝えていなかったようだ。再生剪定に掛けた2年間の思いや市税が、水の泡になった。許可を出す市道の管理者と申請する電線の管理者、電線管理者の委託を受けて剪定する業者、3者のいずれかに意識があり、確認することをしていたら、こうしたことは起こらない。知人から聞いて駆け付けると、剪定はほとんど終了し、能代はまたブツ切りの街に戻っていた。

街路樹サミットでは、全国初で可決された埼玉県久喜市の街路樹条例や、東京都江戸川区の街路樹指針のことを紹介していた。やはり、具体的な指針や条例を作らなければ、ブツ切りは繰り返される。そこまで持っていかなければ、何度も同じことが起こるだろう。とても悔しくて、残念なことだった。

街の木を見て呆然となったが、こんな経験を何度もしていると、いい意味で慣れる。すぐさま江戸川区に連絡を取り、電線と共生する街路樹の写真を提供していただいた。そこに、自身が剪定した電線対応の街路樹や全国の他の事例も併せて、『街路樹景観写真展』と題した展示を行った。まさか、同じ年に同じ会場で、二度も街路樹の展示を行うことになるとは思わなかった。この展示は、市県や電線の管理者にも案内して見ていただいた。

これを契機として、市県と電線関係者、街路樹管理を受ける造園関係者との間で連携会議が持たれた。事件を予想して提案しても、事件が起こらなければなかなか対処されないという現実。1歩進んだかと思えば、また元に戻る。

この機会に、なぜ起こったのかを検証し、これを教訓として、二度と起こらないような体制づくりを行わなければならない。そして、それをやるのは自分ではなく管理者や関係者。街路樹に関わる者として、街路樹の適正かつ良好な管理を心がけてほしい。

再びブツ切りとなったイチヨウの木



『街路樹葉っぱの詩』と出会う

せっかく自然樹形に向けて方針が変わった市道の街路樹が再度ブツ切りになり、なぜこうも行政というものは同じ失敗を繰り返すのだろう、なぜ引継ぎや連携をしないのだろうか、管理者なのだから、もつと意識の中に街路樹のことを置いてほしい、そんな憤りや怒りがなかなか自分から離れなかった。仕事をしていても家族と団らんしていても、すぐそのことを頭が思い出し、不機嫌になる。不機嫌はストレスとなり、体の調子までおかしくなった。

そんな中、仕事で秋田市まで出かけた帰り道に、なんとなく書店を覗いた。読書の習慣が無い自分の行く所といえ、もっぱら、専門書のコーナーぐらいいだ。いつものように庭や樹木についての本を追っていると、1冊の本に目が留まった。

『街路樹葉っぱの詩(世界文化社)』というタイトルだった。街路樹のことで頭に来ているのに、街路樹の本を手にとってしまう自分。そんな自分に呆れながらも、つい手に取ってしまった。

表紙のカバーには、「耳をすますと葉っぱのひとり言が聞こえます。」とあった。裏には、「あなたも街路樹を探しに行きませんか」。

何気に手に取りパラパラとページめくると、不思議なことに、癒されてしまった。ついさっきまで抱えていたストレスが、スーっとどこかへ消えて行った。逃れたくても離れることができなかった怒りや憤りがどこかに飛んで

いった。

これまでの自分は、怒りや反骨が活動の大きなエネルギーだった。それがなんだか、そんなことがどうでもいい気分になっていた。この本からは、木が大好きだ、街路樹が大好きだという作者の思いを隅々から感じる。それでいて、押し付けがましい熱苦しさが微塵も無く、読んでいて逆に愉快になる。この本は、人として、純粹に街の木と向き合える本だった。

この画文集の著者は、日本でただ一人の葉画家、群馬直美さん。押し花ではないかと見間違えうほど繊細な葉っぱの絵と、鉛筆画のような街並みの絵。街並みの絵には建物と街路樹が描かれているが、木だけに色が付いているのが面白い。

街なかで見過ごされがちな街路樹にスポットが当てられているようで、「私はみんなのそばにいるよ」という木の声が聞こえてきそう。こんな絵を見るのは初めてなので、とても新鮮だった。外苑のイチヨウや表参道のケヤキなど、自分も実際に見たことのある景色もあるけれど、他の絵からもなんとも言えない懐かしさを感じるのが不思議だった。絵には、木や通りの紹介と、その木にまつわる作者のエッセイも付いている。

始まりはイチヨウから。イチヨウの由来では別名を「公孫樹」ということを紹介、孫の代にならなければ実が付かないこの木の性質に対して、「自分は恩恵にあずかれないが、先代の行為を受け継ぎ、実りを次代に差し出す！深くて美しい名」とある。

そうなのだ。今の自分の活動は、能代の偉大な先人たちが目指した緑の街への思いを受け継ぎ、次代の子供たちへと引き継ぐためのものなのだ。優しく楽しい言葉と美しい葉っぱの絵、妙に懐かしさを覚える街並みの絵に、心がだんだんと軟らかくほぐれていく。まるで、何かの呪縛から解放されるかのようなだった。絵の力、木の力、本の力とはすごいものだ。

道が見えてきた気がする。まっすぐしか見えなかった視界が少し広がってきたようだ。その後、群馬さんは「木の葉と木の実の美術館」という本を出版する。うちの子たちには「このは」と「そのみ」と名付けていたから、その本は、自宅の「このはとそのみの美術館(本棚)」に置かれている。めぐり合わせというかなんというか。この本と出合えたことに心から感謝した。



街路樹葉っぱの詩

市長対談再び

この年の3月は、日本を揺るがす大きな天変地異が東北を襲った。悲しくてつらい、信じられないような出来事だった。

そんな中、「能代の街路樹を日本一にする提案」をテーマに、再びの市長対談が予定されていた。このまま行うべきかどうか、とても悩んだ。幸い、秋田県は被害が少なく、予定通りに行われることになった。

でも何か、こんな時期だからその心を示したい。そんな思いで、雪に咲くフキノトウを会場に飾らせてもらった。フキノトウの花言葉は「待望」、そして「仲間」。待ちに待った春。今はつらくても、共に支え合う仲間がいる。そしていつか、誰の所にも、必ず待望の春がやってくる。そんな思いを、芽吹いたばかりのフキノトウに託した。

今回のメンバーは3人。前回参加の20代の若手と自分。そしてもう一人は、市外在住の若き樹木医。前月、この樹木医さんとは、弘前で行われた桜のシンポジウムで知り合って意気投合。市長対談への参加を呼びかけると、二つ返事で快諾してくれた。

「世の中を変えるのは、若者、よそ者、ばか者」。志に燃える若者と、客観的かつ専門的にものを見れる樹木医、そして、街路樹の大ばか者を目指す自分。そんな意味では、非常にバランスの取れたチームだ。この、磨きのかかった少数精鋭で対談に望む。

今回のメインは3つ。能代が街路樹日本一になるためのこととして、「街路のビジョンを持つこと」。具体的には、街路樹の大きさや樹形などの景観目標を定めること。ブツ切りを無くすためにも、樹木を腐朽させない剪定法（C O D I T 理論）を仕様書に取り入れること。

2つ目は「連携」。庁内の意識共有と円滑な引継ぎ、そして国県との連携。3つ目は「協働」。予算が厳しい中、市民・行政・業者の共同で緑化管理を行っていくこと。

ビジョン、連携、協働。この3つをキーワードとして、日本一を目指そうと提案した。

これに対しては、「市が進める『木』のまちづくりには街路樹も含まれる。街路樹を財産として良い形で残していきたい」との答えを得た。この1時間の議論で何かが決まるわけではないが、行政に現状を知ってもらうことや、緑の持つ可能性を知ってもらえる機会はとても大事。

今後も、こうした啓発の機会を持っていきたい。



フキノトウを飾って行った市長対談

緑の先進地視察

能代の街路樹を日本一にする。前年にそんな提案をしたものの、資料で紹介した好例は関東地方が中心で、実際に見たことのないものも多かった。

資料と実際の整合を確かめたいし、何より実物を見てみたい。そして、関わっている人と直接話をしたい。緑の先進地に、視察に行ってみようかな。

そんなことを漠然と考えていると、「まちづくりのためにやることだから、これって行政の補助金の対象になるんじゃない?」、そう勧めてくれる人がいて申し込むと、視察は対象外なのだという。

遠方から講師を招聘するのはいいが、こちらが遠方に行くのは駄目なのだろう。しかも、報告書を提出しなければならないという。それはいいとして、いずれ講師をお願いするにしても、まずその人と会い、その人が関わった物・事を見聞きしなければ、講師をお願いすることもできない。しかし、そうした事前下見は、補助金の事業には含まれないらしい。駄目だというのなら仕方が無い。というよりも、はじめから自腹で行く気だった。

ということと、正月早々、関東地方の緑の視察に出掛けることになった。一番に向かったのは、東京都立川市の国営昭和記念公園。そこで、「街路樹葉っぱの詩」の群馬直美さんが個展を開かれていて、初めてお会いすることができた。芸術家の人とは会ったこともないが、なにか、孤高の人のような、自分

たちとは別世界に住んでいる人という印象がある。会場で絵を書いていた群馬さんは、それとは逆の、とても気さくで飾らない人だった。

作品を見て回る中、一つの言葉が目にとまった。「植物には、人を善導する不思議な力がある」。群馬さんが感動したという、日本の植物学の父、牧野富太郎博士の言葉だった。

『善導』。この言葉を目にした時、心の中で何かがストンと落ちた。なぜ自分はこんなにも街路樹に一生懸命になっているのか。時々感じていたそんな疑問の答えが、ようやく見つかった気がした。

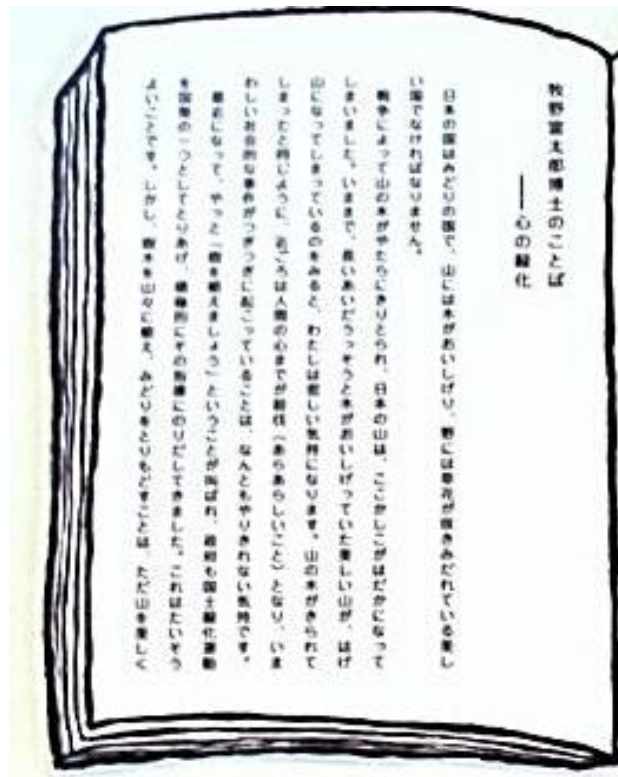
街路樹の在り方を提言してきた活動は、行政に適正管理への理解を深めてもらい、活かしてもらうためのものだった。理解してもらうためにはこちらが勉強し、説得するためにはさらに勉強しなければならない。そんな過程で、街路樹の役割や樹木の生理、世の中の仕組みなどをより知ることができた。

そしてそれは、普段の庭づくりにも活かされた。形だけだった庭に木蔭の効果が入り、人が暮らせる庭に変わってきた。技術的にも、実際に剪定を行う中で失敗し、直し、その繰り返しの中で磨かれ、意識も高まってきた。活動の中では、様々な人との出会いもあり、その時々でたくさん助けられてきた。

街路樹を救いたいと始めた活動は、結果として、自分自身を善の方向に導き、自分を救うことになった。街路樹が自分を導き、人として育ててくれたのだろう。そう思ったら、なぜ自分が街路樹をやってきたのかの謎が解けた。

「街路樹葉っぱの詩」を見つけた時も救われたけど、ご本人に会いに来て、また救われた。本を見つけたのは偶然だったが、きっと必然。ここに来たことも、街路樹の導きなのだろう。

そして、これから始まる視察でも、そんな必然が待っている。そんな予感が高まる、群馬さんとの出会いだった。



群馬さんの個展会場で感動した
牧野博士の言葉

全国初街路樹条例の街

「小さな街路樹サミットin能代」では、全国初で街路樹管理条例を可決した埼玉県久喜市のことを紹介した。この条例を提案した議員さんと、条例が施行されている街並みをこの目で見たかった。

視察の初日はその久喜市。そして、ありがたいことに、議員さんから案内していただくことになった。精力的で精悍な方というイメージだったが、駅まで迎えに来てくれた議員さんは、とても静かで穏やかな雰囲気。そんな中にも、顔立ちに「正義と誠意」がにじみ出ていた。議員然としたところが無く、とても気さくで物腰もやわらかい。街路樹に関心を持つ議員は少ないが、そんな中、条例まで作ろうとする人だから、よっぽどの熱意と気骨。それだけ、緑への思いが深く、それだけ、この街の木は悲惨な姿になっていたのだろう。

条例についてのお話を聞く中、市町村合併により、小さな町が大きな市に街路樹改善を求めた能代市とは逆のケースであることがわかった。旧久喜市で制定された条例が、周辺諸町との合併後も運用されたとのこと。二ツ井と能代では街路樹に対する行政の意識にかなりの温度差を感じたが、合併する町の数が多いほど、そうした意識の差はあったと思う。町々がこの条例を理解し、合併後も存続されたことを、とても素晴らしいことだと思った。

久喜市の市役所周辺はイチョウの街路樹が美しかった。以前に短く切られた様子がうかがえるが、そこから再生して、やわらかな樹形となっていた。市役所敷地内にもイチョウ並木があり、街路樹と施設の景観に繋がりを持たせている所に好感を持った。

庁舎向かいには公園となっていたが、通常、街路樹と施設、公園は、同じ市管理でも管理する部署が違うことが多い。それが、同じ自然樹形で保たれている所は、庁内各課に連携があるという証拠だ。緑化管理についての意識が統一されていなければ、景観は一樣にはならない。この景観を見て、この街の意識の高さを感じた。

市内各所を案内していただいて説明を受ける中、逆に意見を求められたりもした。目の前には、市役所前と違う姿をしたイチョウ並木があった。電線が多く、それに対処した樹形だと思われた。

社交辞令を言っても見抜かれるから、正直に話すことにした。電線に合わせて樹形をコンパクトにすると、樹木の自然味が無くなって雰囲気が硬くなる。新芽の伸長にも影響を及ぼすから、樹形も乱れる。電線に合わせて全体を小さくするのではなく、電線を交わせるように、電線に障る枝だけを剪定するというやり方もある。

一般的に「強剪定」とは、太い枝を途中で切ることを言う。条例ではそれを

禁じているけれど、どこまでが太い枝でどこまでが細い枝なのかの線引きがあいまい。それが、樹形にそのまま表れていると感じた。

細い枝を一枝でもブツつと切ったら、自然樹形にはならない。切ることもなわち人工。山の自然樹木に、ブツツと切られている木はない。切ったことが一目でわかる樹形は、自然樹形とは呼ばない。

神宮外苑の銀杏並木のように整形的な人工樹形を目指すのか、樹木本来の自然樹形を目指すのか、街路の景観目標を定めることも必要。能代もまだ完全ではないけれど、自然樹形に近い形でやわからかに手を入れている所もある。そんなことを話しつつ、いつか能代に来てみませんかとお誘いした。

この議員さんには本気の心を感じたから、見たまま感じたままを話したが、その後、議員さんは、ご自身が提案した条例の精度をさらに高めるための提案を積みかさねていった。

この条例は、こうした改善を重ねる中で、本物になっていくだろう。日本には、こんなに真剣に、緑のことを考える議員さんがいる。日本人として、そのことを誇りに思った。



枝先のやわらかな久喜市役所前のイチヨウ並木

憧れの江戸川区

江戸川区とはこれまで何度もやり取りし、いろいろとご指導いただいていた。能代がブツ切りから方針転換できたのは、この区の取り組みが前例としてあったことが大きい。

その後も能代の街路樹は危機に瀕したが、その都度、適切な情報をいただいた。そのお礼を直接申し上げたかった。そして、せつかくの機会だから、現地視察と研修もお願いした。

これまでの、能代への江戸川区の事例紹介や資料の提供は、私が勝手に行ってきたこと。とてもお世話かいだけど、いつか、能代が先進地と交流できるような橋渡しもしたかった。

起こった事態に対処する消極管理ではなく、事態が起こらないよう先を見越したことをしていきたい。そのために必要なのは、やはり勉強だ。先進的な所がどんなことをしているか、いろんな事例を見て、ふるさとに応用できる部分があれば採り入れればいい。そのためには、能代の行政や議会には、ぜひ緑の視察を行ってもらいたい。

江戸川区は専門職員を配備しているので、そうではない自治体とは意識がまるで違っていた。専門知識がある人には基礎的な説明をしなくてすむ。いきなり専門レベルの話に入れるから、とても気持ちよかった。

街路樹の剪定現場も見せていただいたが、通常の剪定は剪定者と下で枝をかたづける人だけで行うことが多い。この現場には、離れた所で指示を出す監督がいた。木の中にもぐって剪定していると、全体の樹形がわかりにくい。逆に、遠くで見ている人は内部のことが良く見えない。大きな枝を抜く時などは、内と外でお互いに確認し合いながら進めることが大切。ここではそれをやっていた。

指示する人は、直接的な作業をしない。指示者自身も木に登って作業すれば仕事ははかどるし、その分利益も出る。それをせずに、全体を見る人を現場に置くということ。現場にそんな体制があるということはとても素晴らしいことなのだ。

工事看板には『街路樹の手入れをしています』と書かれていた。よく見かける看板には「剪定作業中」というものが多いが、「剪定」を「手入れ」と呼ぶと、音感も字体も、受けるイメージがやさしくなる。「剪定」は少し冷たい感じがするが、「手入れ」には温かみがある。こんなことから、ただ事務的に作業を行うのではなく、心の入った仕事をしているという印象が湧く。

これが個人の庭であれば、離れて見る人は「親方」。庭師は剪定を「手入れ」と言うから、江戸川区の街路樹管理には、そんな、庭師的な感覚が生きてい

ると感じた。これは、実際に見なければわからないこと。江戸川区では、現場の丁寧さや心遣いが木の姿に表れていた。

また、今回見たかったものの一つが、「片枝樹形スタイル」。ケヤキのトンネルがそうした樹形となっているのを、確かに確認した。

そして、これはどこでも同じことだが、傷んだ木や倒れた木、ライフラインの支障となった木などは伐採されることがある。江戸川区では、そうした木を利活用する緑のリサイクルも行われていて、伐採木が街路や公園のベンチや樹名板に生まれ変わるなど、区民が緑と親しめるようなことに使われている。要らなくなったからと事務的に切って捨てるのではなく、活かせるものは活かし、木の命を繋いでいく。江戸川区では、そんな、「心」の通った取り組みが行われていた。

後年、自分も街路樹の伐採木を譲り受け、腰掛を作って展示した。その時、この江戸川区の取り組みを紹介させていただいた。街路樹の伐採は避けて通れない。こうした緑の循環も、これから考えていかなければならないことのひとつだ。



「片枝樹形」のケヤキのトンネルと、街路樹の課題について学んだ座学



「樹木の手入れ」として行う街路樹剪定

近代街路樹発祥の地

この関東行でとても楽しみにしていたことがある。

それは、「近代街路樹発祥の地」の横浜を訪れること。馬車道通りにはその石碑があるという。街路樹の聖地巡礼に来たような、そんな気分だった。

ガス灯が立ち並び、ノスタルジックな白亜の建物に、自然樹形のアキニレが映える。初めて来た馬車道は、異国情緒漂う洒落た通りだった。横浜は開港場として栄え、西洋の技術や文化がいち早く入ってきた所。街路樹文化もまた、その一つとして入ってきたのだろう。

その証を伝えるのが、近代街路樹発祥の地の石碑。碑文には、**横浜市長**による街路樹の説明がある。街路樹の定義には諸説あるが、近代街路樹は、**参道並木**や街道並木など、日本古来の地方並木とは区別し、明治以降、都市部の街路に植えられた樹木とされる。

街路にあるから街路樹で、街路樹は「街」なかの「路」にある「樹」木。その先駆けとして、商店街に松や柳を植えたのが、この馬車道。この石碑は、街路樹を学ぶ人や街路樹マニアにとつては、やはり聖地と言えるだろう。マニアがいるかどうかはわからないが、街路樹に関心を持つ人などは、一度は訪れておきたいところだ。

馬車道通りは、この石碑の前で国道16号と交差する。国道の木は、馬車道の自然樹形とは打って変わってブツ切りだった。ここではその両方の木が目に入るから、ある意味貴重な景色。日本の街路樹の問題点が、近代街路樹の石碑の前に展開している。景観づくりとして植えられた馬車道の街路樹が美しさを保っている反面、国道の街路樹には美しさがカケラモない。そこにある木には、事務的な公共工事という印象しか湧かなかった。

これは、管理者の意識の違い。馬車道を管理する横浜市の意識は高くても、国道を管理する国の意識が低いということだろう。街路樹の姿には、管理者の意識や知識がそのまま表れる。

これは、全国どこに行っても同じ。県国等、組織が上位になればなるほどふるさと意識が薄く、ふるさとにある樹木に目が向けられにくい。

市長提案で、能代の街路樹が日本一になるためのキーワードは「連携」。その一つが国や県との連携だと言ったのは、全国的にそうした傾向があるからで、街路樹発祥の地の横浜ですらそこまで行けていない。

これは、特別素晴らしい街路樹がなくても、市県国の連携のもとに一定レベルの美しさを維持していれば、それだけで日本一になれるということだ。

もしそれができれば、能代に「街路樹連携発祥の地」の石碑を立て、それを観光名所にしてもいいと思う。そんなことを、馬車道を歩きながら考えてい

た。

横浜は馬車道だけではなく、街路樹の名所がまだまだある。日本大通り。この道は、慶応2年（1866年）に発生した横浜大火を契機に、防火対策としてイギリス人により設計された。この時代の植栽は関東大震災で焼失、昭和2年からの復興整備でイチョウが植えられ、それが現在の並木となっている。日本大通りは長さ400mほどの、広い幅員を持つ道路。その両側に、大きな自然樹形のイチョウが林立し、壮観な景色を創り上げている。こんなのにびのびと枝を広げるイチョウの街路樹を見たのは初めてだ。落葉期でもこれほどの存在感なのだから、夏の木蔭や黄葉の時期に来たらどれほど素晴らしいだろう。

太い下枝には剪定の跡が見られたが、その切り口に注目した。市長提案でも話した、樹木を腐朽させず、切り口が再生しやすい角度で剪定されていた。そして、切り口には墨汁が塗られていた。これは、弘前公園の桜に行われているやり方。横浜に来て、弘前との共通点を見つけた。

これは、横浜市役所前のイチョウ並木にも行われていて、担当課に行って尋ねた。街路樹の剪定仕様書を見せていただくと、このやり方が明記されていた。このやり方とは、「CODIT理論」。理論を示す図解は日本樹木学会のものだったから、これを見て、弘前と横浜の共通点がわかった。これを、能代の剪定仕様書にもぜひ採用してほしい。この仕様書を提供いただいて、能代へのお土産にした。

この日は行政訪問の約束をしておらず、アポ無しの飛び込み。そんな中でも丁寧に対応いただいた市役所の皆さんに感謝した。

横浜は、山下公園にも大きなイチョウ並木がある。思えば学生時代、この通りの道路工事でアルバイトをした。道路にいながら、そこにあったはずの道の木の記事が全く無い。それを今、わざわざ秋田から見に来ている。変われば変わるものと、自分自身に呆れた。



馬車道にある近代街路樹発祥の地の石碑と（上）、隣接する国道の街路樹（下）



横浜公園から続く日本大通りのイチョウ並木（右）と、大きく枝を広げる自然樹形のイチョウ（左）

驚きの銀杏並木

横浜の街路樹廻りを満喫した後は田園調布。

ここには見事なイチョウ並木があるという。田園都市構想でつくられたというこの街は、高級住宅街としても有名だ。

レトロな駅舎の前に立つと、そこから住宅街に向かって放射状の3つの道が伸びている。そこに、お目当ての並木があつた。

並木に入ると、歩道側の枝を短く道路上空の枝は伸ばせるだけ伸ばし、その枝は中央線を越えて反対側の歩道まで伸びている。そして、木と木の間の枝も交差させながら伸ばしているから、葉の無い冬でもかなりのボリュームがある。

支障のある側を短く剪定する代わりに、支障のない側の枝は思い切り伸ばす。そうすることで、樹木が養分生成できる枝を確保し、通常の生命活動を行えるように配慮する。樹形からは、そんな方針が見て取れる。

これは、江戸川区の街路樹テキスト「新しい街路樹デザイン」にある「片枝樹形」というスタイルで、江戸川区の視察でもケヤキの街路樹がそうなっていた。

ケヤキは対面させれば自然にトンネル樹形になる木だが、円錐形の多いイチョウの街路樹で、このような樹形を見たのは初めてだった。うわさには聞いていたが、これほどすごいとは思わなかった。まさにカルチャーショックとはこのことで、目から鱗のトンネル並木だった。

夏に来れば、圧倒的な木蔭の量に驚くことだろう。落ち葉掃除をされていたご婦人にお話を伺うと、落ち葉のじゅうたんは圧巻で、全国から見学者が訪れるとのこと。秋田から来たことを伝え、この並木は人にも木にも優しい手入れを行っていることを話すと、

「そうだったんですか？知りませんでした。」

人の暮らした樹木が、当たり前のように共生している雰囲気嬉しかった。

数年後、子供を連れてこの並木を再訪した。新緑のトンネルに引き込まれていくバスが、アニメに出て来る光景のようで印象的だった。



トンネルに吸い込まれていくバス



木と木が手を繋ぎ、人と人が手を繋ぐイチョウのトンネル並木

緑は繋がっている

最終日は、東京都庁前の街路樹を視察した。正確には、都庁手前にある、京王プラザホテルの庭とその周辺。駅から続く並木伝いに歩を進めると、高層ビルが建ち並ぶ中に、里山風の雑木林が出現する。葉を茂らせた夏場はどんなに気持ちがいいだろうと思いつつ、冬枯れの風情もまた、とても心地がいい。

この庭は、造園家、深谷光軌氏の設計による。深谷氏は庭とは言わず「外空間」と表現していたが、コンセプトや構成、素材の選び方等、すべてが卓越している。

実はここには、見習い時代に一度、仕事で来たことがある。やはりその時も、この景観のすばらしさには気付けなかった。田舎者は、ただ周りのビルの大きさに驚き、そこに植えられた木々にどんな思いがあるのかもわからなかった。

世田谷に住んでいたから、田園調布周辺にも行っている。でもやっぱり、そこに木があったことの記憶が無い。なんともまあ、意識の低い学生生活や修行時代を過ごしたものだ、とお世話になった先生や師匠には、なんとお詫びしたらいいだろう。20年ぶりにこの雑木林に立ち、そんな申し訳の無い思いが湧いてきた。

その後、ちよつとは成長した自分が、この景観で感じたのは、道路のケヤキ並木とホテル前の雑木林が一体となっていること。街路樹のケヤキは里山に生える木。それは、武蔵野の雑木林にもあることだろう。そしてケヤキは、この雑木林にもある。

同じ樹種が、歩道を挟んだ二つの緑地を繋ぎ、緑の景観を一つにしている。向かい合う緑地の持ち主は違うが、お互いにそんな景観をつくりましようとお話したか、あるいはどちらかが先にあり、どちらかが、先にある緑に雰囲気合わせようとしたのかも知らない。

時々、隣り合う街路樹と公園の木がケンカしている景色に出会う。植栽計画をする側が、公園という枠の中にただ木を植えればいいという感覚でいると、隣り合う緑地の木同士がケンカする。

樹木にはみな個性があり、それぞれの樹種には特性があるから、木々が仲良く暮らせるかどうか、設計の側が住み分けを考えてあげなければならない。雑木林の木々が共存しているのは、木々同士が自分たちで空間を分け合い、住み分けているから。山に行けば、林の隣にも林がある。林同士がケンカをしているかといえばそうでもない。

それは、どちらの林にも同じ種類の木が生え、木同士が同じリズムで生き

ているから。でも街なかの緑は持ち主がたくさんいて、お互いが自分の主張に合わせてにぎやかに木を植えるから、周りとの調和が取れない。

木々がケンカをするのは、植える側の人間が周りを見ていないから。市道の街路樹が自然樹形で、隣にある県国道の木がブツ切りになっているのも、ブツ切りをしている側が周りを見ていないから。

周りを見ること、周りに合わせることで、周りに気を遣うことで、調和した景観ができる。悪い方に合わせると悪い景色が広がる。良い方に合わせれば、良い景色が広がっていく。

街なかには様々な緑があるけれど、街路樹や公園、施設の緑、店や個人の庭のそれぞれを1本の木と見た時、それぞれは街という森を構成する部分になる。

穏やかにつながる森の一部だけが異様な姿になり、それが人為で行われているとすれば、木を見て森を見ていないということだ。それぞれの緑の持ち主が街全体を一つの森と見る発想を持ち、連携しながら森づくりや森の手入れを行っていけば、街は素晴らしい森になる。

このホテルの庭は、商業施設の側が公に寄り添い、公の景観に合わせたものだと思うが、こうした考え方が、街（森）の持ち主である行政にもほしい。

前日、横浜市の街路に面した公園で、3列のケヤキの森を見た。園内にある木だが、街路側の一列は街路樹のようだった。道路が市道か県国道かはわからないが、公園と街路樹が一体になっている景観は、それぞれの緑地を管理する部署、あるいは市と県、市と国の担当課に連携があることを示す。

五城目町は、すべての町県国道の街路樹を一元管理することで街並みの緑に統一感を持たせ、江戸川区は、区道の街路樹と区管理の公園を同じ部署が管理し、同じ事業者を受諾することで、調和のとれた街並みを創り上げている。

一元管理をするか、行政間や部署間の連携を深めるか、移動が多く引継ぎが行われにくい行政の体制を考えると、前者の方が緑を良好管理できる。しかし、あえて、縦割り行政を越えた連携のもと、緑を適正管理できれば、これほど素晴らしいことはない。

それができた所は、緑の連携日本一になるだろう。それだけ難しいことだが、やる気と意識があれば、できる。緑と緑が繋がるということは、人と人が繋がるということだ。

わがふるさと能代のスローガンは、『わ』の街能代。緑が繋がって輪になれば、街は素敵な森になる。そんな思いを持った視察行だった。



街路樹と公園のケヤキが一体となった姿(横浜市)



街路樹と商業施設の緑が一体化する景観(東京都庁前)

視察のおすそ分け

この視察は、行政に紹介した先進地の取り組みを自分の目で確かめ、実際の整合を確認するためのものだ。それは、提案内容の正しさを証明するとともに、確かな前例と分かれば採用しやすくなり、行政自身が先進地と交流を持つようになるのではないかとの思いもあった。

街路樹を始めた時に行政が言った「権威の照明」は、大学教授の話などではなく、同じ立場である行政がやっている実例を示すことが最も説得力があり、その実例が一番の「権威」になる。そして、そこから学んで、自分たちも視察を受けられるような「権威」の存在になればいい。そうなった時、街の木たちも幸せになれるだろう。こんなことは、行政と一緒に行けば一度に解決することなのだが、なかなかそうはならない。だから、時間が掛かるし、粘り強くやらなければならない。

視察では、ありがたいことに新たな情報も得ることができた。これを自分のものだけにしておくのはもったいなく、地元はどう還元できるかを考えた。

その一つが、視察報告書の作成と寄贈。自分で勝手に行った視察、提出する義務は全く無いけれど、ふるさとに活かしてもらいたいための視察だから、今の能代に活かせることを伝える。成果をまとめることは自分の頭の整理にもなり、それをHPに出しておけば、いつか求める人がたどり着き、何かに活かしてくれることもあるだろう。地元に伝えながら、全国に伝えることもしたい。そんな思いで、報告書をまとめた。

二つ目は、視察で得たことを実際に活かす方法として、一街路の景観創成についての提案書を作成、「緑のトンネル創生ビジョン」と題し、報告書とともに提出した。これは、江戸川区がプロポーザル方式で街路樹管理を行っていることを知り、少し夢を加えたものとして作成した。

今回の視察では、以前、自分が手がけたイチヨウ並木の剪定を参考に取り組む和光市も見えてきた。自分が、鋏を持てなくなるほど悩んだ並木。この並木の向こうには地元の名勝「銀杏山神社」があり、そこには『連理のイチヨウ』がある。「連理」には、「仲睦まじいこと」、「手を繋ぐ」という意味があるが、このイチヨウ並木の左右の木々をそれぞれ男女に見立て、枝(手)を伸ばすことでいつか「連理」となり、カップルになる。

わが町二ツ井には、明治天皇が全国を巡行中、長旅を気遣う皇后の手紙が待っていたという「きみまち阪(倭后阪)」があり、それにちなんだ『恋文の町づくり』を行っている。左右のイチヨウの枝が伸び、男女の手が繋がった時、イチヨウ並木がハート形のトンネルになる。そして、あとのぐらいいで木々が手を繋ぐかをカウントダウンで知らせるなどすれば、枝が伸びること

に大きな期待や喜びが湧く。

苦情のもとになり、それを受けて枝を切るというマイナスイメージの強い街路樹に、枝を伸ばす楽しみや物語を持たせれば、街路樹も好意的な存在に変わるかもしれない。町のPRや活性化にも繋がり、街路樹にもプラスのイメージを持たせられる。

夢と希望を持てる街路樹。そんな取り組みを提案書としてまとめ、樹形をトンネルに導くための仕様書も付した。これは市長さんに直々に渡すことができるこのことで、新聞取材も入り、市民の皆さんにもお知らせすることができた。

三つ目は、市内施設を借りて、視察報告展を行った。これは、この会場で行われたまちづくりの勉強会の際に、ミニ講演としても発表できた。

そして四つ目は、先進地の剪定方法を実際の公園木を借りて行った剪定見学会。前年に学んだ弘前方式の桜剪定に、江戸川区の街路樹方式のひとつ、「片枝樹形」スタイルを組み合わせ、並木が置かれた環境に合わせたやり方を実演した。

一般的に、街路樹と公園樹は違い、桜とイチョウも違うとの印象を持たれがちだが、樹木の生理は基本的に同じであり、それぞれが置かれた環境や樹木固有の特性に合わせて、そこに適応する形になればいい。自然の中で、樹木が環境に適した姿になっていくことを「自然樹形」というが、「街なかの自然樹形」を考える契機にもなった。

そんなことを話しながら、街路樹と公園樹、桜とイチョウでも違いが無いことを説明、弘前公園の桜と横浜市のイチョウ剪定の共通点などを紹介した。

また、公園敷地内の樹木をフィールドワークし、樹木が自然に枝を枯らす様子を観察、その枯れた部分が剪定ポイントであることを知ってもらった。この剪定見学会は、市県の関係課やシルバーセンター、一般市民にも呼びかけ、40人以上の参加を得た。この時の剪定理論はテキスト化し、全員に配布。それぞれの実務や家庭で活かしていただけるようにした。

併せて、資料提供いただいた先進地にも、お礼の意味を込めてテキストを進呈。逆に、関連課の資料として活用させてほしいとの申し出を受け、ご恩を少し返せたようで嬉しかった。

おすそ分けしたことを伝える新聞記事と、街路樹に夢を持たせるハートのトンネル



街路樹をやめる

視察の報告を持って、自分の活動母体であった緑の景観を考える会を閉じた。その時やれることを全力でやったから悔いはない。これからは、本当の意味での一市民、一植木屋に戻る。能代に街路樹改善を提案し、自然樹形管理に移行するまでに3年。そして、その後の4年は、後戻りしない体制をつくってもらうために費やした年月だった。

自分のこれまでは、何か事態が起こった時に改善策を提示し、自身が実例を示すというやり方。だから、街の木に何も起こらなければ、特に何をするということもない。自分が何もしなくてもいい状況になることが、街の木々にとって一番幸せなことで、そうなることが一番いい。

でも、なかなかそんな状況にならないのが世の中であり、街路樹。念願だった先進地視察を行い、それを地元で報告し、視察を活かした提案も行い、講習会も開いた。その効果は現れて、県管理の国道のイチョウの切り口が適正角度になり、切り口に墨汁が塗られるようになった。講習会で紹介した、横浜の街路樹のやり方だった。

県が採用してくれたことを喜ぶ一方で、自分が鋏を持てなくなるほどの経験をしたイチョウ並木に、その時以来の手が入った。提案した「緑のトンネル創生ビジョン」は、その通りが今冬に剪定されることを知り、丁寧に手を入れてもらいたいとの願いを込めていた。

だから、自分が手を入れる以前の状態から現在までの管理履歴や、その後の成長具合を知る限り記し、樹木の生理に配慮するための詳細な具体例を剪定仕様書として記していた。それを見てもらった上で、市がどのような剪定を行うのか、現地での事前説明をお願いした。

説明の機会が持たれたのは、剪定が終わってからだった。行われた剪定は、行政が方針として掲げる自然樹形管理には程遠い、強剪定による樹形縮小だった。枝を途中で切ったら、自然樹形にはならない。どんなに細い枝でも、枝先を切ったら最後、自然樹形にはならないのだ。そのことを、自然樹形とは何なのかを、自然樹形を理想とする管理者自身が理解していない。

今回行われた剪定は、そうした意識レベルがそのまま伝わってくるような樹形だった。透かしで行い、枝先を切らなかった自分の剪定でさえも、切る量まで考えることができずに失敗した。失敗例よりも失敗していたら、なにも進化していないということになる。切る量も切る位置も樹形も、自分が市に提唱してきた方法は全く活かされなかった。

この通りは、2008年に街路樹勉強会を行った通り。あの勉強会の後、市は方針を変えたが、樹木の生理や景観に即した剪定方法のことは勉強会でも

説明していた。それを踏まえての、方針転換だったはずだ。

現場説明に来た役所の方々は、その時の勉強会に参加した人たちではなく、先進地の剪定見学会にも参加いただけなかった方々だった。専門知識を持っていない人たちが、剪定についての説明をできるわけがない。なぜここはこんな切り方なのかと訊いても、答えられるわけもない。剪定を行った行政が、行った剪定についての説明をすることができない。それは、発注した業務が適正に行われているかどうかを検査することができないということだ。

ブツ切りとなった木の下に立ち、何がダメで、何をどうすればどうなるのかを、説明に来た人たちに説明した。きちんと理解してもらうために、近くの公園にある、自分が手を入れたばかりの桜の木も見てもらった。

そこで、木にとっての正しい剪定方法を再度説明した。理論は理解していただけたようだったが、それでもその理論を採用することはできないという。こちらは、それを目的として活動してきたから、それでは活動を続ける意味がなくなる。街路樹を、やめることにした。

後日、市に提出していた『CODIT理論』の剪定方法を市管理樹木の統一仕様に採用してください」との提案についての返答が来た。「これから理論を検証し、正しければ採用を検討する」とのことだった。

理論が正しいから、弘前の桜は日本一になっている。その理論を証明するために剪定見学会を開き、フィールドワークで切り口の遷移を見てもらった。

そして、実際の街路樹の現場で、マンツーマンで説明した。それでもわからないというのであれば仕方が無い。自分の説明の仕方が悪かったということなのだろう。今は何をしても無駄だ。けしてあきらめるわけではないが、時間を置こうと思った。

第2部終わり

◇ちよつと一服②

「八郎太郎伝説」

秋田に伝わる民話に「三湖物語」という話がある。

秋田の三湖といえば、北から十和田湖、八郎潟、田沢湖。八郎潟は琵琶湖に次ぐ日本第二の面積を持つ湖だったが、今は干拓され、わずかに残る残存湖が往時の姿を連想させる。

この八郎潟には、「八郎太郎」という主（竜）が住んでいた。元は十和田湖に住んでいたのだが、ある日突然やってきた南祖坊（なんそのぼう）という法師との戦いに負け、八郎潟を作って住処にしたのだという。

また、田沢湖には「辰子姫」という、美女が化身した竜が住んでいて、二人はいつか恋仲になる。八郎太郎は冬になれば辰子の待つ田沢湖に通い、八郎潟を留守にした。

そのせいか、八郎潟はどんどん浅くなって冬は氷に覆われたが、田沢湖は二人の愛同様にどんどん深まり、冬も凍らなかつたというお話。

（ちなみに、田沢湖は水深423mで日本一深い湖（世界17位）。十和田湖は326mで第三位。）

さて、その八郎太郎伝説。八郎太郎は鹿角地方で木こりをして暮らす、親孝行で力持ちの若者だった。

ある日、仲間三人でいつものように山仕事に行くと、この日は八郎太郎が炊事当番、一人先に山小屋に戻ることにになった。途中、溪流で岩魚を3匹見つけ、仲間と一緒に食べようと捕まえて帰る。小屋で魚を焼き始めた八郎太郎だったが、美味しそうな匂いにつられ、つい自分の分を先に食べてしまう。

あまりの美味しさに、二匹目にも手を出してしまう八郎太郎。

残りは一匹。一匹だけ残してもしょうがないな、みんな、自分が岩魚を獲ってきたことなど知らないしな、食べちゃうか！ということで、三匹全て食べてしまった。

すると、なんだかやたらと喉が渴いてしょうがない。泉に行つて水を飲むが、飲めば飲むほど喉が渴き、とうとう泉の中に入つて飲み始めた。ようやくのどの渴きも止まり、泉に映る自分の顔を見て驚く八郎太郎。なんと、水面に映るその顔は、これまでの自分の顔ではなく、恐ろしい竜の顔になっていた。

なかなか戻らない八郎太郎を探しに来た仲間に、『オレは人間ではなくなつた。もうみんなに顔を見せられない。』と別れを告げ、十和田湖を作つて静かに暮らしたという話。

こんな話を、先日十和田湖の遊覧船の中で聞いた。

後日、風邪で寝込んでしまった私。二日間飲まず食わずの末、ようやく食欲が出てきたので軽く発泡酒を一杯。30分後、頭痛がぶり返した私に妻が一言。

（冷蔵庫に）一本しかなかったのに、一人で全部飲むからよ（私だって飲みたかったのに）！
わかっていたが、あんまり美味しかったので、つい。ガンガン痛む頭を抱えながら言い訳。食い物（飲み物）の恨みは恐ろしいのだ（笑）。

数日後、家族で出かけた際も、こんなことがあった。一人お腹が空いたと長女がパンを食べ始める。長女が美味しそうに食べるのを見た次女も欲しがるが、食い意地の張った姉はなかなかパンをくれない。

そこで八郎太郎。竜になった話と父親の発泡酒の話を併せ、説得を試みる。すると、驚いたことに、いつもはちよびつとしかくれない長女が、珍しく残りを全部くれた。

『お姉ちゃん、竜にならなくて良かったね。』とパンを戻すと

「もう要らない。全部あげるよ。」

珍しいこともあるものだ。どこか悪いのかと聞くと、

「だってもう、お腹いっぱいなんだから。」

あ、そう・・・。

八郎太郎伝説は、私の住む二ツ井町にも残る。十和田湖から米代川を下り、八座山のある小繋地区にやってきた八郎太郎は、ここで川をせき止めて住処にしようとした。

驚いた八蔵の神々はシロネズミを使い、八郎太郎の作る堤の土手に穴を開けさせようと企てるが、逆に八郎太郎は猫を使ってネズミを退散させる。困った神々は、猫を懐柔して繋ぎ止めようと画策、ネズミ達の仕事を助けようとする。この時、この地に猫を繋いだということから、「猫繋ぎ」が「小繋」という地名になったというのは有名な話。

また、八郎太郎は、ここで力持ちの天神様と石の投げ比べをするが、この時太郎が投げたとされる岩が、米代川の中にある。天神様の石は向かい岸の山（七座山）まで飛び、太郎の投げた石は川に落ちた。この時天神様の投げた石が、八つあった八座の山のひとつを吹き飛ばしてしまったので、七座山になったという話。

そんな伝説が、明治天皇の恋文で有名なきみまち坂の石碑に記されている。

この話は、多少内容は違うが、北東北の各地に様々な形で残っているらしい。

鹿角には八郎太郎生誕の石碑もあるという。

どのような背景でこんな伝説が出来たのかはわからないが、一説には、実際

にあった天変地異を八郎太郎の姿を借りて物語に表したのではないかと
われている。
八郎太郎が十和田湖を作る過程や南祖坊との戦いは十和田湖の火山活動の
様子で、七蔵の白ネズミの話はシラス洪水を表しているのではないかとい
うもの。
八郎太郎の活動範囲はかなり広いが、ゆかりの地には石碑や神社、地名が
残り、ちゃんと話が繋がっているのが面白い。中には、祭りの形になっ
て伝わる所もある。
昔の人は、この物語を通して何を伝えようとしているのか。
地元の小学校や保育園では、昔から紙芝居や絵本などでこの物語を紹
介するが、大人になって覚えている人は少ない。今回、改めてこの話に接
し、子供に読み聞かせ、子供と八郎太郎を探しに行ってみた。



原生林の七座山と、八郎太郎の投げた岩

第三部 正しいことはいつか叶う

桜の質問

一月後、恐れ多いことに自治会長の大役が回ってきて、街路樹どころではなくなった。市内に40代の自治会長はいなかったから、拝命した時とはとても緊張した。

街路樹も立派な地域貢献だと思うが、自分の暮らす地域は山の中。ここには街路樹など1本も無い。街なかの木も大切だが、まずは足元。街路樹は市という大きなコミュニティの中にあるが、毎日の暮らしは地域というコミュニティにあり、その地域もまた、家族というコミュニティの存在の上にある。

大きなコミュニティが良くなるには、小さなコミュニティが幸せになってこそ。今年はそんなことを学ぶ年。地域への社会貢献をする年だと思った。そしてこれは、そんなに甘い役ではないから、それまで持っていた役はすべて辞退し、この公務に専念することにした。

初めて臨んだ自治会長会議では今年度の施策説明があり、会長には、それについて質問できる権利があった。せっかくだから、その権利を行使することにした。施策で目を引いたのは、専門知識のある担当課職員が自治会に向く出前講座というもの。講座の内容は、市政に関することなら何でもいい。

自分が質問したのは、「予算が少ない中、街なかの公園管理が行き届いていない現状がある。地域の公園は地域で管理できるのが理想。公園管理についての専門知識があれば、住民で対応できることもある。たとえば、公園にある木といえば桜。桜は新生能代市の花でもある。地域への指導をお願いしたいが、こうしたことも出前講座の対象になるか」。そんなことを訊いてみた。返答は、「緑化についての専門職員がいない」。「では、外部から専門の講師を招くことはできないか」。あまり積極的な答えは返ってこなかった。

この一月後、自分と同様のことを市議会で質した議員さんがいた。「市の花『さくら』を良好管理するためにも、先進地から学ぶべき」という質問。

それに対しての答弁は、「弘前公園のフォーラムや、弘前で学んだ造園業者が開催した剪定講習会に職員を派遣するなどした」。フォーラムの開催は自分が行政に情報提供した。剪定講習会を開いたのも自分だったから、ありがたい答弁ではあった。

ただ、そこで紹介した剪定方法を実践しないのでは参加した意味が無い。

理論と実技を学んだ弘前フォーラム



弘前方式を取り入れて行った自治会館の桜（右）と、剪定痕の再生状況（左）

それを勉強したことの実績とするのではなく、行政自身が講師を呼ぶぐらいの積極性がほしいのだ。この議員さんは、そうした返事を待っていたのではないだろうか。そんな気がした。

自分が、桜の自治会管理を提案したのは、その弘前の桜フォーラムで、「今後は市民との協働管理が必要になってくる」とのことを聞き、それが頭に残っていたから。自治会会議や市議会での行政の話しづりを聞き、今のレベルでは時期尚早との思いを持った。

だったら、自分でやるしかない。町内会作業の際、自治会管理の公園の桜に、弘前で学んだ剪定を行った。切り残されていた切り口を直し、数年かけて、切り口は塞がっていった。木は、正しく手を入れるとそれに応えてくれる。山間の小さな集落でやったことだが、いつかこんな小さな実践が大きなコミュニケーションで行われる日も来るだろう。そんなことを思いながら、皆と汗を流した。

久喜市議団来訪

その年の夏、1月に視察に出かけた埼玉県久喜市の市議団が能代を訪れる。全国初で街路樹条例を策定したまちの人たちが、能代の街路樹視察にやってきたのだ。

議員さんから打診を受けた時は、とても驚いた。視察に行った先の方が、今度は視察に来てくれる。しかも、大人数を引き連れて。この心意気がとても嬉しい。そして、自身が提案した条例の完成度を高めようと、そのための勉強を惜しまない姿勢を心から尊敬する。

街路樹活動をやめた身だったが、恩は返さなければならぬ。二つ返事で案内役を快諾、自治会の仕事も忙しかったけれど、視察でどこを見てもらうかと考えるのがとても楽しく、張り合いのある日々を過ごせた。

そして、視察が近づいたある日、なんともタイミングが悪いことに、市内の街路樹がブツ切りになった。街路樹を視察に来たら、その街の木がブツ切りになっていたなんて、洒落にもならない。議員さんたちも、何のために秋田まで来たのかわからなくなるだろう。

桜の質問をした議員さんに現場を見てもらうと、管轄課に問い合わせてくれた。剪定したのは、どうやら市民のようだった。夏場の木蔭がほしい時期に丸坊主にするなんて、よほどの怒りだったのだと思う。この通りにはしばらく剪定が行われていなかったから、せめて、歩道側の越境枝ぐらいを剪定してあげていれば、ここまでになることもなかったのではないか。

自治会長をやって分かったことだが、街路樹などへの要望も自治会要望として行政に上がる。そして、そのことの実施が今必要かどうかを検討し、対処されるまでにはかなりの時間が掛かる。虫が大量発生したとか風で枝が折れたとか、緊急性の高いものは早期に対処されるだろうが、落ち葉の苦情や民家に障りそうな枝などは、冬の剪定まで待たなければならぬこともある。住民の人たちの中には、そこまで待てない人もいるだろう。

自分が関わった街路樹剪定でも市民が枝切りしたものを時折見かけたが、たまりにたまった街路樹への怒りをぶつけているような感じだった。木には何の落ち度もないのに、怒りの対象となってしまうのはとても悲しい。

街路樹は公共物だから、公共物を勝手に壊したら器物破損になる。行政がブツ切りしても器物破損にはならないが、市民が無断で切ったら、いくら役所より丁寧な剪定をしても、器物破損になるかもしれない。

ただ、この時に見た剪定は、お金をもらって業者が行う電線支障剪定などとあまり変わらない。であれば、変な話ではあるが、無償で剪定をして、枝ま

で処分してくれた住民の方々には、感謝状をあげてもいい。自分も支障枝剪定のボランティアをやってきたが、地域のために支障に対処するという点では、気持ち的には同じことかもしれない。

こうしたことは、管理を行う行政の目や手が行き届いていないことから起こる。その現状を感じてもらいたくて、議員さんに見てもらった。この議員さんには、久喜市議団が来ることを知らせ、交流の機会を持つことを勧めた。夏場に可哀想な姿になった街路樹を、視察団には見せたくない。しかし、ありのままを見てもらい、同じ問題を共有することで、どうすればよくなるのかの知恵を借りたいとも思った。

視察当日、市道の街路樹は管轄課が案内することになり、自分はその後の案内を引き受けた。視察団には、どうしても見てもらいたいものがあった。それは、市役所に隣接する、大ケヤキの森。お寺のケヤキを残した公園がそこにあり、その外周の国道に面する木々は街路樹となっていた。能代が誇る、樹齢300年の街路樹だ。

横浜の馬車道に端を発する日本の近代街路樹は、明治に導入された文化。まだ150年ぐらいの歴史だから、現存するものでは、古くても樹齢100年ぐらいのものだろう。この、樹齢300年の街路樹は街の中心部にある。街路樹として植えられたものではないけれど、今は街路樹となっている。

この木々は、戦後の能代大火の際に、火からお寺を守った木。それによって、背後の街も守られた。その恩を忘れない市民が、お寺が移転し、それに伴う道路整備が計画された時、伐採が検討されていた木々の保存を熱望した。そして、お寺を守る木々は市民の憩いの場として整備されることになった。そんな市民の思いがこもった街路樹と公園の木を、視察団にはぜひ見てもらいたかったのだ。

全国では、街路樹として植えられた木が悲惨な姿になり、能代では、街路樹ではなかった木が、街路樹となつて愛されている。街路樹が大切にされるかどうかは、市民に愛されるかどうかがかギになる。そんなことを、方々に伝えなかった。

この視察は地元紙でも大きく報道され、能代の街路樹が全国から評価を受けていることや、街路樹条例を持つ自治体があることを知らしめてくれた。これを機会に、久喜市と能代市との間で交流ができていけばいいと思う。議員団からはいろいろと質問を受けたが、お隣の東京には江戸川区という街路樹の先進地がありますよと、そちらで研修されることを勧めた。

この時持参した街路樹の資料や本は、すべて市議団にあげた。自分にはもう用が無いから、必要とする人の所で役に立ってほしかった。しかし、これ

が契機となって、また街路樹に引き戻される。もうやめると言っておきながら、休んだのは半年ぐらいだったかな。



市議団来訪の記事

緑の基本計画策定

このころ知人から、市の緑の基本計画についての問い合わせを受けた。その計画を定めるためのアンケート用紙が届いたものの、何のことやらわからないとのこと。アンケートは3,000名を無作為抽出して行われたものらしい。くじ運の悪さは、こんなところにも出る。残念ながら、自分はこの緑の宝くじにはハズレていた。

用紙を見せてもらうと、この計画は、公園や緑地、自然などのまちの緑について、緑化の推進や保全についての指針を定めるもので、豊かな自然と共生するまちを目指すためのものであるとのこと。これは、素晴らしい計画ではないか。こんな計画ができるのをずっと待っていたのだ。

知人には、これはいいことだから、ぜひ回答してほしいとお願いした。ただやはり、これを専門として行政に提言してきた者としては、今の市に必要と思われることをぜひ伝えたい。アンケートが集計され計画素案が公表となった暁には、パブリックコメントによる意見募集があるとのことだったが、それまで待てず、地元紙にこんな声を載せた。

「花・夢・緑の街能代市」―緑の基本計画への提案―

表題は、市立図書館前にある看板の言葉です。ちょうど、能代市が「緑の基本計画」に向けた市民アンケートを実施したことを知り、心に留まりました。全国の先進自治体では、この基本計画を定めてから緑の推進や保全を進めていることから、市のこうした取り組みは大変喜ばしいことです。この機会に、7年間に渡り、街の緑のあり方を観察研究してきたことを活かしていただきたく、次の提案を行います。

1 けやき公園を「景観重要樹木」に指定し、緑の旗印に

国道を曲げてまで残したけやき公園の大木の街路樹は、能代人の緑への思いを象徴する市民の宝。「景観重要樹木」とは、景観行政団体（県と政令市）が景観法に基づき指定するものであるが、鹿児島市HPによると、この制度は「地域の個性ある景観づくりの『核』として大切にしていこう」ために運用、選定基準として、「道路から容易に見ることが出来る」、「地域の象徴的な存在。地域の景観を特徴づけ、良好な景観形成に寄与する」、「歴史的、生活文化的な価値が高い」、「地域に親しまれ、愛されている」、「国県市の文化財、または保存樹等でないもの」とある。この要件に沿うものを能代で探すと、けやき公園は見事に合致する。現在、この制度の指定は全国で470件、東北では山形県内の二町3件。けやき公園周辺の樹木が指定されれば、東北では2番目、秋田県では初となる。能代の緑の保全の核として、この制度を導入できないだろうか。

2 市の花「桜」をアピールする取り組み

① 「さくら協定」

能代市は今年、市の花を「桜」と定めた。市内には、学校と公園、街路樹と公園など隣接する緑地の双方に桜が植えられている箇所がある。しかし、隣り合う敷地の管理者が違う場合、越境する枝が無理に切り詰められ、樹勢や景観に悪影響を与えているケースを多く見掛ける。これらの解消として、管理者同士が「さくら協定」を結び、別々の敷地の桜を一つの桜の景観と位置付け、互いの連携の元に、景観や樹勢に配慮した管理を行っていくことはできないか。街歩き地図にこのさくら協定のポイントを記せば、桜めぐりの楽しさも倍増する。

② 桜の適正管理推進

弘前や角館などの桜の名所では、専門の樹木医の指導の元、適正管理

を行っている。その元になるのが、剪定による樹木の腐朽を防ぎ、切り口を早期再生させるCODIT理論。「桜切るバカ」と言われるように、桜の木は腐りが入りやすい。この機会に正しい管理法を学び、適正管理の常識化を図りたい。9月市議会答弁では「講習会に職員を派遣した」との実績報告があるが、現場に活かすことが大切。

3 街なかに緑のトンネルを創る

能代市内には緑陰の道や広場が少ない。市の庁舎整備が実施されるとして、解体されて駐車場になる部分に緑道の機能を持たせ、官庁街の街路樹とけやき公園を緑のトンネルで結ぶことはできないか。市内の街路樹が苦情で切られる中、こうした制約を受けずに樹木の効果を享受できるのは、公共施設が集中する場所以外にない。車を気にせず歩ける本格的な緑道や木陰の広場が市街地に欲しい。家族が庁舎で用事を済ませる間、木陰のベンチで涼めたら嬉しい。

4 景観規制と意識啓発

市内の公共木には、幹に看板が巻かれているものが多い。看板を結束する針金等は木の生長と共に幹を締め付け、養水分の通りを圧迫することから樹勢の衰弱を招く。また、樹木は幹でも呼吸し光合成を行うことから、木の健全な生命活動を妨げる。役を終えても外されない樹木支柱なども見苦しく、腐って傾いた支柱は街の荒廃を感じさせ、倒壊すれば車や歩行者にも危険が及ぶ。ゴミ看板は立て札式やゴミ箱に移設されるなどかなりの改善が見られるが、条例化や市広報などで周知を図ることが大切。市民の安全や景観向上、樹木保護、美しい街のPRのためにも、景観規制は必要。釘打ちされた看板には公共物が多い。まずは庁内の意識徹底から始めてほしい。

5 緑の役割を伝え、繋げる

能代の街路樹は、大火復興と防災、緑陰のために植えられた。それを忘れたからブツ切りが起きた。管理者は、なぜ街に木を植えたのかの「元」を自覚し、市民への周知を積極的に行なわなければならない。

終わりに

3年前、能代市は街路樹の強剪定を改めました。能代市長に改善を求めたのは二ツ井との合併直前、当時の提案は少数私見と見送られ、市がその必要性を理解したのは4年後のことです。今回の調査で得られる市民の声には、夢のある意見がたくさんあるはず。少数意見の中にも本質が隠れてい

ます。行政には、このアンケートを緑の夢を発掘する場と捉えて、専門性と先見性を持って取り組んでいただきたい。「花・夢・緑の街能代市」。名実共にそんな能代になるよう、市民の力で良くしていきたいでしょう。

能代市二ツ井町 福岡 徹

2013年の3月、緑の基本計画が策定となった。計画の基本理念は、「緑の価値に気付き、守り、活かす」。素晴らしいスローガンだった。この計画をもっと市民に知ってもらいたい。そして、市民の側からも、この計画を盛り上げていきたい。

そんな思いで、「緑の景観写真展〜街なかの緑を楽しむ」をわが町二ツ井で開催した。公表された計画アンケートの声には、やはり緑への苦情もあった。その中には、緑の役割を知られば解決できるものもある。

緑があることを喜び、楽しむ。それが人にとっての緑の価値。それを守り、もっと多くの人々に喜びを拡大していくことが、「活かす」ということ。そんな喜びあふれる写真を展示した。

大ケヤキが切られる

緑の基本計画が策定されたのは3月。そして間髪入れずに、緑の景観写真展を開催した。その中には、久喜市の視察団を案内したけやき公園の街路樹も展示していた。

その大ケヤキの街路樹の大枝が、6月に切られた。新聞報道でそれを知り、愕然とした。前年、けやき公園を「景観重要樹木」に指定し、緑の旗印にしようとの提案を、地元紙に寄せていたばかり。能代は、祭りや七夕がとても盛んな土地柄だ。道路を大きな灯籠が運航するために、それに障る街路樹の枝などは剪定される。灯籠は、大型トラックよりもはるかに大きい。街路樹の枝は「建築限界(車が安全に通行できる高さや幅を確保するために、工作物等の設置を制限する空間規制)」を越えてはならないが、能代の街路樹は、その建築限界よりも高い所まで、下枝が刈られているのが特徴としてある。

今回切られた大ケヤキは電線の無い国道に面し、どこまでも大きくなれる環境にあった。そこに、活性化対策で制作された巨大灯籠を通すことになり、その支障対策として枝切りが行われた。

巨大灯籠を通せる道はそこしかなく、街路樹の反対側には道路標識があった。動く灯籠日本一の青森県五所川原市の立佞武多は、その運行のために道路標識を可動化式にしている。しかし、可動化式に変えるにはかなりの予算

けやき公園の兄弟

巨大灯籠が運行されたのは8月初旬、その前の週に、仕事で山形市まで出かけた。せっかくの遠出、夏休み中の子どもたちも連れていくことにした。

仕事を終えて宿に向かう途中、道路沿いにある、こんもりとした森が目に入った。樹齢200年以上はあると思われる大きなケヤキが、歩道の中に点在していた。これは、もしかしたら街路樹かもしれない。

歩道は、大きな神社に面していた。道路拡幅で境内が削られ、外周の大きき街路樹として残したのではないか。これは、能代のけやき公園と同じ経緯で残されたものかもしれない。

そう直感して、社務所に飛び込んで聞いてみた。予想的中。やはり、同じ経緯で残ったものだった。県管理と教えてもらって、次は県庁へ。もちろん、子どもたちと一緒に。子どもたちは、夏休みの自由研究を控えていた。わからないことは聞く。気になったらすぐ調べる。そんなことを教えたかった。県庁には突然訪ねたから、担当の方が不在。それでも、後で資料を送ってくれるとのことでありがたかった。

そしてもう一度、現地に戻る。ここは、街路樹ではあるけれど、街路樹という気がしない。けやき公園の歩道はほぼ直線で、街路樹として残した樹木も大体まっすぐになっている。

しかしこの山形の街路樹は、林立する大木を縫うように曲線の歩道が走り、所々にベンチを設けるなど、公園のような雰囲気がある。歩道というよりは園路で、緑道のような趣がある。歩道周りには土が多く残されているから、舗装によって根が傷む率も低いだろう。

街路樹というよりは、道路に面した公園のような、理想的な環境。国の法律で「道路の付属物」とされる街路樹は、土木的な思考で植栽されることが多く、木の生育や将来を考えた計画がなされることが少ない。

ここでは、計画に樹木医が関わり、デザインにも造園的な発想が見られることも素晴らしい。けやき公園よりも新しい時代に作られたものだが、兄弟を見つけたようで嬉しかった。

山形市には、春に1か月ほど庭づくりで滞在した。ほとんど現場と宿の往復だから、その時はこの兄弟がいる道を通らなかった。今回は、子供たち用の宿を取り、いつもと違う道を通った。そこに、この兄弟がいた。能代の兄弟が切られた後に、この兄弟を見つけた。

なにかのめぐりあわせかもしれない。能代の兄弟を悲しむ自分を、山形の兄弟が呼び寄せてくれたのか。そんな、不思議な出来事を体験した。



山形市 諏訪神社前の街路樹

巨木の街路樹写真展

山形にけやき公園の兄弟がいることを、能代の人たちにも知らせたい。それを伝えることで、けやき公園のすばらしさに気付いてもらいたい。能代に戻ってから、そんなことを考えていた。

大ケヤキが切られたことは残念だが、それを非難するのではなく、文化的なやり方で価値を訴えたい。その頃ちょうど、山形県庁から建設当時の新聞記事や設計図などがメールで届く。けやき公園と同じく、この街路樹もまた、市民の要望で残された木々だった。

ある考えがひらめいた。けやき公園は、もともとはお寺の境内。移転したお寺に行けば、当時の資料があるかもしれない。それを、山形の街路樹とともに展示したらどうだろう。さっそくお寺に走り、事情を話した。能代大火から街を守り、市民の思いで残したお寺の木々を守りたい。そんなことを話す

と、お寺の方から手を合わせられた。

いただいた資料を見せていただくと、地元紙、全県紙等、20年以上前の記事のほとんどに、「お寺の木々を街路樹として残す」という見出しが躍っていた。この時は行政も市民もメディアも、街に大木を残すことに湧いていたのだ。そんなことが、いただいた記事の隅々から伝わってきた。

さて、では何をテーマに展示を行うか。この二つの街路樹に共通するのは、街路樹であること、大木であること、街路樹ではない木を街路樹として残したこと。テーマは、「巨木の街路樹写真展」街路樹として保存された街なかの大木たち」にした。そして、そんな木々が他にもないか探すことにした。

ここで、一つ思い浮かんだ木々があった。翌日はその木たちに会うため、青森県十和田市に走った。十和田市には、これまでも何度か出かけていた。「日本の道百選」にも選ばれる官庁街通りには、赤松と桜による4列の並木がある。その所々に、大きなケヤキが点在していたことを覚えていた。

また、官庁街から続く道にも、街道並木のような大きな赤松があったことを思いだした。市役所に飛び込み、その経緯を聞くと、昔、国の軍馬養成場があり、その外周に植えられていた赤松を市が譲り受け、街路樹として残したという話。

赤松は市の木にもなっているが、これほど大きな赤松林が街なかにあると、それだけで風景になる。古木や大木の存在は街の歴史そのもの。その存在感は街並みに風格をもたらす。古木は、長い年月を風雪に耐え、街の歴史を見てきた生き証人。その存在を街に残した先人の思いと先見に、私たちは感謝しなければならぬ。だからこそ十和田市は、緑の条例を作り、そうした木々を保全している。それが、偉大な先人の思いに報いることだと、この街は知っている。市から提供いただいた資料とともに、この街の生き生きとした大木並木も展示することにした。

これで役者はそろった。市の展示施設に話を持ち込むと、翌週から展示できるといふ。しかしお盆前は手入れの追い込み。でもこんなことはタイムリでなければ意味が無い。なんとかなるさ。何とかしようとすれば必ず何とかなる。そんな思いでいたら、何とかあった。思いついてから1週間。どうにか開催にこぎつけることができた。

この展示には新聞取材も入り、「大人の、夏休みの自由研究」と話して、地元紙紹介された。この施設には、件の巨大灯籠のミニチュアやポスターなども展示されていたが、ここでは、けやき公園の大ケヤキの枝が切られたことには一切触れなかった。写真展の根底にあるのは、「緑の価値に気づき、守り、活かす」という、能代市緑の基本計画の基本理念。あくまで、文化的に緑の価値を伝える。それに徹した。

「街路樹礼賛」始まる

植木屋が持つのは鋏やスコップ。でも、時にはペンを持つこともある。現場で仕事をしてナンボの職人だが、時には思いの丈を語る。人前で話すのは苦手だから、必然、書くことの方が多くなる。

自分の仕事は、庭をつくり、庭を守ること。庭の素材は、草木や石、土、水などの自然素材だ。その自然素材はどこにあるのかというと、山や川。だから自然に、山や川を見るし、環境のことにも頭がいく。植木屋の習性で、街なかを歩けば、庭の木や公園、街路樹にも目が向く。その街路樹が、いつの間にか木の姿ではなくなっていた。

それがとても悲しくて、書くことだけではおさまらず、地元行政に改善を話し続けた。話すだけでは伝わらないから、自ら木に登り、見本を示した。



写真展のポスター（右上）

十和田市の赤松並木（右下）

写真展を伝える新聞記事（左上）



書くことにも話すことにも責任が要る。無責任なことは書けないから、いつも、自分ができることしか書かないし、書けない。

しかし、書くだけなら誰にでもできる。本当にできるのかと言われることもあるが、自分がやってきたことはできる。

でもそれを、他人が同じようにできるかといえ、そうではない。植木屋なら誰にでもできるかといえ、そうでもない。動ける環境や、それに関わる積み重ねが無ければ、自ら動いて街を変えることはできない。

そして、社会的な行動にはリスクが伴う。植木屋としてふるさとの木を守りたくても、声を上げ、行動を起こせば、現状を良しとする役所や市民、業界を敵に回すことにもなる。それはそのまま、自分の生活に跳ね返ってくる。動きたくても、しがらみの中で動けない同業が全国にはたくさんいる。そんな声が届く度、つらくなる。

そんな経験をしてきた自分の所に、造園業界の意識向上をとの目的で、専門誌から連載記事の依頼が来た。「街路樹礼賛」というタイトルだった(季刊誌『庭』2013年一〇月〜2014年8月全4回)。

動きたくても動けない同業に、動けば変わると、叱咤激励しなければならぬ。バカになって動いたから自分のふるさとは変わったが、変わるまでは本当に苦しくて孤独で、茨の道だった。

成し遂げれば信用になるが、行政や業界に立ち向かえば、そんなしこりが後々まで残る。全国に向けて書くことはとても光栄。誰かが立ち上がらなければ変わらないのだが、自分と同じような思いはしてほしくなくとも思う。生活を捨ててまで立ち上がれとは言えないし、そんなことを押し付ける権利も無い。原稿に向かう度、いろんな葛藤が湧き出して手が止まった。

植木屋の意識が高まり、いくら腕が上がっても、それを活かせる環境が整っていないければ、街路樹は変わらない。最近、街路樹の剪定やブツ切りの再生法を紹介する本も出てきたが、いくら良いやり方を紹介しても、行政に予算が無ければできないし、行政が方針を変えなければできないのだ。

行政の施策は市民の要望でもあるから、そこから変えなければならぬ。役所職員にも意識のある人はいるが、役所の中にも様々なしがらみがあるだろう。これまでよしとしてやってきたことを変えるには、それなりの大義名分も要る。植木屋がいくら頑張っても、行政が変わらなければ街の木は良くならない。街の木の姿には植木屋の意識や技術がそのまま表れるが、それは行政の方針でもあり、市民の要望をそのまま映している。そこから変えなければ街路樹は変わらないのだ。

そして、変わったら、二度と元に戻らないような体制を作らなければならない。それを変えるのは、われわれ植木屋ではない。世論を変えられるのは

メディアであり、行政を導くのは議員の仕事だ。

植木屋ができるのは、自らの仕事で手本を示し、日々の仕事を通して緑の大切さを伝えること。そんな中で、実現能力のある方々に気付いてもらえる機会をつくる。変わるための切っ掛けをつくることなら、植木屋にもできる。そんな思いで一年間、街路樹の話を書くことになった。

第一回目のタイトルは『街路樹革命』。拙い自分の活動を紹介し、やればできることを書いた。第2回目は『探してみよう街路樹の魅力』。造園業者という服を脱ぎ捨て、普段着で街の木を見る楽しさを紹介した。第3回は『制約を逆転する知恵と工夫』。自然樹形とは何かを庭と街路樹と自然の共通点から探りつつ、従来の樹形づくりの固定観念から抜けて、ふるさとの街並みに合う姿を模索することを勧めた。そして最終回は、『愛される街路樹』。街路樹は「みんなの庭」であり、みんなの庭として愛されるようになるにはどうしていったらいいのかを書いた。

この連載は反響があり、『街路樹革命』を旗印に、活動を始める人が現れた。いる所にはいる。この連載を通して、そんな確信を得た。これからの日本の緑は、こうした志のある造園人が変革していくだろう。苦しみながらの執筆だったが、報われた思いがした。

美郷町の松・杉並木と学問の森

実は「巨木の街路樹写真展」に紹介したくてできなかった並木が一つあった。写真展は街路樹ではない木を街路樹として残したものを対象としたが、秋田県には明治時代に植えられた大木の街路樹がある。ちょうど、「街路樹礼賛」の最終回が掲載になった頃に、地元紙にこの並木のことを書いたので、その原文をここで紹介させていただく。

東嶽精神の宿る木々／美郷町の街路樹と学問の森

昨年来、庭園専門誌の『庭（建築資料研究社発刊）』で、「街路樹礼賛」という連載を担当しました。全国の好例を紹介する中、最終回となった今号（216号「愛される街路樹」）では、樹齢300年のけやき公園の街路樹や、市民植樹祭で植えた畠町の街路樹を取り上げ、ふるさと能代の取り組みを全国に発信することができました。市立図書館でも閲覧できますので、どうぞご覧ください。

田園都市構想で植えられた近代街路樹

「街路樹礼賛」の取材で見てきたものの中に、「美郷町（旧千畑町）の松・杉並木」があります。一見、街道の並木のようにですが、明治30年代、田園都市構想の下に植栽された近代的な街路樹です。田園都市構想はイギリスで考案されたもので、街路樹の文化も、文明開化とともに西洋から入ってきたもの。千畑の整備は坂本東嶽によつてなされたものですが、秋田県の小さな農村が、世界の取り組みをいち早く取り入れていたことに驚きます。この街路樹は赤松や杉など、土地の自生樹を用いています。プラタナスやイチヨウなどの外来種が主の街路樹にあつて、ふるさとの自然と繋げ、地域性のある街路樹を生み出したことも特筆されます。土地にある木を植えるということは、その木の特性や気候への順応、木がどこまで大きくなるのかの「成長限界」を知っているということ。街なかを放射状に伸びる並木は、同じく田園都市構想のもと、渋沢栄一が築いた田園調布（東京都）の銀杏並木を思いますが、住宅街である田園調布と違い、千畑は官庁街。苦情の起きにくい所にあつたことも、百数十年もの間、良好に保存されてきた理由かもしれません。この、坂本東嶽の先見性に満ちた並木は、「新・日本街路樹百景」にも選出され、教育委員会の管理のもと、町の重要文化財に指定されています。現在、並木には広い緑地や小学校が隣接していますが、子どもたちは美しい赤松のトンネルを通つて学び舎に通い、緑豊かな環境の中で学んでいます。

自然樹形の大木が集う学園の森

小学校の隣には中学校跡地がありますが、その中に、1本のプラタナスを見つけました。よく見ると、プラタナスはその奥にも続いている、木に導かれるように進んでいくと、いつのかにか私は、巨大なプラタナスの森の中にいました。森の高さは20m、一本の木の枝張りも20m以上はあるでしょう。試しに幹の太さを計てみると直径約90cm、幹周りは、なんと2m80cmありました（地上1.3m）。幹の太さ、樹高、枝張りとも、これだけ大きなプラタナスを見たのは初めて。しかも、そんな大木が群をなしているのです。放任育成されたようで、樹形は自然状態に近く、プラタナスがケヤキのような姿をしています。プラタナスにとつてはこれが当たり前なのですが、街なかの街路樹を見慣れた目には、信じがたい光景として映ります。樹齢も百年は軽く超えているように見え、町役場に尋ねたところ、昭和20年に記念植樹されたものであることがわかりました。ということは、樹齢にして約70年。これは、畠町通りのプラタナス（街路樹）とほぼ同じですが、畠町の本々は、半分程度の太さです。同じ年数を生きてきてこれほどの違いが出るのは、根が十分に張れる土の量や、強剪定による成長抑制など、生育環境の

違いからくるものでしょう。全国では、狭い道路にプラタナスを植え、大きくなってブツ切りを繰り返すといった悪循環が多い中、千畑ではプラタナスを街路樹にせず、学問の木として広い場所に植え、森をつくっていった。プラタナスの花言葉は「天才」ですが、これは哲学者のプラトンに起因します。プラタナスは「学問の木」として学校などに植えられますが、これは、プラトンがこの木の木陰で学生に講義をしたことが由来。ここは、そんな学問の木が、大木となって集う森でした。

坂本東嶽の志が根付く町

国會議員を辞してまで故郷に戻り、独自の村づくりを行った坂本東嶽は、幼いころから学問の人でした。向学心に燃える東嶽は自ら中央に出て学び、故郷で教べんを取ったとも聞きます。優れた先見性や行動力は、そうして養われていったのでしょうか。まちづくりを人づくりと捉え、教育にも力を入れた東嶽の志は、「東嶽精神」として、現在も町の人々に受け継がれているそうです。百数十年前の街路樹が今なお良好に管理されていることも、その表れの一つ。街に木を植え、守り育てることは、まちをつくることでもあり、人をつくることでもある。木を大きく、伸び伸びと育てるこの町のおおらかさに、東嶽の思いが根付いていることを感じます。

(2014年8月14日 北羽新報掲載文)



公私混合の緑

『街路樹礼賛』を書き終えた後、東京で開かれた庭のフォーラムに参加した（日本庭園協会主催）。「これからの庭を楽しむ」というテーマの元、著名な作庭家や造園家、建築家、環境デザイナー、専門大学の教授、実業家などがパネラーとなり、ジャンルを超えて庭のあり方を考えようというものだった。

それぞれの立場から議論が繰り広げられ、「自然豊かな山里に庭をつくる時は、周囲の自然景觀に合わせることを考えたい。」といった意見には共感を覚えた。具体的には、近くの山に生える木と同じ樹種の木を庭に植えれば違和感のない庭ができるということ。幸い、発言の機会を得たので、この話を少し発展させて、では街なかではどうしたらいいかということ述べた。

日本には周囲の景觀を庭に取り込む『借景』の技法があり、古くから『内（庭）と外（自然）を繋ぐ』工夫がなされてきた。しかし街なかではそれが難しく、これからは逆に、『外から内に繋げる』といった観点も必要になる。

街路樹や公園の緑に庭を合わせ、外の緑を通して住まいを見るという視点だ。街路樹がケヤキなら庭にもケヤキを植えて同じ木で景色を繋げていくとか、ケヤキと同じ里山の雑木を植えて雰囲気を繋ぐといったこと、あるいは、街路樹が自然樹形なら庭の木も自然樹形にして雰囲気を合わせる、など、街並みの緑と庭を一体化させる景觀づくりを市民の側から行っていければ素晴らしい。そうした意識が広まれば、街を自分の庭と思う心が育ち、街路樹なども大切にされるのではないか。

海外には、街並みの景觀を高める樹木は個人のもでも保全するシステムがある。日本でもそうした取り組みが積極的に行われ、街の緑と住まいの庭の両方が良くなることが望ましい。

個人の住まいをつくる中でも公との調和を考え、街なかの家々がパブリックな要素を併せ持つようになれば、住まいづくりそのものが社会貢献になる。外（公）から内（私）へ、内（家）から外（街）へ、互いの緑の恩恵を分け合いつながる、『公私混合』の美しい景觀を創り上げていく。そうした提案を、庭や建築の側からも発信していきたい。

フォーラムで出会った建築家の方がとてもいいことを言っていた。「住宅を考える上で、歴史的、文化的な背景、自然環境や周囲の植生、自然条件を考慮に入れることはとても大事なことで、外観や植栽はそのまま街並みに影響する。道路から見ても家の中から見ても『つながっていること』が大切で、緑はそのための重要なファクター。街並みに合う家、街並みになる家を目指している。ブツ切りされる街路樹が多い中、街なかの緑を含んだ住まいに資産価値を見い出せるようになれば、街並みも家ももっと良くなる。」。素晴らしい考



人も木も、市（公園）と県（街路樹）の境を超えて行き来する理想的な姿（能代市けやき公園）

えだと感動した。

能代の街路樹や公園の木は、その昔、緑陰の街並みを理想として植えられた。緑陰で繋がる景観都市。これは、今思えば「公園都市構想」のことで、街を一つの森と見る自分の考えと共通する。こうした考えは、街路樹を学ぶ中で最近できてきたことだが、すでに能代では、40年前の先人が考え、実践していたことに驚く。

「青年たちへの夢と希望をのせて『緑をつくり、育て、守る』運動の第一歩」という、市報に残る先人の文章には、「市街に緑深い樹蔭」をつくり、「まち全体を緑で覆うための街路樹や公園緑地の樹木の育成」を行うことの夢と取り組みが記されている。そして、「数十年後には、明日の能代をになう青年たちと、たくましく成長した大樹が能代発展の中心になってくれるだろう、という希望がわいてきます。」と結んでいる。

一昨年にできた能代市緑の基本計画の理念は、『緑の価値に気付く・守り・活かす』。当時の能代は既に価値に気付く、『育て、守る』運動を展開していた。それが、今に続く能代の緑。次代である私たちは、それを踏まえて、『活かす』ことをしていかなければならなかったのだ。しかし能代は、育てた街路樹を守れなかったことで、緑の価値に気付いた。気付いたら、どうやって守り、活かしていくのかを考え、実践していかなければならない。

この緑の基本計画は、公園や街路樹を問わず、市内にある緑すべてについての指針。すべてということとは、個人の庭も公の緑地も自然も、みな繋がっているということだ。『公私混合の緑』。これからのまちづくりは、こんなことがキーワードになっていくだろう。

ブログからのお便り

この頃、日々の暮らしや活動、庭づくりのことなどを書いていた自分のブログに、街路樹についてのコメントをいただいた。ご自分の暮らす街の木があまり良い姿ではなく、何とかしたいという相談だった。匿名投稿の多いネットで、実名と連絡先を明記したコメント。本気の投稿だと感じて、コメントとメールでお答えした。

登山専門誌のライターをされていた方と知り、自然にも造詣の深いことを感じていた。また、幼いお子さんを持つお母さんと知り、母親目線で樹木を見、木を命と捉えていることが、いただいた文面にあふれていた。のちに、地元さいたま市で子育て世代向けの本、「リトルプレスLetters」を創刊された大武美緒子さん。その人だった。

大武さんには、街路樹の先進地、江戸川区の取り組みをお教えした。そして驚いたことに、ご自分の本で街路樹を取り上げ、江戸川区に取材。先進例を学んだところで、さいたま市にも取材。そこで、ブツ切りの多いふるさとの行政に提言を行っていた。届いた創刊誌でそれを知り、あの時ブログにコメントをいただいた方だとびっくりした。

造園の専門誌でさえ、行政に直接取材をするということはない。というより、できないだろう。良い所には取材に行くけれど、良くない所にはなかなか行けないものだ。それを、ひとりの母親であるライターさんがやってのけていること。その度胸の良さとひたむきな心に感動、あらためて、街路樹への本気を感じた。そして、多少なりとも、自分がやってきたことや、これまで知り得た情報が役に立ったとしたら、こんなに嬉しいことはない。

あんまり嬉しかったので、大武さんのこのLettersは、地元の図書館に寄贈させていただいた。緑の大切さに関東も東北も無く、都市も田舎もない。多くのお母さんたちに、子供たちが豊かな緑で遊べる環境を考えてもらいたい。子育て世代の大武さんだからこそその心が伝わるのではないか。そんな思いで、寄贈を申し込んだ。



緑の循環

里山の樹木は、薪や炭、畑の柴など、山間に住む人々の生活に利用される。山や農村で暮らす人にとって、身近な木々は生活そのもの。里山の木は、人が管理をし、必要に応じて枝を切るということでは街路樹と同じだが、大きな違いは、木を捨てるために切るのではなく、活かすために切ることか。

15〜20年周期で更新（伐採）される里山の木は、その時期が来るまでは休む。それまでは酸素を作り、張らせた根で山の崩落を防ぎ、野生動物に食糧を供給し、木々の色づきで人々の目を楽しませてくれる。枝を切らなくても、枯れて落ちた枝でも焚き付けにはなるだろう。

人の生活とともにあり、人に必要な存在になれば、樹木は大事にされる。この里山の循環を、街の緑にも応用できないだろうか。樹木の落ち葉が腐葉土になるように、やむなく切られる街路樹たちも、何かに活用できないだろうか。

以前、工芸作家の作品展を見に行った時、大きな木彫りの木像を見て驚いたことがある。作者に聞いたところ、その木像の素材は、伐採されたイチヨウの街路樹だった。街路樹にも、いろんな使い道があることを知った。

そういえば、江戸川区を視察した際、伐採木の保存場を見せていただいた。そうした木は加工されて、公園の樹名板やベンチとして活かされ、区民に緑の役割や楽しみを伝える啓発のアイテムになっていた。

かく言う自分も、以前、材木屋さんから譲ってもらった丸太をくりぬいて、プランターを作ったことがある。木工品は、野外に置けばいずれ腐るが、腐るまでは使える。腐るのは自然素材だからで、自然は循環するもの。街路樹などは、歩道の下にあるライフラインの整備や道路の改修などで切られることもある。大きくなりすぎて、街なかにいらなくなる時もあるだろう。

そんな時、形を変えてそこに存在させてあげることができれば、街路樹を愛してきた人々の思いを大切にできる。そしてそれは、街の特徴にもなり、新たに植えられる木々の見守り役にもなる。江戸川区のそうした取り組みを見た時、そんな緑の循環ができれば素敵だなと思った。

そしてその年のクリスマス、東京から子どもたちにプレゼントが届く。箱の中には、蔓や松かさ、どんぐり、鈴懸の実などがたくさん入っていた。都会から送られてきた木の実は、もちろん街なかで採れたもの。公園や街路樹の発生材を利用した、木の実でつくるリースだった。

送り主は、江戸川区の知人。このリースは、江戸川区の市民ボランティアの



江戸川区の木の葉のリース



『緑の輪』の新聞記事

この時作製した腰掛は今、市立図書館の玄関先に置かれている。あの、地元紙の記者さんと待ち合わせた、プラタナスの木の実んだ。丸坊主だったプラタナスたちは大きく枝を広げ、本来の樹形を取り戻した。今、記者さんとここで待ち合わせをしたら、間違いなくこの木の下に来るだろう。立派に成長したプラタナスを見たら、さぞやびつくりするに違いない。

この木がある敷地は、昔ここにあった高校跡地を整備したもの。数本あるプラタナスは、学び舎だった頃の校庭の名残りだ。街路樹のプラタナスは街なかでの用を終えて、仲間たちのいる場所に帰ってきた。形は変わったけれど、ここでこれからも、ふるさとを見守り続けてほしい。そんな思いで、ここに置いてほしいとお願いした。

根元には、街の人たちが植えた草花たちが捨てられるのを待っていた。少し分けてもらって、その時手掛けていた庭に植えさせてもらった。聞くと、根元の一部を譲り受けることができるという。それを利用して腰掛をつくり、『制作展示『緑の輪(環)』(伐採木の利活用の提案)』と題して展示を行った。事例紹介として、江戸川区から提供いただいた資料や、腰掛の制作過程も掲示した。小さな腰掛だったが、子どもたちが座ってくれたのがうれしかった。

人たちが取り組む、緑の贈り物づくりだった。これは、公園や街路樹のある街なら、どこでもできる、そして、家族で楽しみながら作れることが一番。いつか能代でもやってみよう。そんなヒントをいただけたこのリースは、自分へのプレゼントにもなった。

そして、幸か不幸か、ヒントが実際になる時がやってくる。商店街の街路樹が、融雪歩道の建設で伐採されることになった。能代の街路樹が変わるきっかけとなった、あのプラタナス並木だった。伐採を伝える新聞記事を見て出かけた時は、すでに切り株状態。数十本の木の根元にお酒を掛けながら、能代の街路樹を変えてくれたことへの感謝を伝え、参集した友人たちと手を合わせた。

雪の弘前へ

1月は、毎度のことながら雪かきに追われる。毎朝、除雪車が置いていく家の前の雪を寄せ、今度は仕事で除雪に行く。すべて人力の作業だから、寒い冬でも大汗をかく。これが植木屋の冬の日常だ。

そんな中、東京からの電話が鳴った。旧知の、造園知人からだった。なんでも、国立市にある桜並木が伐採問題で揺れているとのことと、桜を大切に思う市民が反対運動を起こしているとのことだった。そして、その説明の場として、市が意見交換会を設け、そこで街路樹の話をしてほしいとのことだった。自分の話になるのかどうかはわからないが、街路樹のことで必要とされているのなら、どこにでも行く。

この通りの桜はソメイヨシノだった。ソメイヨシノには、「寿命60年説」というものがあり、それが通説となっている。そして、それを信じる所では、そのぐらいの年数で伐採されることもある。その桜並木は、植栽後50年にも満たないそうだから、まだまだ生きられる可能性はあるだろう。なぜそうした木が、寿命に達する前に伐られなければならないのか。

通りの桜はトンネル状をなしているが、その中の一本が強風で倒木したことが、並木全体の伐採へと拍車を掛けたらしい。倒れた木は腐食が進んでいて、風に耐えるだけの強度が無くなっていた。同じ環境にある桜の木もそうなのではないか、市民の安全を第一に考えるのが行政だから、そんな不安を持つのも無理はない。樹木医に診断を依頼して、倒木の危険度が高いと判定された木を伐採することになったようだが、外見上は全く元気な木も多く、何か手立てはないものか。そんな、木を生かす道筋を探す模索を、志ある造園家たちが探っていた。

自分にできることは何か。桜なら弘前だ。弘前に行けば、何かがつかめるかもしれない。桜日本一の弘前公園は、「桜切るバカ」の常識を覆した所。そしてここには、樹齢100年を超えるソメイヨシノが300本以上ある。これは、「ソメイヨシノ60年説」をも覆しているということだ。

雪道を弘前まで走り、公園の桜に会いに行った。車を停めた駐車場から外に出ると、そこには公園外周のお堀の桜並木がある。道路沿いの歩道に面しているから、条件的には街路樹と同じ環境にある。

そしてこの木たちは、傾斜のあるお堀の斜面にあり、お堀に前傾しながらも、途中から幹を反対側に反らせ、道路上空に大きく枝を張らせている。斜面にある木の根は、山側に大きく根を張らせることで、前傾する体を支えている。ここでは斜面の上が歩道になっているから、十分に根を張らせること

ができないかもしれない。その分、上空に大きく枝を張り出させることで、重心のバランスを取っている。これは、風雪の圧力に耐えられる状態を木自身が作っているということ。

山でも街でも、置かれた環境に樹木が適応した姿が「自然樹形」。このお堀の桜には毎年手が入れられているが、樹木が自分で環境適応していったこの自然樹形を、管理する側が尊重している。そんなことが、この桜並木の姿からは見て取れる。

この桜並木は、木と木の間隔が近く、お堀は土だから根の張れる面積も広く取れ、木同士が伸ばす根は、土の中でがっちりスクラムを組んでいるだろう。地上でも土中でも、木が倒れないような状態を木自身が作っているのだ。

そして、この並木の樹高の低さ。低く枝を張らせる津軽伝統のリンゴの姿形は、風の影響を受けにくい。この、弘前公園のお堀の桜には、街路樹としてのソメイヨシノを長生きさせるための知恵と工夫があふれている。

風の抵抗を受け流す樹形、風を受けにくい樹木の低さ、値の張れる土壌環境、そして、弘前特有の、老化した太い幹を切り上げて、若枝と交代させていく更新の仕方。伐採して若木と植え替える更新ではなく、その木の中で枝を更新させて、木の命を繋いでいく方法。この桜日本一のやり方を、国立に紹介したいと思った。

この日は、日本一の桜管理を指揮する樹木さんからも話を聞いた。「樹木には寿命が無く、木は死ぬまで生きる」。人が心を掛け、手を掛ければ、木もそれに応えて長生きするということだ。このお堀の歩道を歩くと、桜の木に芽吹いたひこばえが縄で幹に寄せられているのを見ることができる。

いずれこのひこばえも枝になり、老幹と交代する時が来るだろう。その時のために、傷まないような配慮がされている。樹木へのやさしさ。公園でも街路樹でも庭でも、それが樹木と接する時の基本だ。そんなことを、この弘前公園の桜は教えてくれる。

桜があまり好きではなかった自分だが、その桜を学んできたことが、ここに来て活きる。弘前の桜たちに感謝した。

低く枝を広げるリンゴの木(弘前市内)



交代のために残しているソメイヨシノの
ひこばえ



風を受け流す弘前公園のソメイヨシノの姿形(上) 片枝になっても生きる桜(下)



連理の桜道

翌月、知人の造園家に迎えられて、国立市に行った。通りの並木には、桜を守りたいと願う市民のメッセージがたくさん掛かっている。伐採が始まった日は、多くの市民が現場に駆け付け、工事が延期されたのだという。通りは、その時の喧騒が嘘のように静まりかえっていたが、伐採予定の木に巻き付けられた市民の声が、並木の保存で揺れる街の様子を物語っていた。

この桜並木には、剪定が行われた跡があった。太い枝が途中で切られるなど、桜に行く剪定としては、あまり適切ではない。雪国でも、除雪で折れた枝を緊急に枝切りすることがあるが、そのような状態と似ていた。樹木医が関わっていてこのような切り方をするはずもないが、そうなっていないということは、よほど緊急性が高かったのだろう。

通りを歩くと、歩道の中に手を繋ぐ親子のマークを見つけた。穏やかな日差しの中、桜の枝影がそこに映り込み、気持ちも温かくなった。手を繋ぐことを『連理』というが、この通りはトンネル並木が名物。剪定される前はきつと、左右の桜の木が連理になっていたことだろう。

桜の木は既に伐採されていたものもあり、そこには若木の桜が植え替えられていた。大きな桜の中に小さな桜が混在する光景は、景観的にはアンバランス。でも、そんな光景にも、物語を付けていけばいい。大きな桜が親で、小さな桜が子ども。歩道で手を繋ぐ親子のマークのように、桜の親子も手を繋げば、ここは、人も桜も手を繋ぐ『連理の桜道』になる。そんなことを思いながら、静かな並木道を歩いた。

通りの整備計画についての意見交換会は、物々しい雰囲気の中で行われた。伐採賛成派と反対派がそれぞれ意見を述べ合うが、誰かが意見を言えばそこにブーイングや拍手が入り混じる。時には怒号のような声も起こり、問題の深刻さや根深さを感じた。まるで、ドラマに出て来るシーンのようだった。

そんな中で先陣を切ったのが、旧知の造園家による、既存桜を保全するための改善案。歩道を新しくすれば、歩道を平らに維持するために、盛り上がった根を切らなければならない。それは木の衰弱を早め、根の腐食を進行させるものになり、樹木の倒木を誘発する。それを回避するために、歩道を橋状に浮かせて、緩やかな勾配を持たせた木道にするという提案。

そうすることで、根を傷つけずに保護することができ、デッキ構造の木道は景観的にもやさしく、歩道が公園のように見えてくる。これまでの街路樹には無い新たな発想に、感動が込み上げてきた。

そんな提案を、緊迫した会場の中で理路整然と行う知人。これぞ、造園家の真の姿だと、同じ時代に生きていられたことを喜んだ。この、比類なき造園

家こそ、あの、千葉の高田宏臣さんだった。今にきくと、街なかに公園のような歩道ができるかもしれない。これからの日本の緑は、こうした志ある造園家が背負っていくのだろう。そんな予感を抱かせてくれるような、画期的な提案だった。

しかし、こうした提案を前にしても会場の雰囲気はなかなか静まらず、そうこうしている間に、自分にも話す機会が巡ってきた。自分は部外者だから、賛否を述べる立場にはない。ケンカをしに来ているわけではないので、並木道で見た親子のマークの話をした。そして、桜を活かせる可能性について、弘前公園の例を紹介した。

とても緊張したが、秋田訛りの自分の話し方は、雰囲気や和らげる効果があったらしい。後でそんな声をいただいて、訛りも時には役に立つものだ、ほっと胸をなでおろした。

そして、そんな国立から帰ると、皮肉なもので、地元のパークの桜に伐採話が浮上していた。この公園の桜は自分が若い頃に植えた木だったから、本当に驚いた。桜を守りたい人たちから請われて東京に行き、帰ってきたら、自分が植えた桜の木が伐られるなんて洒落にもならない。桜の木は、施設の駐車場整備の支障になるらしい。既存木を活かした駐車場整備の例を紹介しながら、桜を残した計画を行ってもらえるようお願いした。

その木たちは今、駐車場で大きな木陰をつくってくれている。国立のように、市民が樹木の保存に声を上げる雰囲気は、まだ地元にはない。おそらく、全国的にも稀だろう。

植えられた木たちは、声をあげることも動くこともできない。そんな木の代わりに声をあげるのが、植木屋の使命。残っても残らなくても、そこに木があることに気付く人は少ないが、花が咲き、木陰ができれば、そこに桜の木があることをありがたく思うだろう。

そんなありがたさが続くように、木の声無き声を拾い、人々に届けていきたいと思う。



歩道で手を繋ぐ親子の姿(国立市桜通り)

国立市は、立川市の隣にあった。立川といえば、昭和記念公園。あの、『街路樹葉っぱの詩』の群馬直美さんが個展を開かれていた所だ。目と鼻の先の所まで来ていて、お会いできたらうれしいと思っていたら、なんと、その群馬さんも会場におられた。3年前の関東視察で個展を訪ねた時以来の再会。

白天の霹靂



駐車場に残された公園の桜たち

この再会が、前代未聞の夢へとつながっていくことになるとは、この時は夢にも思わなかった。

その翌月、群馬さんが能代までやってきた。春の気配が漂う三月半ば、また冬に逆戻りしたかのような吹雪の日に、白い天使のように葉っぱの使者がやってきたのだ。

さて、この白い天使はいつたい、なぜこんな田舎町までやってきたのだろう。国立の意見交換会に参加した群馬さんは、日本の街路樹が危機的状况にあることを知り、自身を救ってくれた街路樹のために、何かをしたいと考えていた。そんな話を聞きながら、能代の街を案内した。

信号待ちでとある施設の前に止まった時、ここを会場に、『小さな街路樹サミット in 能代』を開催したことを話した。資料展示だったこの事例紹介、いつか実際の人たちが集まり、街路樹の会議ができればどんなに素晴らしいだろう。そこに、全国の街路樹を愛する人や、街路樹を良くしたい自治体が集まれば、多くの街路樹を救うことができる。そんな機会をいつか持ちたいという夢を語った。そして、何かを行う時が来たら、全面的に協力することを約束した。

数日後、群馬さんから届いた手紙には、シンポジウムの企画書が入っていた。それは、東京で『街路樹サミット』を開催するという、壮大な夢の企画書だった。まさに、青天の霹靂。いや、吹雪の日に訪れた使者だから、白天の霹靂か。パネラーの人選をお願いされて、それぞれの地で、それぞれの立場で、自発的に改善活動を行う人たちに声を掛けた。市会議員、造園役員、編集者、行政経験者等、あの、「小さな街路樹サミット」に登場いただいた方々など、自分が信頼を持って全国に紹介できる人たち。皆さんから、二つ返事で快諾のお返事をいただいた。

そして、木々の葉が落ち、また白い冬がやってきたころ、前代未聞の、この夢のサミットは実現した。パネラーの人たちは、みな街路樹の同志。そこに参集した聴講者の中にも、これまで教えを受けてきた方がいる。

再会の握手がこれほどうれしかったことは無い。そして、会場に集まった新たな人たちとの出会い。街路樹は、みんなの庭だ。そんな、街路樹を愛するみんなが、この会場に集っていた。他力本願だった夢が、叶ってしまった。神頼みもしなかったけれど、舞い降りた白い天使のおかげで、夢がかなった。神様とはいるものだ。街路樹の神様に、心からの感謝をささげたい。

わが子への手紙

長女が小学6年生になった年の道徳の授業で、「公正・公平・正義」をテーマに親が子にあてて手紙を書くというものがあつた。こんな高尚なテーマを前にすると、自分はどうかとの自己問答が始まり、なかなか筆が進まない。子供に正義や公正を語れるほど立派な人間じゃない。悩みに悩んだあげく、こんな手紙を書いた。

長女へ

この間、「リオの伝説のスピーチ」という動画を君に見せました。大人たちが地球を壊していることに我慢できず、カナダ人の少女がブラジルまで出かけて、世界会議の場で首相たちを叱つたという有名な話です。セバンさんという12歳の少女ですが、君が同じ年になったら、この話を教えたいと思うっていいのです。セバンさんは、スピーチの中で「大人たちはなぜ地球の直し方を知らないのに地球を壊すのですか？」と言っていますが、実は保育園の頃の君から、同じようなことを言われたことがあります。昔、イチヨウの木やプラタナスの木など、能代の街路樹のほとんどは電柱のように短く切られ、木の形をさせてもらえないかわいそうな姿になっていました。それを見た君が、「なぜあの木たちには腕が無いの？」と言ったのです。父さんにはこれが、「なぜ大人たちは、木の直し方を知らないのに、せっかく植えた木をこんな姿にするの？」と言われていたような気がして、君に返事をすることができませんでした。今でも、あのころの君に、何と説明したらいいのかわからない。

それがとても恥ずかしくて情けなくて、子供にウソをつく大人ではいけないと、能代の街の木を守るための活動を始めました。そのための勉強や会議などで君の誕生日や運動会にも出られず、お母さんから怒られたこともあります。木を切っているのは植木屋さんなので、この活動をするということは、父さんと同じ仕事をしている人たちを責めることにもなります。「あまり波風を立てるな。仲間のことも考えなさい。」と、君のお祖父さんからも怒られました。でも父さんは、自分が植木屋であることに誇りを持っている。誇りと良心を持ってこの仕事をしている。植木屋は、木が好きで、自然が好きな人がなるものです。だから、木を育て、木を守る植木屋が、木をかわいそうな姿にすることを許せなかった。

能代は昔、大火が何度もあつて、君のお祖母さんの実家も小学生の頃に焼けたそうです。能代にイチヨウの木が多いのは、水分が多いイチヨウをたくさん植えることで、火事から人の命を守ろうとしたからです。でもそんなこ

とを、木を植えた役所の人自身が忘れてしまったから、役目を果たせない姿になっていたのです。だから、ちゃんとやってくださいと、役所の人を叱らなければならぬこともありました。叱れば相手も気分を悪くします。人を叱るのは、とても勇気の要る、つらいことです。できればそんなことはしたくない。見て見ぬふりをしていればいい人でいられる。波風を立てれば嫌われる。でも誰もやらなければ何も変わらず、木はいつまで経っても切られる。とても悩みました。でも、能代の街の人が誰も気付いていなかったから、自分がやるしかない。

そんなふうに、怒られたり怒ったりしながらも続けるうち、とても時間は掛かったけれど、今、能代の街の木たちはだんだん木らしい姿を取り戻しつつあります。二ツ井小学校の前のケヤキ並木もそうです。ブツブツに切られていたケヤキたちが何年もかかって枝を伸ばし、もうすぐ緑のトンネルになりそうです。そうなった時、父さんはやつと、あのころの君に顔向けできるような気がしています。君に認められたいと頑張ったおかげで、父さんは植木屋の誇りを無くさずにすんだ。だから、君にお礼を言わなければなりません。

「正しいことはいつか必ず通る。」

全国に教えを乞いに行った時、そう励ましてくれた人がいました。くじけそうになる時、いつもこの言葉を思い出しています。「いつか」ということは、自分がしていることや思っていることがいくら正しくても、今すぐには通らないということ。相手は人だから、自分と価値観の違う人に解ってもらうには時間がかかるのです。人の理解レベルはさまざまだから、もしかしたら、自分の伝え方が悪かったということもあるかもしれない。自分の思いばかりを話して、相手の話を聞いてあげてなかったのかもしれない。自分の正当性ばかりを主張して、相手の立場を思いやる優しさが足りなかったのかもしれない。うまく行かない時は、自分がそういうふうになっていることもある。中には、いくら丁寧に話しても、伝わらない人もいます。それでも、伝えるための努力を惜しんではならない。伝えることをあきらめてはいけない。そうすれば、必ず理解者は現れる。善いことは必ず人に理解され、正義は通る。善いことを一生懸命伝えれば、正しいことは必ず理解されます。

これから君にも、そんなことがたくさん起こります。もしかしたら、今起きているかもしれない。自分が正しいと思ったら、それが善いことだと思ったら、まず自分がそれをやり、見本を見せてあげなさい。ゴミが落ちていたら、人に注意する前に、まず自分が拾って見本を見せること。履物が乱れていたら、まず自分が揃えること。見本を見せられないような難しい問題と出会ったら、自分で考えても結論が出なかったら、仲間と一緒に考えなさい。それでもわからなければ、いろんな人に聞きなさい。そして、善いことを教

えてもらったら、それを仲間や後輩に返してあげなさい。それが「恩返し」です。

父さんは、生まれてこの方、勉強もスポーツも仕事も生き方も、人から器用だと言われたことが一度も無い。申し訳ないが、君は、そんな残念な父さんの子供です。でも、不器用でも、ひとつのことを一生懸命やっていたら、いつか必ず思いは実現する。これだけは言える。一生懸命生きなさい。

父より

わが子への手紙は、自分が街路樹と向き合ってきたことの歴史そのものでした。そしてそれは、これからも続き、いろんな夢や人と出会いながら、自分を成長させてくれるでしょう。植木屋でいる限り、生きている限り。

終わり

あとがき

読書の習慣もなければ本を書く知識もない。勧められて書いてはみたものの、長編の書下ろしは初めて。文章表現や表記等、いろんな不備があったかと思っています。若輩の至りに免じて、どうぞお許しください。

さて、この手記を読まれた皆さんは、どんな読後感を持たれているでしょう。著者は役所と闘ってきた人なのか、とか、街路樹がおかしいのは役所やブツ切りをする業者が悪いんだな、とか思われたとしたらごめんなさい。それは私の書き方が悪いせいで、みなさん一生懸命仕事をされています。みんな、置かれた立場で真面目に仕事をしているのに、街路樹はなかなか良くありません。それはいったいなぜなのか。そんなことを、みんな考えていけるようになればと思っています。

実は、最終章を書いている頃、わが子の通う小学校前のケヤキ並木が丸刈りになるという事件が起きました。ブツ切りから10年かけて自然さを取り戻し、もうすぐ左右の枝が繋がるぐらいに再生してきていただけに、本当にショック。あんまり悲しくて悔しくて、役所の人に電話して、思い切り怒りました。その時私は、「街路樹の人」を通り越し、「街路樹の鬼」と化していたことでしょう。鬼の怒りはなかなか収まらず、担当の人に現場まで来てもらい、ここは通路路で、この並木の本蔭があるおかげで子どもたちが安全に通学できていることをお話ししました。そして、どんな風に剪定すればいいのかを木の下で話し合い、その日のうちに剪定の仕方が変わりました。現場で話せばわかるのに、木に触れながら話せば伝わるのに、なぜ木々はいつもかわいそうな姿になってしまうのだろう。この活動はなかなか終わらないなあ。なかなかハッピーエンドで終わることができない。どうやってこの手記を閉めたらいいのだろう。そんなことで悩んでいたら、巻末付録の「街路樹サミット in 立川」が開催となり、ようやく書き終えることができました。

茶道修行の心構えを説く千利休の教えに、「稽古とは、一より習い十を知り、十より返るもとのその一」という言葉があります。私が街路樹に費やした10年も修行だとすれば、それを踏まえて、また原点に戻りなさいということなのでしょう。植木屋の原点とは、「木を植え、育て、守る」こと。なぜそこに木を植えるのかを常に考え、木と人が健康に暮らせる未来を創っていくこと。そんな仕事に携われている幸せに感謝しつつ、これからも、ふるさと能代、ふるさと日本の緑を見つめていきたいと思っています。

長編のご精読、誠にありがとうございました。

ふるさと二ツ井のケヤキ並木の下で
福岡 徹



◇付録

2016年の1月9日、東京の地で「街路樹サミット in 立川」が開催されました。下記は、地元向けに書いたレポートの原文です（2016年2月北羽新報掲載）

街路樹サミットに参加して 上

日本初の街路樹サミット

1月9日、国営昭和記念公園花みどり文化センター（東京都立川市）を会場に、「街路樹サミット in 立川」が開催されました。このシンポジウムは葉画家の群馬直美さんの発案によるもので、「街路樹」を冠したサミットは日本では初めて。それが、公共樹木を管理する行政や専門学会、関連業界の側からではなく、緑を愛する一市民の呼びかけで実現したということに、大きな驚きと意義を感じています。サミットは「街路樹葉っぱの詩」という群馬さんの個展と併せたものですが、ブツ切りや伐採が相次ぐ街の木たちの行く末を按じ、木も人もものびのびと暮らせる未来を願って企画されました。当日は、そうした思いに共感する150名近い人たちが、北は秋田県から南は山口県まで、定員をはるかに超えて会場を埋め尽くしました。その顔ぶれは、国・県・市の行政職員の他、造園家や作庭家、景觀デザイナーなどの造園関係者、都市の緑や自然を考える環境団体、緑に関心を持つ議会議員や一般市民など多種多様。この、職域や地域を超えた街路樹の集いが、日本の緑文化の発信地で開催されたことも、とても意義深いことでした。

基調講演「街路樹を考える」～大都市東京の管理システム～

街路樹サミットは、二つの基調講演とパネルディスカッションの二部構成で行われました。第一部では、東京都江戸川区で街路樹管理に携わられた西野哲造氏（現公益財団法人えどがわ環境財団）が講演。街路樹を取り巻く課題を上げながら、区の方針や取り組みを紹介しました。

○江戸川区の取り組み

江戸川区は東京23区で最も街路樹の多い所ですが、課題を解決するための機関として、官民学が参画する「街路樹のあり方検討委員会」を発足。そこで作成された管理指針をもとに、街路樹と公園の一元管理、街路ごとの目標

樹形(姿や大きさ)の設定、プロポーションによる事業者選抜と選抜事業者への継続管理委託、剪定の際の仕様確認(見本剪定)の徹底と事業者に対する定期的な技術審査や評価の実施、伐採木や落ち葉を捨てずに活用する緑のリサイクル、歩道の根上がり対策、緑のボランティアの育成、HPや広報誌を使った緑の啓発など、多様な施策が展開されています。区内には公園や緑道も多く、隣接する街路樹と一体的な計画管理が行われていることから、それぞれの緑がバランスよく調和しています。一般的に、街路樹は緑化の専門知識を持たない道路の課が計画し、公園管理の部署との連携も少ないことから、公園と街路樹の景観的な繋がりが悪かったり、公園の緑が自然でも街路樹がブツ切りになっていたりなど、統一感を欠いた街並みになることが多く、こうした江戸川区の体制は非常に参考になります。

また、一般的な街路樹では、虫が発生すると木を丸坊主にしたリ薬剤散布で対処したりしますが、江戸川区ではこまめな点検により発生源の枝を剪定するなど、早期の対処で拡散を防いでいます。虫を殺す薬は人間にとっても毒。沿道住民や歩行者に健康被害が及ばないような配慮を行っていることも、江戸川区の優れている所です。時々、駅前の街路樹がムクドリ対策で丸坊主になっている都市も見かけますが、江戸川区では鳥の習性を研究し、枝切りの対処は一時的なものにしかならないことから、「夜の間だけムクドリとの共生を」と区民に理解を求めるなど、動物との共棲を考える優しさもあります。

○街路樹は街の顔であり、住む人の心を映す鏡

区の街路樹はとても丁寧に入れています。これは、そこに予算を掛けられる理解が市民や議会にあるということ。美しい緑の街並みは、官民業の意識が総じて高いということの証です。そして、こうした多岐に渡る取り組みは、管理システムの充実と、それを理解できる専門職員の積極育成によって支えられています。江戸川区には、全国各地から視察や研修が絶えず、講演依頼も多いとのこと。今回の講演は、区の緑のスポークスマンとして啓発に関わってきた、西野氏ご自身によるお話。終始笑顔で話されていたご様子に、緑とふるさとが大好きな気持ちがあふれていました。

能代市二ツ井町 福岡徹 (福岡造園代表作者)

江戸川区の方式は、緑の専門部署が管理する大都市の先進例。正反対の事例として、私が一般的な地方都市の例を紹介しました。2005年の冬、母親の実家近くの街路樹が木では無い姿になったことに驚き、せっかく植えた木を大切にしてくださいと、当時の市長さんに手紙を書きました。その後、

街路樹サミットに参加して 中

基調講演 「街路樹が教えてくれたこと」

〜地方都市の街路樹改善の一例から〜

- ① 近代的な国営施設で開催された街路樹サミット
 - ② オープニングで紹介されたニッ井小学校前のケヤキ並木
 - ③ 街路樹と公園樹が創り出す緑のトンネルを紹介する西野哲造氏
 - ④ 街路樹を取り巻く課題（西野氏のスライドより）
- ※①②撮影 長澤隆志氏（街路樹サミット撮影スタッフ）



④



①



②



③

樹木の生理や景観に配慮したやり方を行政に提案、そのための実践として、街路樹の奉仕剪定や点検観察、落ち葉掃除などを自発的に行う中、若手庭職人の有志で行政や市議会向けの勉強会を開き、正しい樹木管理の在り方を現場と理論で示しました。その年、真夏に木蔭を作れない街路樹への疑問を書いた市民投稿を機に、市議会や地元紙が問題提起、一気に故郷の街路樹は改善へと向かいました。手紙を書いてから4年目のこと。ようやく思いが届き、街の木は木らしい姿に戻るようになりました。街の木の惨状を救うのは「市民の声」であり、木を知る専門者の提案と実践で理解が広まります。そして、正しいことを本気でやれば世の中は変わる。そんなことを、やさしい樹形になった木々を映しながら報告しました。下記は、街路樹の活動を通して、木々から教えてもらったことなどです。

○街なかの「自然樹形」はどうあるべきか

従来の街路樹には「高さや四方の枝を揃える」という整形的な概念があり、それが不自然な樹形を生み出す原因のひとつ。「街なかの自然樹形」を考えるカギは字の如く「自然」の中にあり、「自然樹形」とは、「自然界の樹木が生えた場所の環境に適応していった姿」のこと。自然界にも樹木が楽に暮らせない制約があり、崖の下にある木は崖側に枝を伸ばせず、森の木は、風によって外側の木の丈が低く抑えられ、日の光が届かない内側の木は下枝が無く背が高い。同樹種同樹齢の木でも生えた場所で高さや形が違い、そうした木の集合で森はこんもりとした姿になる。これは並木という「森」でも同じこと。樹木の個性や個体差を無視して画一的に整えると、そうはなりたくない木が反発して樹形を乱す。街路樹には電線や車、建物など、自然界と同じく制約がある。違うのは、自然界の木が時間を掛けて環境対応していくことに対し、人間社会との共存が求められる街なかではその時間が短く、「剪定」という手段を使って、無理のない時間短縮を手伝ってあげなければならぬ。自然界の樹木の有り様を見ることにより、「街なかの自然樹形」が見えてくる。

○発想を変える

「桜日本一」の弘前公園は、「桜切るバカ」の常識や「ソメイヨシノの寿命60年説」を覆したと言われている。旧来の概念に縛られず、オリジナルに高めていった努力が日本一たる由縁。これは街路樹にも言えることで、「自分の街方式」を編み出すことが大切。角館には、屋敷の木を街路樹として観光に活かす武家屋敷通り（新日本街路樹百選）がある。銀杏並木で有名な神宮外苑では街路樹を祭りにし、田園調布や五城目町では木蔭のトンネルを楽し

んでいる。街路樹に「楽しみ」を持たせれば、マイナスをプラスに変えられる。地域にまつわる物語を付加価値として、街路樹を『街の名物』にすることを考えたい。たとえば二ツ井の市日通りの銀杏並木。「連理の銀杏」を周回すると良縁が実るといふ銀杏山神社の言い伝えと、きみまち阪の「恋文」。左右のイチヨウ並木を男・女に見立て、枝が伸びて繋がるとハート形のトンネルになり、『恋理の並木道』が完成する。発想の転換で、街路樹は活性化にも活かせる。

○街路樹の理想は木と人の「共守」

私のふるさととは山間の小さな集落。「向こう三軒両隣」を越えて行く雪かきや、住民奉仕で行う公園の手入れ。田舎には『お互いさま』の精神や会話があり、それが『おかげさま』の心へと繋がる。街路樹は「市民の共有財産」であり、地域の公園と同じ『みんなの庭』。行政に苦情を言う前に、なぜここに木があるのかを考えたい。街路樹には「市民を守る」という大役があり、能代の街路樹は大火の防火対策として植えられた。街なかには、火から守ってくれた木々への恩を忘れない市民の熱望で、国道を曲げて残した街路樹もある（けやき公園）。樹齢300年の日本一のケヤキ並木は今、世界遺産の街で『世間遺産』となっている。藤里町大沢地区には見事なケヤキ並木があり、家々の庭に数本ずつある木が集落全体を守る防風林となっている。個人の庭にある木々が『みんなの並木』になっているのだ。木は人を守るために植えるもので、守ってもらうには、人も木を守らなければならない。人と木が互いに守り合う『共守』の関係が、街なかでも築かれることを願う。

以上、雪国秋田の自然や田舎の暮らしぶりを、雪の無い東京でお話してきました。

能代市二ツ井町 福岡徹（福岡造園代表庭者）



①



②



③



④

① 「けやき公園」の紹介で始めた基調講演

② 自然界の「自然樹形」から『街なかの自然樹形』が見えてくる。

③ 街路樹を「街の名物」として活かす提案の紹介

④ 個人の庭の木が「みんなの並木」となって集落を守る

※③撮影 長澤隆志氏（街路樹サミット撮影スタッフ）

街路樹サミットに参加して 下

パネルディスカッション「命の尊厳」

第二部では「街に木を植えるのは何のため」をテーマに討議。司会進行は、造園専門誌で街路樹問題を提起してきた豊藏均氏（隔月刊誌『庭』前編集長）。パネラーは、埼玉県久喜市で全国初の街路樹条例を提案可決させた石川忠義県議（前市議）、子育て世代向けの冊子で街路樹問題を取り上げ、地元行政に

提言を行ったフリーライターの大武美緒子氏（さいたま市）、造園や社会奉仕団体で街路樹の啓発を行う作庭家の河合耕一氏（富山県）、そして、基調講演者である西野哲造氏と私を加えた5人。編集者として、議員として、子を持つ母として、団体役員として、行政関係者として、一植木屋として、市民にも様々な立場があり、置かれた立場でできることがあります。ここでは、パネラー各自の活動紹介と共に、ディスカッションを行いました。

街に木を植えるメリット

討議は、豊藏氏の「街路樹は法令上『道路の付属物』となっているが、街路樹に使われる「維持・管理」は建造物に使う言葉。樹木には『保護・育成』を使ってあげたい。人間と同じ『命』ある街路樹のあり方を考えていきましよう！」との言葉を皮切りに、「なぜ街に木を植えるのか」について、パネラーが発言。

○街路樹は『街並み景観の創造、木蔭の創出、ヒートアイランドの緩和、歩行者を守る日傘や雨傘の効果、吸塵、防火、防音、都市の雨水を浸透させる排水機能』など多様な役割を持つ。私たちはその恩恵を享受しながらも、樹木が生きるために必要な「落葉」の生理に理解が向かない。この啓発として、地元で「街路樹感謝祭（落ち葉掃除）」を開催、5年目の昨年は造園業界を巻き込み、全県一斉開催を実現した」（河合氏）

○「街に木を植えるのは、庭に木を植えることと同じ。自分の街を自分の庭だと思えば、街路樹にも自分の庭の木同様の愛着がわく（福岡）」。

河合氏の「街路樹感謝祭」には大きな拍手が起きました。富山県の落ち葉掃除は、「木々への恩恵に感謝して」をテーマとする能代市官庁街落ち葉掃除がヒントになっているそうです。

木は切るために植えたのか

○剪定には「刈り込み」と「透かし」があり、街路樹の効果を活かすには「透かし」が最善（河合氏）。

○チェーンソーで太い枝を切り落とされる木を見るととてもつらい。行政の対応は誠実だが、いつもそうなる。木はなぜ街なかで枝を伸ばせないのか。手足をмоがれたような木の姿を、わが子にどう説明したらいいのかわからない。（大武氏）

○むやみな剪定を規制する街路樹条例は僅差での可決で、多数のクレームが市民から寄せられた（石川氏）

樹木を生き物として見る感覚が大切で、必要として植えた樹木の必要性を

説く条例に多くの反対があることに驚きました。

街路樹の意識変換

○「条例に『適切な樹種選択』を盛り込み、街路樹を「自然生態系の一部」と捉えて樹種や大きさに多様性を持たせ、街路樹から街路樹へと野鳥が移動できるような環境を目指した」（石川氏）

○「街路樹を里山と同じような視点で見たい」（大武氏）。

久喜市の条例は、同種同大の高木を等間隔で植える従来の街路樹には無い発想で、街路樹は里山同様に人の暮らしと自然を繋ぐ媒介。生態系としての緑を繋ぐ考え方に『エコロジカル・コリドー（生態的回廊）』がありますが、街路樹を大きな緑の一部として捉えた時、そうした役割も大切になっていくでしょう。

終わりに

質疑応答では活発な意見が続出、「街路樹の落ち葉を堆肥化して活かす自治体もある」、「街路樹の日を設けたい」、「私の街の街路樹も悲惨。なんとかしたい」、「地元でもこうした機会を作りたい」、「市民の行動で街路樹が変わることを知った」、など、参加者の関心の強さと熱気が伝ってきました。すでに地元で活動を始めた人もいると聞いて、サミットの思いが全国に飛び火したことを感じています。

今回の「街路樹サミット in 立川」は、2010年に能代市民プラザで開催された「小さな街路樹サミット in 能代」という展示が原型、プログラムには「けやき公園」の写真が使われています。また、パネラーの大武氏は登山専門誌の取材で白神山地や七座山を訪問、石川氏も能代の街路樹視察に訪れるなど、能代市にとっても非常に縁の深いイベントとなりました。

最後に、このサミット開催に向けて、厳寒の能代に足を運ばれた群馬直美さんに、心からの感謝を申し上げてレポートを終わります。

福岡徹 能代市二ツ井町 （福岡造園代表者作庭者）

①「命の尊厳」をテーマとしたパネル討議

②参加者からの質問と意見交換

③サミット会場内にある群馬直美さんの個展「街路樹葉っぱの詩」

※①②撮影 長澤隆志氏（街路樹サミット撮影スタッフ）



以上